

○	○	○	○	□	○	□	□	○	○	○	○	○	○	○	○	○	□
一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一			
同聞	同講	同講	同嘆	同寶	同肩	同崇	同慶	同講	同樹	同講	同歸	同義	同講	文類聚鈔	同聚鈔	同曜記	
書	判	録	録	鑑	録	記	録	義	録	録	記	讚	録				

六	三	二	四	六	四	五	四	七	一	八	四	五	八	四
卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷
本善	大神	大千	本仰	本道	本柔	本大	本泰	本深	本智	本僧	本法	高慧	大慧	大圓
讓	興	巖	誓	隱	遠	瀛	巖	勵	遲	撲	霖	海	然	澄

○	○	○	○	△	○	△	○	△	△
一六〇	一六一	一六二	一六三	一六四	一六五	一六六	一五九	一五八	一五七
明鏡秘説	教行信證講義	同大意并科段	同行卷聽記	同信卷科圖	同冠註六要鈔	同講義	御自釋助字考	御自釋筆記	御自釋
行卷圖記									

本、文類聚鈔及愚禿鈔の重なる註疏

二	三	一	一	一	十	三	一	一	一	十	十
卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷
大赤山	大湛	不	了	金剛	大不	本僧	大慶	本寶	大惠	大圓	存覺上人
沼邊	靈	詳	嚴	菴	詳	鎔	海	雲	空	爾	上人

○	一	愚禿鈔樹心錄	卷	本智選
○	二	同模象記	卷	本義教
○	三	同溫故錄	卷	本僧銘
○	四	同聞記	卷	本崇廓
○	五	同講義	卷	本深願
○	六	同顯心記	卷	本頓慧
○	七	同仰高記	卷	本道瀛
○	八	同知津錄	卷	本道隱
○	九	同義記	卷	本僧叡
○	一〇	同芙蓉錄	卷	高慧海
○	一一	同大光錄	卷	本道振
○	一二	同橫超錄	卷	本善讓
○	一三	同聞書	卷	大見神
○	一四	同講錄	卷	大見神
○	一五	同禾人錄	卷	本圓月

三、圓熟時代の宗學

天保弘化已後、茲に謂ゆる圓熟時代に活動したる學者を、

學派別に
一、肥後職に到徹・慶恩・曇藏・都西・環藏・開生・沃州・覺音・斷鏡・一專・俊嶺・道見等諸師

二、大心海に百數・葆見・中道・宣界・開精等諸師

三、龍華職に抑提・酒城・力精・支雄・針水・曇城・默雷等諸師

四、荊園派に道命・道振・普嚴等諸師

五、石泉派に淨眼・僧鑑・泰嚴・慧海・義山等諸師

六、越中空華に印定・印持・義諦・巧便・令支・行照・無涯・博仁・行善・戰淨・芳流・印順等諸師

七、堺空華に仁麻・寒淵・得隣・寬寧・海音・善讓・鐵然・鮮明・智量・宗觀・好堅等諸師

八、華嚴閣と石州系と歸南職と圓照寺系とは稍や變るひ、三業系亦た漸やく氣焔揚らす。

九、豐前系は慧穩・慶忍・觀阿・吐月・圓月等諸師

一〇、筑前系に青象・行貞・得聞・星象・介石等諸師

一二、南紀芳英師下に、普天・淨眞・憲英等諸師
一二、九州系乃至眞淳系に至る大・高兩派の學系中出色の人少なからず、概ね上圖に之を列れ、おいた。
扱て是等の諸師、前後相次で起つたが、研究のやり方は概ね、先輩の學說を、祖述反覆する
までにて、著しき進境を認めない、故に學說固定し、生々潑潑の元氣のない處が、今時宗學

界の特色であると同時に短所である。果實も成熟の後に腐敗來り、池水も停滯や、久しうすれば子蟲を宿す、學說の圓熟は臆て、宗學沈滯の原因であつて、明治宗學の不振もこの行き詰つた結果とみれば元より偶然ではないのである。

併し其間にも、由來宗學者共通の氣風とも云ふべき、自説を執つて下らず、他を排して願はないといふ偏狹な態度は、何時しか採長補短の自由主義に傾き、折衷的調和的色彩を認むるに至つた事。眞俗二諦の關係を、宗學上の問題として、研究するやうになつた事。論題を定めて研究するやうになつた事など。新生面として數ふべきものがないではない。其點から見て、月珠師の對問記や、善護師の聽記や、義山師の摘解や、圓月師の詮要や、覺壽師の講議等は、披見すべき註疏である。

新傾向

九 無我の信仰と化風を表現する題號と選號

一、文字上の解釋

〔本文〕顯淨土眞實教行證文類、愚禿釋親鸞集

〔素讀〕淨土眞實の教行證を顯はすの文類、愚禿釋の親鸞集む。

〔連絡〕教行信證一部六卷、全體の意味を綜へ括る所の題號と、著者たる祖師の自名とである。

〔古釋〕先づ題を釋する中に、十一字(序の字を上げて)の中、初の一字と、後の三字とは、能釋の詞、中間の七字は、所釋の法なり。初に顯言ふは、廣韻に云く、呼典の切、明著なり。玉篇に云く、虛典の切、明なり。淨土と言ふは、彌陀の報土、淨土の言、十方に亘るを雖も、意は西方に在り、諸佛の刹に超て、最も精なるが故に○眞實と言ふは、是れ假權に對す。○教行證と言ふは、謂ゆる次の如く、所依・所修・所得の法なり。靈芝の彌陀經の義疏に云く、大覺世尊、一代の教大・小殊なり。雖も、教理行果を出でず、教に因て理を顯はし、理に依て行を起し、行に由て果を克す、四法に之を收むるに、鮮しも盡さざるこなし已上。教行證と教理行果と、其義大に同じ。證は即ち果なり、の二種は、全く同じ、理はこれ教に攝す。彼の義疏に云く、理は即ち教の體、即ち其の義なり。證は即ち果なり、果に近遠あり、近果は往生、遠果は成佛、證に分極あり、分證は往生、究竟は成佛、其義同じ。○文類と言ふは、廣韻に云く、文は無分の切、文章なり、又美なり。善なり。兆なり。玉篇に云く、亡文の切、文章なり。類は

無我の信仰と化風を表現する題號と選號

廣類に云く、力達の切、等なり種類相似たるなり、其の教行證を明す所の文を類聚するが故なり○愚禿は愚はこれ悉なり、智に對し、賢に對す。聖人の徳は智なり、賢なり、實には愚悉に非ず、今愚と言ふはこれ、卑謙の詞。禿は稱して姓をなす。第六卷の奥の流通の文に云く、眞宗興隆の大祖源空法師并に門徒數輩、罪科を考へず、狼はしく死罪に坐す、或は僧儀を改めて姓名を賜ひ、遠流に處す、予は其の一なり。爾れば已に、僧に非ず俗に非ず、この故に禿の字を以て姓を爲す曰上これ其の職なり○釋は沙門の姓、増一阿含經に云く、四河海に入りて復た河の名なし、四姓沙門を爲て皆な釋稱を稱す、曰上之に依て晉朝彌天の道安釋を以て姓をなして永く後代に傳ふ、高僧傳の中に委く此事を列せり、是の故に今愚禿釋等と云ふ。

〔解釋〕顯 顯明・顯彰・顯開・顯示など、續く詞で、明かに説きあらはすこと。

淨土 清淨國土又は嚴淨國土と續き、きよらかなみくにのこと。阿彌陀佛の在す所である彼處に往生することを目的として、教を立てられた淨土門のことを、今は淨土といふ。而して淨土門内には、種々の教あれども、弘願他力を説く淨土眞宗を、正しく茲に淨土と稱せらるゝの祖意であるが、その事は唯この二字文だけでは明了ならず、下の眞實の二字に依て、初めて明かである。

眞實 眞も實も、まこといふこと。普通虚偽の反對の意味に用ふるが、佛教では方便の反對のことに用ふことがあつて、今はその意味。之れに送り假名のの字を付けて、眞實の教行信證と訓んで、淨土眞宗の法門のことを指し給ふの意。

教行證 佛の説き給ひし法を教といひ、私共を迷から悟りに進ませる行ある力を行と云ひ、私共が開かせて貰う悟りの境界を證といふ。具體的に云へば、大無量壽經が教であり南無阿彌陀佛の名號が行であり、西方淨土の往生が證である。後に至つて委しく云ふが、つまり淨土眞宗の法門全體を、茲に教行證と仰せられたものである。

文類 文章のあつまり。後序にも淨土眞宗の證要を鈔摭してとあるし、又實際拜見すると、無雜作に手當り次第、何でも書き集められたのでなく、肝要な文ばかりを、秩序的に并べられてあるから、拜見すればする程、用意周到の跡が窺はれる。

愚禿 愚かな坊主といふ意味。近くは傳教大師の入山願文に「愚が中の極愚、狂が中の極狂塵禿の有情、底下の最澄」と卑謙された文。遠くは南本涅槃經第五に、鈍根にして他を感化する能力なき者を「愚癡の僧」と名けてあるのや、北本涅槃經第三に衣食を得んが爲めに僧となつた者を「禿人」と名け、又かゝる俗人を「禿居士」と名けてあるのが、詞の依り處である。

釋 僧籍に入りし者の總苗で、教祖の釋迦姓の首字を取つたもの。之を始めて名乗つた者は支那の道安法師である。

親鸞 祖師の自名。祖師には此の外善信・綽空の二名がある、善信は御傳鈔に、よしざねと讀ませて、流罪中の名としてあり。綽空は後序より窺へば、吉水入室の時、法然聖人より下賜の

名である。親鸞の名は何時の頃より付け給ひしか不明であるが、之れに依て天親・曇鸞二祖に私淑し給ふ事の、いと深かりし事が窺はれる。殊に教行信證の經たる往還二廻向の法門は、正しく天親・曇鸞二祖の唱へられた所を直に承けられ、其他祖師の法門の立て方は、主として曇鸞大師(論註)に依て、法然聖人(選擇集)を解かれたやうに窺はれる。

集。あつめること。文類の二字と對照して知るべし。

〔校訂〕一、眞本表紙の裏に、「大阿彌陀經支謙譯・平等覺經帛延三藏譯」の十九字を、二行に書いてある。正本と曆本と本文とは、之を題號の次に置く。但し曆本は支謙を友謙に作る、之れ誤である。永本には「大阿彌陀經」の下に「吳月支國居士支謙譯」を二行に割り、平等覺經の下に「後漢月支國三藏支謙譯」を又二行に割り都合三十字を以て二行を作り、位置は正本等の三本と同じ處。佛本及び高本には全く無い。即ち此二行は(一)有無、(二)文字の多寡、(三)位置の前後、(四)支と友の字誤、(五)覺經譯者の相違の五の相異あり眞本恐らく最も正しからむ。

二、大首の題號の下の選號を本文と佛本には「愚禿釋觀覺述」としてあり、その他にはすべて無し。蓋し無き方正しからむ、序分には選號を入れぬ方が通例である。今茲に出せし「愚禿釋觀覺集」の六字は、各本教の巻の大初にある選號を、購職の便宜上、ここに繰り上げて釋したまでである。その代り教巻の始めでは解説を略す。

〔大意〕祖師が、釋尊の説かれたお経や、三國七高僧の論文釋文から、これぞと思はれた肝要な御文を引き抜いて、それを綴り集めて眞宗の教行信證を明かに顯はされたのが、此の教行信

證であるから、その有りの儘を書題にあらはして、「淨土眞實の教行證を顯はすの文類」等と仰せられたものである。

二、信仰上の觀察

一、先年獨逸の或る博物館長が、日本の古い佛像蒐集の爲め渡來して京都に來り、二十日許り滞在して、澤山な珍品を蒐め得て、その説明を友人なる某勸學に頼まれた。勸學は其の品數の多い上に、何れも美術上優秀なるもの許りであるのを見て、あなたは別に紹介者もなしに斯くの如き短日月に、これだけ澤山の、而も何れも珍しい佛像ばかりを蒐められたのは、實に不思議であるといはれたれば。凡そ信仰ある人の作物は、一刀一筆、他の人の及ばざる力が籠つてをるから、私は其點を注意して、蒐めたものが此品々であると、氏が答へられたといふ事を、私は某勸學から直接聞いたことがある。今この教行信證の題號選號を拜見するに當り丁度右の話の如く祖師の信仰が、餘りに鮮やかに、此題號選號の上に現はれてをるのに驚くのである。それは

「淨土眞實の教行證……愚禿……」

といふ九字。特にその眞實の二字と愚禿の二字とは、何を意味するであらふか、これ實に無我の信仰を表示する言葉であらねばならぬ。

無我の信仰と化風とを表示する題號と選號

二、既に斯書の造由を辨する下にも述べた通り、教行信證と三經・七祖・法然聖人とは、深重なる史的關係がある。祖師は是の經釋・佛祖の指導を慕直に信じ給ふて、少しも躊躇せられなかつた。換言すれば唯信佛語であつた、唯信祖語であつた。眞實と形容するも猶ほ愚かである、故に總序には、

「噫、弘誓の強縁は多生にも値ひ難く、眞實の淨信は億劫にも獲難し」と嘆じ。後序には

「慶はしい哉、心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の法海に流す」と慶び給ふた。これ即ち嘆異鈔の謂ゆる、

「親鸞に於きては、たゞ念佛して、彌陀にたすけられまいらすべしと、善き人の仰を被りて、信する外に別の仔細なきなり。」

「彌陀の本願眞實にをはしまさば、釋尊の説教、虚言なるべからず。佛説眞實に、をはしまさば、善導の御釋、虚言し給ふべからず。善導の御釋眞實ならば、法然の仰そらことならんや、法然の仰まことならば、親鸞が申す旨、またもて空しかるべからず候歟。詮する所、愚身が信心に於ては、斯くの如し。」

無我の狀

であつて、眞實と云ひ、噫と云ひ、慶と云はれたもの、皆な同一、無我の信仰狀態であ

機法の深

る。

三、斯くの如き法悦は如何にして起つたか、と云へば自己に徹底せられたからである。私は聖人が、九歳の御歳から、二十九歳の御歳まで、二十年間の叡山御苦學の所得を「定水を凝らすと雖も識浪頻りに動き、心月を觀すと雖も、妄雲なほ覆ふ」の、深尅なる罪惡觀であつたと思ふ。斯の如き内面生活と、入室已後間もない妻帯生活とが、内外相應して、非僧非俗の愚禿であるとの自覺が、湧然として胸中に湧いたことであらふと想像し奉るのであるが。その自覺を赤裸々に筆に表はし、愚禿親鸞々々と云つて、毫しも偽はらざる態度が、實に床しいのである。そこで題號の眞實の二字を法に對する絶對の信頼、即ち法の深信とせば、この愚禿の二字は、現實を暴露せられた、機の深信となり、僅か十字餘りの題號選號の上に、祖師の信仰が、遺憾なく表はれてをるのが、誠に虔とひことではないか。

四、扱て、かゝる信仰が、其まゝ發動して、祖師の教化態度となつた。前に引ける嘆異鈔の「法然の仰まことならば、親鸞が申す旨、また以て、空しかるべからず候歟」とは即ち、その無我の教化態度である。蓮師此意を演釋して御文に、

「親鸞更に珍らしき法をも弘めず、如來の教法を、我も信じ、他にも教へきかしむるばかりなり」

無我の信仰と化風とを表示する題號と選號

教化態度

と、いはれたが。若し謙遜といふ事が、世人の普通に云ふ如く、たゞ姿形や、言葉の上の卑下に止まらずして、全人格の推譲的・卑下的なるを意味するならば、祖師の教化態度こそ、眞の謙遜といふものであらふ。其事必ずしも多く祖師の言行をさがすまでもなく、此の教行信證の題號の上に表はれて明かである。謂く文類の二字が即ちそれであつて、祖師の自著の教行信證をたゞ物置か戸棚か、長持か箆笥のやうな氣で、外延的には何等の價値をも認められず、文章を集めたに過ぎぬと云はぬばかりに銘名してをられる所に、無我の教化態度が看取るのである、けれども内包的の經釋・佛祖のお言葉には無上の價値を認め、

淨土眞宗の詮要

と云つてをられる、これ眞に自己の事業に自己を認めざる、無我の態度ではないか。

三、研究上の参考

題號の三訓

一、古來この十字の題號を讀むに、學者の説種々あれども、之を綜括するに、左の三訓となる。

- 一、淨土眞實の教行信證を顯はす文類
- 二、淨土眞實の教行信證を顯はす
- 三、淨土眞實の教行信證を顯はす文類

題號の訓
方と意味

題號の字、及び文類の字、共に祖師に付き、祖師が自ら、茲の書の眞初めに、「三經七祖中にある要文を集めて淨土眞宗の教行信證の法門を明かにするぞ」と仰せられた意味になるが、それでは祖師の無我の態度と矛盾するやうに思ひどうかして祖意に稱ふやうに讀みたいものだし、先輩の學者方が色々考へられた結果、第二第三の讀み方が産れたものである。

處が第二の讀み方は、つまり第一の讀み方と、同意味になるので、説明を略しておく。

二、第三の讀み方は、類の一字のみを祖師に付け、他の九字を三經及び七祖に付けるので、この讀むと「三經及び七祖中に、淨土眞實の教を顯はされた文も、行を顯はされた文も、證を顯はされた文もある、それ等を集めたものが此書ぞ」と仰せらるゝ事になる。されば此讀み方、前述の祖師の化風と克く一致する譯なる故、先輩の内にも、此説を併せ用ひた人が多い。處が斯の教行信證の梗概を約めて述べられた淨土文類衆鈔の題號から見ても、文類の二字を、此の讀み方の通り、三經・七祖と祖師とに分けて觀ることは、餘りに穿ち過ぎては居まいかの。のみならず、是非とも、斯う讀まなければ、祖師の化風が顯はれぬ譯でもないから、私は第一の讀み方だけで、充分だと思ふのである。即ち第一の如く讀んで、題の字を祖師に付けても、文類の字に於て、充分「愚禿勤むる所 私なし」の化風を表示するから、この祖意さへ徹底せば、強ちに讀み方を、粉らばしく二三にする必要はないと思ふ。

三、併し乍ら祖師も、經論の文の讀み方を替へて、意味を種々に變じられた例は「思ひ切つた自由討究」として、上述の傳記の一節に加へて置いた通りであるから、末學たる私共が、第一第二第三等種々に、教行信證の題號を讀んで、その含蓄する意味を窺はふとするのは、素より研究上には必要であり、祖師の思召にも背く譯ではないのである。

無我の信仰と化風とを表示する題號と選號

要は祖意
に徹底

序でに云つておくが、選號の六字、大首にあるものは、何れも「愚禿釋親覺述」になつてゐる。

四、用語上の疑問

化巻の外題

一、一部の大首と大尾とには、淨土眞實の教行證を顯はす、文類とあるに、化巻の大首のみには「淨土方便化身土を顯はす文類」

方便の詞

眞實中の方便

と仰せられてゐる、これ非常なる用語上の相異であるが、第一その化身土といふは、證の一つを擧げて、教行の二を攝められたもので、教行證の異名と心得てよい。そこで方便化身土は即ち、方便教行證のことであるが、謂ゆる方便の教行證とは、淨土眞實の教行證、即ち純他力の法門に至るまでに授けらるゝ、誘引的の自力的の法門であつて、具體的に云へば、觀經・阿彌陀經の法門である。なぜ之を方便と稱するかは、「親鸞聖人の三經 觀に二種ある」ことを、上の淨土法門の系統の章で述べ、又教行信證の大綱を述べる章でも、「三經八願を説き明す教行信證」已下數項に於て、稍や詳述した通りであるから、彼れを參照して實へば明るのであるが、つまり、佛の慈悲深いお手段で、眞宗眞實の教行信證へ引き込む爲めに外ならない。そこで暫らく區別して云へば、教行信證の前五巻と、第六巻とは、目的と手段との相異であるが、その手段たるや、目的の爲め的手段であるから、矢張り一眞宗教義中のもので、眞實中の方便といふ事になる。されば教行信證全體を綜へ括る、大首と大尾とには、顯淨土眞實教行證文類と稱して、方便の二字は用ゐられてない。

二、それにしても茲に當然起るべき、もう一つの疑問は、内題と外題との相異である、即ち

内題 顯淨土眞實教行證文類……………十字名

外題 教行信證……………十字名

四字名と十字名

となつてゐる。外題の四字名は、内題の十字名を略されたものであることは、誰れでも想像ができるし、又この方が寧ろ、一部六巻の内容には、眞實の教行信證、方便の教行信證、全體が、あるぞといふ事を表はすのに、至極相應しい名であるが、内題の十字名は内容の教行・信・證の四大事項を表はすのに、相應しくない名ではないか、と云ふ疑問である。之れに就て古來大抵先輩は三法と四法といふ問題を設けて、解いておられる。要を取りて云へば

一、顯淨土眞實教行證文類は、顯淨土眞實教行信證文類の意味である。然るに信の一字を省略したのば、

二、通佛教では教行證と立て、信を別にせないから、その世間並みに倣はれたものである。之は對他的の方であるが

三、對内的には、眞宗の信は、絕對他力の信で、私共自發の信でないから、行の中に攝まるべき物柄である、その事を表はす爲めに、故らに信を省略された、之を行中攝信の法門と云つて、祖師のお骨折りの法門である。序でに云ふが、祖師の行といふは、普通に云ふ修行ではなく、私共を救済する行のある力、即ち南無阿彌陀佛である。

十 部旨と造由を示す總序

一、文字上の解釋

〔本文〕顯淨土眞實教行證文類序

大阿彌陀經

平等覺經

友謙三藏譯

帛延三藏譯

〔素讀〕淨土眞實の教行證を顯はす文類の序

〔連絡〕教行信證一部六卷を三分するその第一の序分である。教卷已下六卷が正宗分（本論のこと）で、第六卷の終りの「竊に以れば」已下三枚弱が、流通分（跋のこと）である。

〔古釋〕序とは謂ゆる次・由・述の體。今は述序なり。

〔解釋〕序のべること、一部六卷の歸趣と造由とをのべらるゝのである。

大阿彌陀經 大經の異譯で、佛說諸佛阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經の別名である。譯者譯年等は、上の第二章第三節（五五頁）を見よ。

友謙 は支謙の誤。第九章の校訂一（一八四頁）を見よ。

平等覺經 大經の異譯佛說無量清淨平等覺經の略。二譯あり、上の第二章第三節（五五頁）及び下の第十八章第四節（二八三頁）を見よ。

帛延三藏 平等覺經の譯者としての帛延のこと、下の第十八章（二八三頁）を見よ。

〔校訂〕一、大阿彌陀經等二行十九字のこゝ上の第九章の校訂一（二八四頁）を見よ。表紙の裏にある方を正しと見る。今は曆本による。

二、同上の校訂二の如く、此次に「愚禿釋觀聲述」の六字選號ある本もあれど、今略するは曆本に依る。曆本の方正しと見る。

〔大意〕大概な書物には必ず序文がある。名のある先輩とか、縁故のある人とか、自分が書くとかする、祖師は御自身にかゝせられたのである。先づ初めに三部經の要旨をあげ、次にそれを信する者の幸福と疑ふ者の不幸とを示し、後に自分は三國七祖の御指圖で、その要旨を窺ふ事ができたから、それを斯書に書きあらはすのであるといふ事をのべ給ふのが、今の序文の大意である。

二經列
祖意の

そうして大阿彌陀經等の二行十九字を書かれた祖意は、此二經は、異譯の大經であつて、他師多く之を用ひず、而も祖師は屢々之を引用し給ふ故、特に記憶の爲め、大首に記されたものであらふ、と先輩は云つておられる。異譯の中でも如來會は他師も之を引かれておるから、茲に記さず。又平等覺經に二譯あり、現存の分が、帛延の譯であるとする説、支那已來あつたが、祖師は其説に同じ給ひたこと、茲でよく窺はれる。

部旨と造由を示す總序

二、研究上の参考

序の字及文段のこま

一、古から先輩の學者方が、この序の字に二通りの解釋がある。序はのべるこまであるとは、六要鈔已來、動かぬ説であるが。何ういふこまをのべるのかといふにつき、(一)教行信證に含まれてある法門の要旨をのべらるこまといふ説と、(二)製作の所由をのべらるこまといふ説とあるが、それを調和して、二つ共のべらるこまとする足利義山師などの説が、内容に相應はしいのである。

二、又此序の文の区切りにつき、五分説(六要)・四分説(空華)・三分説(智達師・淨信院)・二分説(香月院)の四説がある。一々穿鑿するの必要なことであるから、私は三分説で解く事にする。最も三分説にも智達師の樹心録と淨信院の略證とは少し相違あれども、私は智達師の分け方に依り、淨信院の意を汲んで下に之を述べやうと思ふ。

三、序文三段の大意

- 一、前述の通り、序分の文は三段に大別することができる。
- 第一段は、竊に以ればより眞理なりまで
- 第二段は、爾れば凡小より遲慮すること莫れまで
- 第三段は、爰に愚禿釋の親鸞より大尾まで
- 第一段は則ち、三部經の要旨を示され、之に又三小段あり。
- イ、始より惡日なりまでは大經
- ロ、然れば已下、逆訪聞提を惠まんご欲すまでは觀經

三々が九段

- ハ、故に知りぬ已下は阿彌陀經の要旨である。
- 二、中の一段が、また三小段に分れて、その中間の一段が教行信證の歸趣である。
- イ、然ればより、是の如きの徳海に如くばなしまでは、上を承け下を起す語句
- ロ、穢を捨てより、斯信を崇めよまでは、眞宗法門の心髓たる行信を勤められ、
- ハ、噫弘誓のより、遅慮する莫れまでは、疑ふ者の不幸を諷しめられたものである。
- 三、後の一段も亦、三小段に分けることができる。
- イ、爰に已下、已に聞くこまを得たりまでは、三國七祖の指導を感勵し、
- ロ、眞宗の教行信證を敬信して、特に如来の恩徳の深きこまを知りぬてふ二句は、所得の信心を示され
- ハ、最後の二句に於て理由を述べて、教行信證はこれ自信の告白である事を明言せられたのである。
- 四、上來三三の九段の意味を綜合すれば、他力の行信は一部の歸趣、一宗の骨目、三部經の所詮にして、迷悟の岐る處、茲にありとし。七祖の指圖に依つて、之を獲得したるまゝを記して之を世に示すのであるといふ程の意味である。猶ほ委しいことは已下之を辯ずるとをりである。

部旨と理由を示す總序

十二 他力救済を高潮する三經の約文

一、大經の約文

〔本文〕竊以難思弘誓度三難度海一大船無導光明破無明闇惠日

〔素讀〕竊かに以みれば難思の弘誓は難度海を度する大船、無導の光明は無明の闇を破する惠日なり。

〔連絡〕三部經の中初めに大經の意味を約め述べ給ふ。

〔古釋〕竊以と言ふは發端の言○難思弘誓無碍光明は、彌陀の徳を讚す、共にこれ十二光佛の中の名、言

を待て之を嘆す○難度海はこれ生死海、十住毗婆沙論に云く、彼の入道の船に乗じて能く難度海を度す已上これ彌陀の利益を讚する文なり故に此の言を用る○無明と言ふは、若し天台に依らば此に通別あり、通惑と言ふは是れ界内の惑、三毒中の癡煩惱なり、別惑と言ふは貪瞋癡を合して、名けて通惑となし、塵沙言無明言、此の二種の惑を名けて別惑と爲す○惠日と言ふは佛惠の明朗なる、之を日光に譬ふ、大經の下に云く惠日世間を照して生死の雲を消除す已上今言ふ所はこれ釋迦を指す、二佛異なりと雖も、佛徳の比況其の義同じ。

〔解釋〕竊以私の淺墓な考を以てかんがへてみるにといふこと。飽まで謙卑の詞である

難思弘誓 とても考へ知ることの出来ぬ廣大な本願。之は佛の慈悲門の側を云ふ。

難度海 衆生界の廣漠なること大海の如く、夫等の衆生、罪深く障重くして、諸佛と雖も容

無明の通別

疑惑が迷本

易に濟度し給ふことができないこと。

大船 彌陀の本願ばかりは、之を濟度し給ふ故、並大底でない大船である。○生死の苦海ほど

りなし、久しく沈める我等をば、彌陀弘誓の船のみぞ、乗せて必ず渡しける」……和讃

無導光明 導るものなき光り。彌陀の光明は、何物も之を碍げることができないこと、之は

智慧門の側よりいふ。光明といふは、力のことである。

無明闇 衆生界は全て黒闇だが、これは無明が本である。無明は愚痴の異名の場合と、疑惑

の異名の場合とあれど、眞宗では通常疑ひを無明とする、本願を疑ふから、迷ひの境界を出る

ことができないのである。

惠日 本によると慧日とあるが、其の方宜しからん、さて慧日とは佛の智慧の日光である。

燈明も闇黒を照すけれど、日光が王である、以て佛の光明に喩へ給ふた。

〔校訂〕惠日 佛本、高本、永本、正本みな慧日とし、草本、眞本、曆本、文本は惠日に作る。慧日とあるを正しと見る。

〔大意〕自分の淺墓な考から考へさせて貰ふのに、阿彌陀如來の不思議な誓願ばかりが、罪惡の私を助けて頂く大船。あの如來様の偉い光明の御力で、溢とい私の胸の疑闇が晴れるのだ。這うして心の内からと、體の外からと、兩方から他力でお仕立取り下さる有様を、釋尊が大經に説かせられてある。

他力救済を高潮する三經の約文

二、觀經の約文

〔本文〕然則淨邦緣熟調達闍世與逆害淨業機彰釋迦韋提選安養斯乃權化仁齊救濟苦惱群萌一世雄悲正欲惠逆謗闍提

〔素讀〕然ればすなはち淨邦緣熟して調達闍世をして逆害を興せしめ、淨業機彰れて釋迦韋提をして安養をわらばしめたまへり。これすなはち權化の仁、ひさしく苦惱の群萌を救濟し、世雄の悲まさしく逆謗闍提を惠まんぞ欲す。

〔連絡〕次に觀經の意味を約めて述べ給ふ。

〔古釋〕二に先づ觀經に依て教興の由を明す中に○淨邦言ふはこれ淨國を指す。若くは樂邦と云ふ、即ち極樂なり○調達言ふは提婆達多。共にこれ梵言、此には無熱と云ふ○闍世言ふは即ち阿闍世。序分義に云く、阿闍世とは乃ちこれ西國の正音、此の地には往翻して、未生怨と名け、亦折指と名け曰上○逆害を興す言ふは、經に云く一の太子あり阿闍世と名く、調達惡友の教に隨順して、父の王額婆沙羅を收執して、幽閉して七重の室の内に置く曰上○淨業と言ふはこれ念佛なり○釋迦言ふは今日の教主、度伏焦と云ふ○韋提言ふは、夫人の名、此には思惟と云ふ○安養を選ばしむと云は、經に云く時に韋提希佛に白して言く、世尊、この諸の佛土復た清淨にして皆光明ありと雖も、我れ今極樂世界阿彌陀佛の所に生ぜん樂已上○權化の仁とは、若し初の義に依らば佛を指す、則ちこれ世雄上下殊なりと雖も、これ別にあらざるなり。若し後の義に據らば、通じて調達闍世韋提を指す、發起衆なり○群萌と言ふはこれ衆生の名。衆生、心中に佛性あるが故に法調を蒙むる類、佛道の芽を生ず、此の理譬く一切衆生に通ず、故に群萌と云ふ○世雄と言ふはこれ世尊の名、又雄猛と云ふ○逆謗等とは重惡の機を擧ぐ。逆は謂く五逆、謗は謂く謗法を以て之を謂に謗法猶は重し。

權化の仁とは誰ぞ

〔解釋〕然則かやうな譯であるからと、前を承る詞。
淨邦 西方阿彌陀佛の淨土、今はその淨土に往生する法門のこと。
緣熟 因緣淳熟にて、淨土門の開ける時節が到來したこと。
調達 釋尊の從兄弟に當る提婆のこと。釋迦に提婆と云つて、何時も引き合ひに出される人彼れ一度出家して、釋尊の弟子となつたが、虛榮心が強く、自分も師を凌ぐほどの、一世の師表になりたいたと、遂に獨立したが、思ふやうにならぬから、嫉妬心を起して、師を亡ぼさうとまで企畫んだ大謀叛人。

闍世 王舍城の君主なる阿闍世王の略稱で、頻婆娑羅王と韋提希夫人の間に出來た子である曾て王と夫人とは子なきを憂ひ、相者をして占はしめた所、王舍城に近き山中に住める一仙人壽盡きたる後、來つて王舍城の太子となりて生れ出でるであらうと告げたから、急に使を遣つて仙人を殺した、夫人は懸て懐胎したが、仙人は怨を含んで絶命したといふので、未生怨といふのである。懐胎十月太子は生れた、然るに是より先、又相者あつて、夫人の懐胎せる子は

他力救濟を高潮する三經の約文

阿闍世王の譯名

成育の後、己が前生の遺恨を酬ゆるであらうと告げたものであるから、王及び夫人は驚き畏れて、出産と共に、之を殺して仕舞ふ仕掛けをしたが、産兒の運強くして、僅かに一指を折いた計りで、命を失ふには至らなかつた、そこで折指といふのである。

逆害 五逆罪の事。阿闍世王は、成育の後、憚僧の提婆から前述の次第を聞いて、父を牢獄に幽閉して餓死せしめ、母をも亦牢獄に送つたのは、正に五逆罪の内、父を殺し母を殺すの逆罪である。祖師の和讃に

「頻婆娑羅王勅せしめ、宿因その期をまたずして、仙人殺害のむくひには、七重のむろにとぢられき。

阿闍世王は瞋怒して、我母是賊としめしてぞ、無道に母を害せんと、つるぎをぬきてむかひける。

耆婆月光ねんごろに、是旃陀羅とはおしめて、不宜住此と奏してぞ、闍王の逆心いさめける耆婆大臣おさへてぞ、劫行而退せしめつ、闍王つるぎをすてしめて、韋提をみやに禁じける。」

と此有様を嘆じ給ふた。

興 犯させたこと。提婆が教唆して阿闍世に、かくの如き大罪を犯させたのである。

淨業 淨土往生の業にて、念佛のこと。

機彰 機類ができて来たこと。念佛でお淨土参りする者が初めてできたのである。

釋迦 世人の悉知せる通り佛教の教祖、釋迦牟尼佛のこと。古來其一代の説法を五期に分ち華嚴・阿含・方等・般若・法華・涅槃の順序とするのが普通の説である、中に於て今の觀經は、最後の法華涅槃時代の説法である。

韋提 韋提希の略稱で、頻婆娑羅王の室、韋提希夫人のこと。此人前述の通り我が子阿闍世の迫害を受けて牢獄に幽閉さるゝ身となつたが、強烈なる厭世の念から、身心解脱の道を釋尊に請はれた、此時の説法が即ち觀經である。

選二安養 釋尊の説法によりて、韋提希夫人、西方阿彌陀佛の極樂淨土に願生の念を起されたこと。

〔大意〕、上に述べた様な、釋尊が大經に説かせられた他力の慈悲と智慧とは、單に空理や空論でなく、私共を助けて頂く、實際的の力であるから。夫れが生き／＼して活いて下さる時節が到來し、それを我身の上に實行させて貰ふ機類ができて、同じ釋尊時代に、彌陀のお他力が人生に實現されたのである。それは正しく王舍城の悲劇が因縁となつたので、提婆が阿闍世王を陵かして、父を殺し母を幽閉せしめたから、母の韋提希は世を厭ふて、解脱の道を釋尊に

王舍城事件と我等

求むる事になり。釋尊は之に對して十方諸佛世界の内、西方極樂淨土へ生るゝのが、究竟の解脱であることを教へて、彼れの熱烈なる願生心から起つた眞摯な要求に對し、往生の方法として他力念佛を勧め給ひ、韋提希は之を實行して、凡夫往生の第一人者となつたのである。されば韋提希は私共の爲めに、西方往生の先達をせられた人、即ち善知識と云はんければならぬ。然るに之れ韋提希の自力でなく、全く釋尊の加被力に由るのであるが。而も亦韋提希の苦悶と阿闍世王の逆害とは密接なる關係があり、阿闍世王の逆害は、全く提婆の教唆によるものであるから、つまり當度の事件に關係ある方々は、皆この他力救済の實現に一大背景たるもの誠に甚深不可思議の因縁と云はんければならぬ。かるがゆゑにこれをたゞ歴史上の一事實として、冷靜に看過す譯には參りませぬ、何だか之を通して如來の温かい救ひのみ手が、私共惡人凡夫の上に展げられて居るやうに感ぜざるを得ませぬ。次の文章より見れば、確かに祖師はさう感ぜさせ給ふた事がわかるのである。

〔解釋二〕斯乃 上を指すの詞、斯とは王舍城事件のこと。

權化仁 權者化現の人の慈悲心。即ち悟りの境界から姿を現はした人々の同情親切を云ふ。

釋尊は固よりのこと、提婆、阿闍世、韋提希等、此事件關係の一切の人を、祖師は權化と眺め給ひ、事件其物を、祖師は、彼等の慈悲的のお計らひと眺め給ふた。

齊 共に、一様にといふ意、和讃に「大聖おのゝもろともに」に同じ。

苦惱、群萌 苦に悩む衆生、即ち私共のこと。これは身心に受ける私共の境界の有様。

世雄、悲 世間の雄者の慈悲、即ち如來の慈悲の事。

正 目當てにすること、よくいふ本願の正客とすること。

逆誘闢提 五逆と誘法と無信とである。共に佛とも法とも知らぬばかりでなく、之に反ふものである、之は身心に犯せる私共の罪咎の有様。

〔校訂〕救濟 永本のみは、濟の字なく、たゞ救の字あるのみ。他の諸本は皆な救濟とせり、此の方正しからむ。

〔大意二〕王舍城事件は何の爲めに起つたかと云へばこれすなはち、如來の慈悲心より現はれ給ふた權化の方々が、丁度舞臺に於ける役目は異れど、俳優の目的が、觀客を喜ばすことに於て異らぬやうに、苦に悩む私共を、助けて頂く爲めに外ならなかつた。これも畢竟、如來様の本願の正客として、當り前から云へば、助かる縁も手が、りもない五逆・誘法・闢提の我等を、佛にしやうが爲め、お方便であらせられたのである。と祖師は全然信仰上から御覽じ給ふたので、和讃にはこれを和けて、左の如く詠嘆せられました。

「彌陀釋迦方便して、阿難目連富樓那韋提、達多闍王頻婆娑羅、耆婆月光行雨等。

大聖おのゝもろともに、凡愚底下のつみびとを、逆惡もらさぬ誓願に、方便引入せしめけ

他力救済を高揚する三經の約文

如來の方便

り。]

三、小經の約文

〔本文〕故知圓融至德、嘉號轉惡成德、正智、難信、金剛、信樂、除疑、獲證、眞理也。

〔素讀〕かるがゆへに知り、圓融至德の嘉號は惡を轉じて德をなす正智、難信、金剛の信樂は疑をのぞき證をほむる眞理なりと。

〔連絡〕最後に阿彌陀經の意味を約めてのべ給ふ。

〔古釋〕圓融と言ふはこれ隔歴に對す、乃ちこれ圓滿融通の義なり。この阿彌陀の三字は、空假中の三諦の理なるが故に、名けて圓融至德の嘉號と曰ふ。難信、金剛の信樂とは他力眞實信心の相なり。難信と言ふは大經の下に云く、極慢と弊と憍怠と、以て此法を信じ難し已上。又云く人信惡あること難し已上。又云く若し斯の經を聞いて信樂受持すること、難が中の難なり、此に過たる難は無し已上。小經に云く一切世間の爲めに此の難信の法を説く、これを甚難と爲す已上。○金剛と言ふは他力の信樂堅固にして動ぜざることを、唯を金剛に假る、これ不變の義なり。

〔解釋〕圓融 内に功德の滿つるを圓と云ひ、外に向つて自由自在の作用あるを融といふ。小經に佛の名號に、光明無量壽命無量の德ありとし給ふは圓の意味で、衆生をして亦光明無量壽命無量ならしめらると説き給ふは融の意味である。

至德 至極の功德のこと。小經に名號を萬善萬行に比べて多善根多福德とせらるるもの、即ちこの意。

嘉號 善美を盡した名號。内に功德滿ち外に自在の作用あり、他に比ぶべきものなければ、嘉號と云ふの外はない。

轉惡成德 惡を轉じて功德となすこと。これ圓融至德の名號の活動相である。小經に釋尊が我れ是の利を見る故に之を説くと仰せらるるがそれである。

正智 正しい智慧。煩惱の妨のない佛の智慧は、諸法を正しく見給ふのである。故に衆生に之を得れば「智慧の念佛」となる。

已上の二句は、小經に依つて他力の大行を明させられたものと先輩諸師は云はれてある。之に對して、次の二句は他力の大信を明されたものと云はる。

難信 自力の計らひ強き我等では信じ難いこと。小經に難信の法と云つてある、法の優れたこと、自力の惡むべき事とをあらはす詞。

金剛 ぐちけず堅いこと。自力で築き上げるのでないから金剛堅固である。小經に不退轉を得るとあるがこの意味である。

信樂 信心の異名である。

除疑獲證 此の如き他力のお計らひで、我等の疑ひを取り除いて下されるから、證りを開く仲間入りを見せて頂くこと。獲の字、祖師に在つては現益と取るが通常である。小經では六方

他力教濟を高潮する三經の約文

大行と大信

の諸佛、釋尊の説法の誠實なることを證明せられ、衆生是れに依つて信を起し、正定聚に入る
と説き給ふのが、今の意味である。

眞理 眞實の道理。釋尊の説法も、諸佛の證明も、私共の除疑獲證も、みなまことの道理
である。

〔校訂〕金剛・獲證、正本・原本には剛の右傍に「徳イ」さあり。文本には剛の右傍に「徳イ」さあり。永本・高
本・佛本にはすべて「徳イ」の字なし。各延本にはみな獲徳に作る。思ふに原本に獲證とするものさ獲徳とする
ものと二種ありしならむ。正・歴二本の剛に「徳イ」さ傍したのは印刷の時の誤であらふ。

〔大意〕さういふ譯であるから、徳の上からも、用の上からも、此上なき如來の名號は、私共
の罪惡そのまゝを、功徳に轉じ替へ下さるやうな、佛の御智慧の顯はれであり。用のない自
力の計らひでは、仲々に信じ難い他力の堅い御信心は、迷ひの原たる疑ひを除いて、早や此世
から御佛様の仲間入りをさせて頂くに、間違ない道理であるぞといふことが、阿彌陀經の御説
法で窺はれるのであります。

四、信仰上の觀察

一、已上教行信證の冒頭にのべ給ふた三部經の大綱は、言簡なれども、祖師の三部經觀を
遺憾なく表はし給ふてある。祖師は法門の取扱上では、大經弘願眞實・觀經要門方便・小經眞

門方便と、三經を文面上から差別して取扱ひ給へど。すぐ様それを信仰上から味ふて、三經は
みな同じく、他力の救ひの御手の展び行きた姿、佛意に何等の異りはないと、たゞ其點を悦び
給ふた事は、前にも一再ならずのべて置いたが。今亦その歸趣の所を表はし給ふてある。

二、先づ文章全體の上から觀れば、初めに大經・次に觀經・終りに阿彌陀經といふ順序で述べ
給ふてあるが、此の順序は既に七祖の中に在り、勿論祖師に初まつた事ではなけれど。この順
序は、とりも直さず、彌陀釋迦二尊の深き思召を籠めさせ給ふた所で。先づ初めに大經を説く
は他力の法を説じ、次に王舎城事件を手縁として觀經を説くは、相手の機類が惡人女人である
事を事實上に證明し、終りに阿彌陀經を説くは、前の二經の意味を綜合し他力の彌陀法の最も
優れてをることを結論せられたものと、かういふ風に味はひ給ふたのである。古來これを大經
は法を説き、觀經は機を説き、阿彌陀經は機法を合説し給ふと言はれてをるが、これ單に無味
乾燥なる學究上の順序でなく、祖師の信仰眼に映じたる他力彌陀法の開展する順序を斯くの如
く示されたものである。

三、次に文辭の上から觀れば、或は難度海を度する大船、或は無明闇を破する慧日、或は惡
を轉じて徳を成す正智、或は疑を除き證を獲しむる眞理など、何れも他力を表はす詞である
が。特に觀經の所で、最も其意味が著しい。即ち釋尊も提婆も章提も阿闍世も、共に彌陀の

善導と祖
師の章提
觀

阿闍世を
自分と見
る

慈悲の表現とせられてある。彌陀が提婆となり、阿闍世となり、釋尊となり、韋提希となつて
 斯様な芝居を仕組んで、私共にお見せになつたと解釋し給ふたが。何たる偉大な信仰であら
 う、何たる徹底せる他力の高潮であらう。然り而して祖師はかゝる信仰上の觀察から、彼の王
 舍城事件中の人物を、悉く自分を他力に導く善知識とせられたが。特に想ひを西方に運ばれ
 た韋提希夫人を、自分の往生の道開きをして下さつた善知識と崇め、其恩に感激し給ふたので
 ある。これ善導大師が其昔、韋提は實際の凡夫と解釋を下されたにも拘らず、祖師は之を權者
 と崇め給ふた所以であつて、大師に背かれたやうに見ゆるが、實際はさうでないのである。何
 となれば大師は之を自分と見て、實凡説を立て給ひ、祖師は之を自分の善知識と見て、權人説
 を立て給ふたので、どちらも信仰上に浮んだ韋提觀である。昔からこゝの所を「韋提の權實」と
 いふ論題の下に詳しく辯するが、要はかゝる相異があるといふ事が知れ、ばよいのである。

四、それから祖師は、阿闍世王の上に自分の姿を見給ふたのである。阿闍世王は現に五逆罪
 を犯した許すべからざる大罪人なれども、五逆罪を犯した者は、必ずしも三千年昔の阿闍世許
 りではない。五逆罪には小乘的に云ふと、大乘的に云ふとの相異あるが、大乘眼より見たる五
 逆は、末世の凡夫として之を犯さない者はない、差し當り親鸞がそれであると云つて、涅槃經
 に依り長々と阿闍世王の事蹟を引いて、深く其の上に自己を味はひ給ふた有様が、信卷末の終

りに出てをるのである。彼所の意味から今の序文の所を、溯りて窺へば、阿闍世王なる者は、
 佛が親鸞の機相を知らせる爲めに、彼れとなつて現はれ下さつたもので。彼の阿闍世のやうな
 罪深い自分が、韋提夫人の先披露で佛の御國へ參らせて頂くやうになつたのは、どう考へても
 不思議な他力の御手廻しとしか思はれないと、何處へまでも他力の救済を高潮せられたのが
 この一段の文意であります。

三 信疑得失の勸誠

一、上を承け下を起すの文

〔本文〕爾者凡小易修眞教、愚鈍易往捷徑、大聖一代教無如是之德海。

〔素讀〕しかれば凡小修し易き眞教、愚鈍往き易き捷徑なり、大聖一代の教この徳海にしくなし。

〔連絡〕信行を勧め疑慮を誡むる中、初めに上承起下の文。

〔古釋〕捷徑と言ふは速疾の道なり、宋韻に云く捷は疾業の切、獲なり、次なり、疾なり、姓なり、勝なり、成なり、説文に獲なり、軍の獲得なり。

〔解釋〕凡小 凡夫小人のこと、凡夫と小人と別ではない。

易修 行ひ易きこと、之れは因の方より云ふ。

眞教 眞實の教、方便の教でないこと、之れは教の實質より云ふ。

愚鈍 愚痴鈍根。

易往 往生し易きこと、之れは果の方より云ふ。

捷徑 ちか道、之れは教の利益より云ふ。

大聖 釋尊のこと。

一代教 聖道門八萬四千の法門。

徳海 功德の寶海にて。上の三部經の歸趣たる他力行信のこと。

〔大意〕されば三部經の教義は、私共のやうな凡夫小人には誠に相應した實行し易い御教であり、往き易い近道であつて、釋尊御一代の法門の中で、此の御教に及ぶものはないのである。と一往を結んで更に下を呼び起し、それであるから私共は、此法に依らねば外に助かる道はないとの意味。

二、行信を勧むる文

〔本文〕捨穢忻淨迷行惑信心昏識寡惡重勤多 特仰如来發遣一必歸一最勝直道一專奉一斯行一唯崇一斯信一

〔素讀〕穢を捨て淨を忻む。行に迷ひ信に惑ひ。心昏く識寡く。惡重く障おほきもの、ここに如来の發遣をあふぎ、かならず最勝の直道に歸して、專この行につかへ唯この信をあがめよ。

〔連絡〕他力の行信を勧め給ふ一段。

〔古釋〕如来の發遣とはこれ釋尊の指授○最勝の直道とはこれ彌陀の願力。

〔解釋〕捨穢忻淨もの 穢は現實界の人生。淨は理想郷たる極樂淨土。彼れを厭ひすて、此れ

を祈ひ求むる人はといふこと。

迷^レ行^レ惑^レ信^レもの 行は修行で、あの修行も此の修行もやつて見たが、どれさら成そうにないから迷ふ。信は信仰で、確乎不拔な信仰がないから惑ふ。そういふ煩悶を懐いて居る人はといふこと。

心昏識寡^〇もの 生れつき愚かなのを心昏と云ひ、後より加ふる所なきを識寡といふ、共に愚かなる人のこと。

發遣^〇 行けよのおすゝめ。

直道^〇 すぐみち、来いよの呼聲。

斯行斯信^〇 三部經の歸趣たる他力の行信のこと。私共を助けて頂く活力が他力の行で、間違はさぬの確信が他力の信である。

奉崇^〇 奉事し崇敬すること、法の深信を表はす詞。

〔校訂〕一、心昏 諸本皆な心昏に作る、原本のみ心昏とす、これは誤なり。

二、邪多 高本は障多に作り、他はみな邪多に作る、意同じ。

〔大意〕この世界の眞に穢い、厭ふべき世界たるを知りて、想ひを彼の淨らかな如來のみ國に運ぶ人よ。種々の成がたい自力の修行に浮き身を棄し、内に確乎たる信仰もななくして煩悶する人

他力の行
と信

我機の愚鈍にして道理を明むる能なき人よ。罪惡深くして、迷の巷を離れることのできぬ人よ。諸人は上に示した釋尊のお勸めを我が爲めと仰ぎ、彌陀のお喚に間違ひなく順がひ、他力の行信を我物にせよ、之を措て外に惡人凡夫の助かる道はないのである。

三、疑慮を誠しむる文

〔本文〕噫弘誓強緣多生^ニ 巨値^ニ 眞實淨信億劫^ニ 巨獲^ニ 遇獲^ニ 三行信^ニ 遠慶^ニ 宿緣^ニ 若也此迴覆^ニ 蔽^ニ 疑網^ニ 更復還^ニ 歷曠劫^ニ 誠哉^ニ 攝取不捨眞言超世希有正法聞思^ニ 莫^ニ 遲慮^ニ

〔素讀〕噫弘誓の強緣は多生にも値ひがたく、眞實の淨信は億劫にも得がたし、たま／＼行信をば、さなく宿緣なよる／＼、もしまたこのたび疑網に覆蔽せられれば、更りてまた曠劫を還歴せん、誠なるかなや攝取不捨の眞言、超世希有の正法、聞思して遲慮すること莫れ。

〔連絡〕他方法に遇ふの因緣淺からざるを示して、疑慮ふもの、不幸を誠むる一段。

〔古釋〕四に聞法の緣を顯はして、人をして隨喜せしめ、及び疑慮を誠むるの文、見易し○眞言と言ふは陀羅尼に非ず、別しては眞宗誠言の理に由り、總じては佛語誠實の義に依て眞言と曰ふなり。

〔解釋〕強緣 佛の手強い緣のこと、物柄は大行のこと。

淨信 淨らかな信仰、之れは大信のこと。

多生 多々生を更ふる間のこと。

信疑得失の勸誠

億劫 億の劫、劫は長い時間のこと。

遇 珍らしくも、不思議にも、稀にもなご、同意。

宿縁 元來は宿世の因縁の約、今は結縁の意味。衆生を一度佛にせずばといふ慈悲の御心が、私共の上へ加へられつゝあること。

疑網 疑ひの網。網が魚鳥等を捕へて脱さぬ如く、自力疑心の爲めに、私共は迷界を出ることができぬ。

覆蔽 おほふこと、かぶせかける、蓋をするなどの意。

更復 かわりかさねること、輪廻轉生の意を表はす。

聞思 よく聞きひらくこと。

遲慮 二の足踏んで、あやふやに思ふこと。軽い疑ひの一種。

〔校訂〕一、遇獲 草本・眞本・曆本・佛本・高本。基本みな遇獲に作り。永本・正本・文本は遇獲に作る。意同じ。略書に遇獲信心とあるに照して、遇の字可。

二、疑網 曆本のみ疑網に作り、他はみな疑網に作る、後者正し。略書の例をみよ。

三、更復 復の字眞本に無し、諸本みな有り、略書には必の字に作る。

四、贖劫 曆本・文本及び略書、共に贖劫。永本・正本・佛本・高本には贖劫に作る。後者正し。

〔大意〕あゝほんに、生々世々にも値ひ難いが如來の御力、千劫萬劫にも獲難いが他力の信仰である。それ故たま〜此行信を獲ることのできた者は、まことに此上もない我身の幸福であつて、それにつけても永い間の御育ての御縁を慶ばねばならぬ。若しや若し今生只今、疑ひの網に覆はれて、他力の行信をよう頂かなんだならば、又も珍らしからぬ迷界に輪廻轉生して長い後生を迷はねばならぬ。誠なるぞ慮りはないぞ、攝め取つて捨てすことある如來の金言、世にも類なき他力の御教を、よく聞いて、ゆめあやふみ給ふなど。

四、教義上の問題

一、已上序分第二段の意味は要する處、表裏二面より他力行信を勧め給ふ事になる、故に此一段の前後を貫ぬく所の主題は、他力行信である。然るにこの行信たるや當に此一段の中心問題たるのみならず、實に教行信證の主要問題で、同時に眞宗教義の主要問題である。

抑も行と云ふは何か、信といふは何か、又行と信との關係は如何といふ事に就ては、本書第二篇の冒頭に於て稍や委しく辯ずる積りであるが、今要を取りて云へば、私共を助けて頂く實際的の活力を、祖師は行と稱し給ひ、其の行なる活力が、私共の心に徹した所を、信と稱し給ふのであるから、行信は大體上では法と機との別であるが、而も機の上の信は、法たる行の徹した外にないから、信即ち行となつて、法の上に行信共にある事になる。茲に「圓融至徳の嘉

號」と云ひ「難信金剛の信樂」と云ひ、今又「斯行に奉へ」斯信を崇めよ」と云つて、共に客觀的、法の上に、行信を談じ給ふたのは、蓋し此の謂である。所が又次に「遇行信を獲ば」と云つて主觀上に獲得する行信のことを談じ給ふてあるが、信の事は勿論云ふを俟たず、主觀の上の行とは、如何なるものなりやと云へば、信とは何を信することなりや、曰く行の活力を信する事である、而已ならず信其物が既に行の活動である、行が働いて信になるのである、又信の發表たる念佛も亦た行の活動である、即ち法の上の行が入り來つて、機の上の信となり、念佛となる、而して機の上の行とは、その念佛を押へて行と名けるのである。

斯くの如く行信は、法の上に於ても、機の上に於ても、共に談じ得るものであるから、一概に云ふ事はできないけれども、大體上行は法とし、信を機とするが祖師の思召であり。時々法に於て行信を談じたり、機に於て行信を談じたりし給ふ所があり、又此の三者どちらとも見られる談じ方もあるから、その邊は深く注意を拂つて、祖意の在る所を窺はねばならぬ。

二、此一段には行信問題の外、種々の重要問題がある。初めから云へば、

「大聖一代の教、是の徳海に如く無し」

との給ふてあるのは、他力念佛を以て諸教に超え過ぎたものとし給ふ思召である。抑も念佛の諸教に超え過ぎるものとするの意味は、已に三部經殊に大經に顯はれ、三國の祖師を経て、法

然聖人の選擇集の選擇本願の釋に於て、殆んど大成せられてあるが。祖師は之を承け給ひ、最も理論的に説かれたのが行卷であり、秩序的に辨じられたのが、二卷鈔の二雙四重の教判である。而して今の序文に一言其意味を漏らして、此の如く仰せられたものである。

三、次に「捨穢忻淨」の四字から、古來先輩諸師は大底、聖道門と淨土門との求道上の形式に相違ある事を辯じて、聖道門は厭穢忻淨の次第、淨土門は忻淨厭穢の次第と、區別があることせられてある。厭穢忻淨の事は「大意」に述べた如くであるが、忻淨厭穢は丁度その反對で、想ひを彌陀のみ國に運ぶやうになると、是まで厭はしくもなかつた穢土が、自づと厭はれるといふので、其の理由を、存覺師淨土見聞集にのべ給へて、

「そも〱楞嚴の先徳の要集、禪林の永觀の十因等は、厭離穢土忻求淨土と、なれたり。しかるに親鸞聖人の御相傳には、忻求を先にし厭離を後にせよとの給へり、その故は穢土を厭へんとすゝむとも、凡夫は厭ふ心あるべからず、これを厭はせんとすゝめんとすゝめに、まづ忻求淨土の故をきかせぬれば、をしへざれども信心を獲得しぬれば、穢土はいとはるゝなりと仰せありけり。されば教行信證、淨土文類聚鈔、愚禿鈔等の御作にも、また淨土和讃正像末法和讃等にも、かつて穢土を厭へとも、無常を觀せよとも遊ばされたる一文なし。つらくこのことを案するに、まことに信心ひとたび發起せしめたまひぬれば、教へされども穢土は

形式と信
仰との別

厭ひぬべし。またたとへ厭ふ心かつてなくとも、信を得ば往生疑ひなし、一言なりとも他力發起の法門最も大切なり。」

とある。所がかういふ求道上の形式を捕へて、之れを直に信仰だと早合點してはならない。其事は存覺師も用心深く注意せられて、

「たとへ厭ふ心かつてなくとも、信を得ば往生疑ひなし」

との給ふたのである。「信を得る」とは何か、如來の慈悲を知ることである、如來の慈悲は知つても、必ずしも熾な厭離穢土の念は起らない、現に祖師も「苦惱の舊里が捨て難い」とも、娑婆が「名残惜く思はれ」とも仰せられたのである。

それでは忻淨心はどうであるかと云へば、それも「未だ生れざる安養の淨土は戀しからず候」とあつて、甚だ熾ではない、のみならず信巻末には、

「悲しき哉愚禿、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の數に入ること喜ばず、眞證の證に近づくことを快まず、恥づべし傷むべし」

と仰せられて、厭離心も、忻淨心も更に熾でないと思嘆し給ふたのである。されば忻淨厭離は聖道門の厭離忻淨と異なる、淨土門特別の求道上の形式ではあるが、どこくまでも之を信仰上に及ぼして、此の形式が亦た信仰生活の上にあらねばならぬと考へる必要はないのである。

求道及び
法悦は寧
ろ逆縁

忻淨中の
厭離

況んや淨土門の求道者にも、自分の病氣や、隣人の死や、或は自分の罪惡や、そういふ色々の自己及び人生の問題に逢着して、それから信仰に入る者も往々ある、こういふ人は却て厭離穢土忻淨淨土の順序になつて居るやうだし。殊に信後生活の上には、順縁逆縁共に法悦の助縁と云ふ中にも、順縁の兎角少い此世界の有様として、逆縁から悦ばせて頂く事が多いのである。要するに教義上では忻淨厭離の次第であるけれども、事實上厭離忻淨の次第なる場合が甚だ多い事を知らねばならぬ。そこで祖師の定め給ふた忻淨厭離の次第は、甚だ範圍の狭い、従つて殆んど形式上の空文になつて来るやうな憂ひがありはせぬかといふ事になるが。そこが研究のし所であらふと思ふ。私丈の考へであるが、祖師は實際多くの淨土門の求道者が厭離を先にし忻求を後にするに拘らず、又祖師御自身の求道の態度も、殆んど夫れに似て居るやうに窺はれるに拘らず、何が故に忻厭次第を以て淨土門の求道の態度と定められたであらうか、之れには深き思召があらうと思ふ。

惟ふに祖師が彼の三經殊に觀經に對して、釋尊も韋提も提婆も阿闍世も、悉く彌陀界化現の權者、私共引入の方便であることせられたる見地及び、今の文に遇行信を獲ることは遠劫已來の他力の賜だとせられたるより窺へば、私共の信仰生活と求道時代とを問はず、皆な等しく他力路上の屈折であるとし給ふ御考へである。されば偶厭離を先とし忻淨を後にする

者あるも、その厭穢たるや忻淨中の厭穢である、換言すれば他力の厭穢である。自分では一廉自力で厭穢した如く考へても、謂ゆる遠慶宿縁で、他力中の厭穢であるから、忻淨厭穢の形式に少しも變らないのである。詰り祖師の忻淨厭穢の教義は、五十年の私共、而も其の短い求道時代の一形式のみを語り給ふものではなくして、過去の過去より未來の未來際に亘る、私共の全生活をかゝる形式の下に順次にお育て下さる所の、他力の上の救済形式であるのではなからうか。斯く他力の原底に溯つてかゝる形式の下に育てらるゝとせば、私共の一生涯の中に、或は厭穢先になりて、忻淨の後に来るあり、或は忻淨の先がありて、厭穢が後に來る者ありと雖も、敢て其邊の事に固執すべきものではないのである。

四、次に信疑の得失といふ事も亦た、この所に現はれてをる。

「若しまた此のたび疑網に覆蔽せられば更て復た曠劫を還歴せん」

この給ふが疑による過失で、其反對に「獲行信」即ち信仰が迷界解脱の契機である。されば迷悟の分齊は全く信疑にあることを示し給ふものである。これ近くは選擇集に於ける法然聖人の信疑決判、遠くは易行品に現はれたる龍樹菩薩の信疑決判、猶ほ溯つては大經疑惑段に於ける爲得大利・爲失大利の聖判を承け給ふたものであつて、三經七祖を貫く所の重要教義である

迷悟の分齊

十三 造由を明す總序の結文

〔本文〕爰 愚禿親鸞 慶哉西蕃月支聖典、東夏日域師釋難遇今得 難聞已得 聞敬二信 眞宗教行證、特知 如來恩德深、斯以慶所聞 嘆所獲矣

〔素讀〕「こゝに愚禿親鸞の親鸞よろこばしきかな西蕃月支の聖典東夏日域の師釋にあひがたくしていまあふことをなほたり、キツがたくしてすでにきくことをなほたり。眞宗の教行 證を敬信して、こゝに如來の恩德のふかきことをしんぬ。こゝをもちきくところをよろこび、うるまゝを嘆するなり。

〔連絡〕最後に教行信證の造由を示し給ふ一段、中に亦三段あることは前述の如し。

〔古釋〕五に師の訓を受ることを悦で聞持を述る中に○西蕃と言ふはこれ西天なり、正は天竺と云ふ、西は震旦に對す、即ち月支、支には又氏を用る○東夏と言ふは即ち震旦、東は天竺に對す、夏は中國の名、夏宋韻に云大なり、又諸夏一に曰く中國の人曰上○眞宗と言ふは下に至りて詳にすべし。

〔解釋〕西蕃 西にある蕃の國即ち印度のこと。

月支 或は月氏とも書く、昔の嚙吠羅王國のこと、迦膩色迦王保護の下に大乘佛教の隆盛を極めた所。西蕃 即ち月支の意。

東夏 西の方印度に對して東方にある大なる國といふ意にて支那のこと。

日域 日の出る域、日本のこと、支那の東に位する故。

眞宗 淨土眞宗の略稱。祖師は法然聖人を以て淨土眞宗の開祖と仰ぎ給ふたこと、正信偈及

び和讃に明かである。

教行信證 教行信證の略。信の一を略されたのも内容に變りはないが、それには深い思召のあ

ること、上(一九一頁)のべた通りである。

〔校訂〕一、月支 永本・正本は月支に作る。曆本・文本・佛本・高本みな月支とす、之れ正し。

二、日域 曆本は日域に、その他は日域に作る、後者正し。

三、難レ遇 永本・正本・難レ値に作り、曆本・文本・佛本・高本みな難レ遇に作る。後者正し。語例語説(三十八

丁)に慶 難レ遇 得レ遇 あり。

四、矣 眞本・曆本・高本は普通形の文字、永本・正本・文本は細書せり。前者可歟。

〔大意〕ところが慶ぶべきことには、愚禿釋の親鸞は、印度支那日本の三國七高祖其他の祖師方のお聖教のお指圖によつて、斯やうに値ひ難い彌陀他方のお法を聽聞することができたのである、さうして眞宗の他方の教行信證を敬信して、如何に如來の恩徳の深いかを知らせて頂いたのである。依つて斯書を造つて、聞いた慶び獲た 味をのべる次第である。

四 序後の七行四十三字

一、文字上の解釋

〔本文〕大無量壽經 眞實之教 淨土眞宗

顯眞實教一

顯眞實行二

顯眞實信三

顯眞實證四

顯眞佛土五

顯化身土六

〔素讀〕大無量壽經、眞實の教・淨土眞宗。眞實の教を顯はす一。眞實の行を顯はす二。眞實の信を顯はす三。眞實の證を顯はす四。眞佛土を顯はす五。化身土を顯はす六。

〔連絡〕此七行の中第二行已下は、已に序分が終つて、將に正宗本文に入らんとするに就て、先づ一部の略目次を列ね給ふたものである。又第一行の(細註と共に)十三字は、本によつては、

序後の七行四十三字

教行信証講話
教卷の冒頭に在るのもあるが、理由は後にのべる通り、ごうも矢張り教卷の冒頭にあるべき文字のやうに考へらる。それはそれとして、第一卷の教卷に顯はし給ふ眞實教の物柄を、前以て示されたものである。

〔古釋〕正宗の中に於て、卷を分ちて六を爲す、教・行・信・證・眞・化佛土なり、一より六に至るまで、次の如くこれを明す。

〔解釋一〕大無量壽經 佛說無量壽經のこと。小部の阿彌陀經に對して大無量壽經とよぶ、下の二四四頁の〔古釋〕を見よ。

眞實教 阿彌陀佛のお慈悲の、有りの儘を説かれた經が、大無量壽經であるから、祖師は特に此經を、眞實の教と仰せられてある。

淨土眞宗 祖師の定め給ふた宗名である。祖師已前にも、善導大師は散善義に「眞宗遇ひ難し」と云はれ、法照禪師は五會法事議に「念佛成佛これ眞宗」と云はれて居る。法然聖人は堂々と「淨土宗」と稱せられたれども、淨土眞宗の四字名を用ひられたのは祖師に始まつたのである。

〔大意一〕之から已下、教行信証の第一卷に於て明さんとす、眞實の教の物柄何ぞと云へば、大無量壽經がこれである、此の根本經の上に立つて、私共の教はれる道を談するの、淨土

眞宗であるとの給ふ祖意である。

〔解釋二〕顯眞實教一 「顯淨土眞實教文類一」の略稱である、教卷が第一卷なること。

顯眞實行二 「顯淨土眞實行文類二」の略稱である、行卷が第二卷なること。

顯眞實信三 「顯淨土眞實信文類三」の略稱で、信卷が第三卷なること、之に本末兩卷あり。

顯眞實證四 「顯淨土眞實證文類四」の略稱で、證卷が第四卷なること。

顯眞佛土五 「顯淨土眞實佛土文類五」の略稱で、眞佛土卷が第五卷なること。

顯化身土六 「顯淨土方便化身土文類六」の略稱で、化土卷が第六卷なること、之に本末兩卷あり。

〔大意二〕教行信証一部を、此の如く六卷に分け給ふた事を、序文に次で目次として標列られたものである。

二、組織上の配置

〔一、校訂〕上に一言した通り、此七行四十三字の中、初の一行十三字は、本派依用の明曆本始め、正保本・寛永本の三刊本、并に本派本山所藏の御眞本、近年刊行せられたる高田刊本に於ては、何れも「顯眞實教一」等六行三十字の前に標げられてあるが、大谷派依用の寛永本・佛光寺刊本・延書本・六要師所覽の古本には、教卷の冒頭に標げられてある。かやうに所在の前後の相違があるから、先輩學者間には種々に研究せられてあるが、略り

序後の七行四十三字

教行信證講話

一、目次の前には正しからず、教卷冒頭に在るが正しと見るもの。
 二、どちらにも異本として見て、別に正否を云はざる者。
 三、目次の前に在るは、教卷冒頭に在るは、意味に相異ありと見て、解釋を試むる者。
 の三説に分れておる。今私は行卷已下各卷に於て、冒頭先づ「諸佛稱名願」至心信樂願等と、必ず願名が掲げられてある例に依り、矢張り教卷冒頭に在る方が正しからふと思ふ。先輩にもかやうに三説ある事はあるが、何れも此一行十三字は、教卷所明の眞實教の物標を出して見せ給ふたものであると見るのに、異論はないのである。

〔二、順序〕上述の如く云はゞ、この所は

初、目次六行三十字

次、顯淨土眞實教文類一(題號)

次、愚禿釋觀聲集(選號)

次、大無量壽經 眞實之教

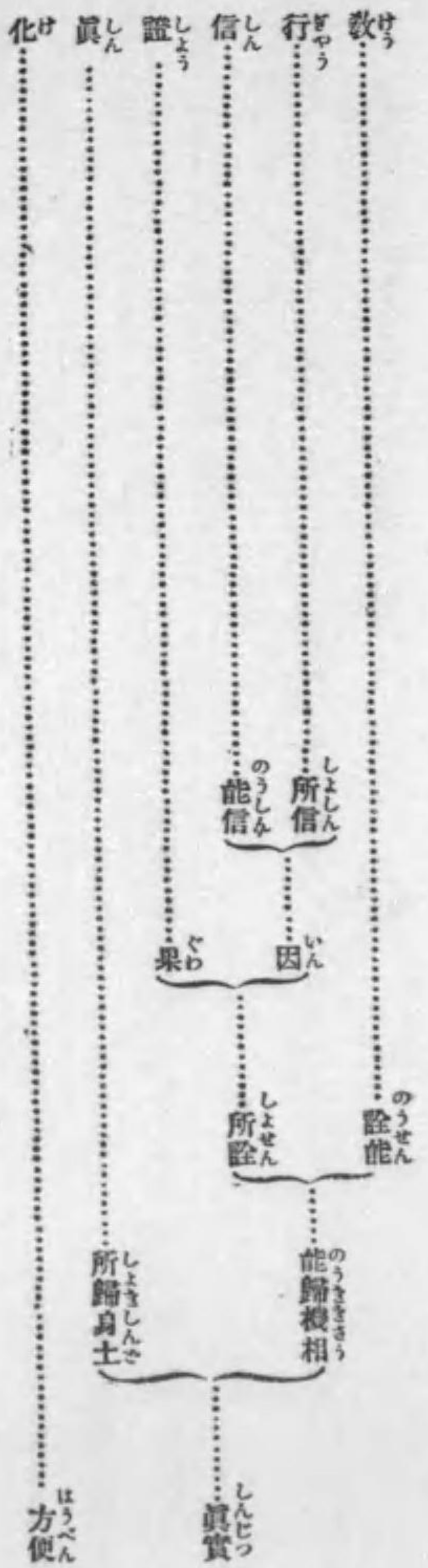
淨土眞宗

次、淨土眞宗 等本文……………

六行三十
字の所屬

の順序になるから、初めの目次は教卷外に在る如く見ゆれども、六要は之を教卷内に入れて分科され、後世之れに従ふ學者もあり、之れに對して教卷外に出して分科する學者もあるが、私は目次は目次で獨立すべきもので、教卷にも序分にも屬せず、一部全體に關するものと見たいのである。

〔三、内容〕又六卷の順序及び意圖について、先輩種々に述べられてあるが、故一乘院吉谷覺壽師の講義の設などは、最も當を得たものである、圖を以て其要を示せば、



序後の七行四十三字

十五 教卷の大意

一、文字上の解釋

〔本文〕顯淨土眞實教文類一

愚禿釋
觀覺集

〔異本に依〕大無量壽經 眞實之教
淨土眞宗

〔素讀〕淨土眞實の教を顯はす文類の一。愚禿釋觀覺集む。大無量壽經、眞實の教、淨土眞宗。

〔連絡〕初の行は教の卷の書題即ち題號と、著者たる祖師の自名即ち選號とで。次の行は教の卷の大意を標舉させられたものである。

〔古釋〕第一に眞實の教といふは彌陀如來の因位果位の功德を説き、安養淨土依報正報の莊嚴を教へたる教なり、即ち大無量壽經これなり。總じては三經にわたるべしと雖、別しては大經を以て本とす、これ即ち彌陀の四十八願を説くその中に第十八の願を以て、衆生々々の願を説き、如來甚深の智慧海を明して、唯佛獨明、了の佛智を説くべ給へるが故なり（教行信證大意）

〔解釋〕顯淨土等の八字上（第一八一頁已下）を見よ。

一、教行信證一部六卷の中の第一卷。

別して大經

愚禿等の六字上（第一八三頁）を見よ。

大無量壽經 上（第二二四頁）を見よ。

眞實之教（第二二四及第二四七頁）を見よ。

淨土眞宗 上（第七〇頁已下頁）及び下（第二三四頁）を見よ。

〔校訂〕一、愚禿釋觀覺集の六字、曆本は二行に細書し、他の諸本すべて一行に書してある。位置も曆本の方は、題號の眞下にあるが、他は別行になつておる。

二、大無量壽經等の十三字、前章の（連絡）及び（校訂）の下にのべたやうに眞本・永本・正本・曆本・高本は目次の前、序分の後にあり、文本・佛本・証本には教卷題號撰號の後にあり、が在り場所の前後に拘らず教卷の大意を標め示させられる爲めであるから、茲に之を記することとした。

〔大意〕非僧非俗の愚かな親鸞が、經・論・釋の中から、淨土眞宗の眞實の教を説きあらはされた要文を、抽き聚めた書物で、教行信證の第一卷である。斯卷に明かす所は、彌陀の慈悲其まゝを説かれた大無量壽經を基礎として、彌陀の慈悲の起り、値打、實體等を究明するのであつてこれ即ち眞實教なるものである。斯やうに高遠な慈悲は、衆生を救済し給ふのが目的であつてそれには往相廻向、還相廻向となりて、此世界に現はれて下され、丁度、子供が青年となり壯年となり老年となるやうに、迷妄の私共を悟りの境界まで、育て上げて下さる、他力の仕立取

選號と標舉のこと

りに逢ふ有り様を明すが、大無量壽經の要點であり、淨土眞宗の法門であることを、一卷の冒頭に於て標舉させられたものである。

二、一卷の組織

大段三

謹按 已下教卷一卷の本文は、大別して三段となる。

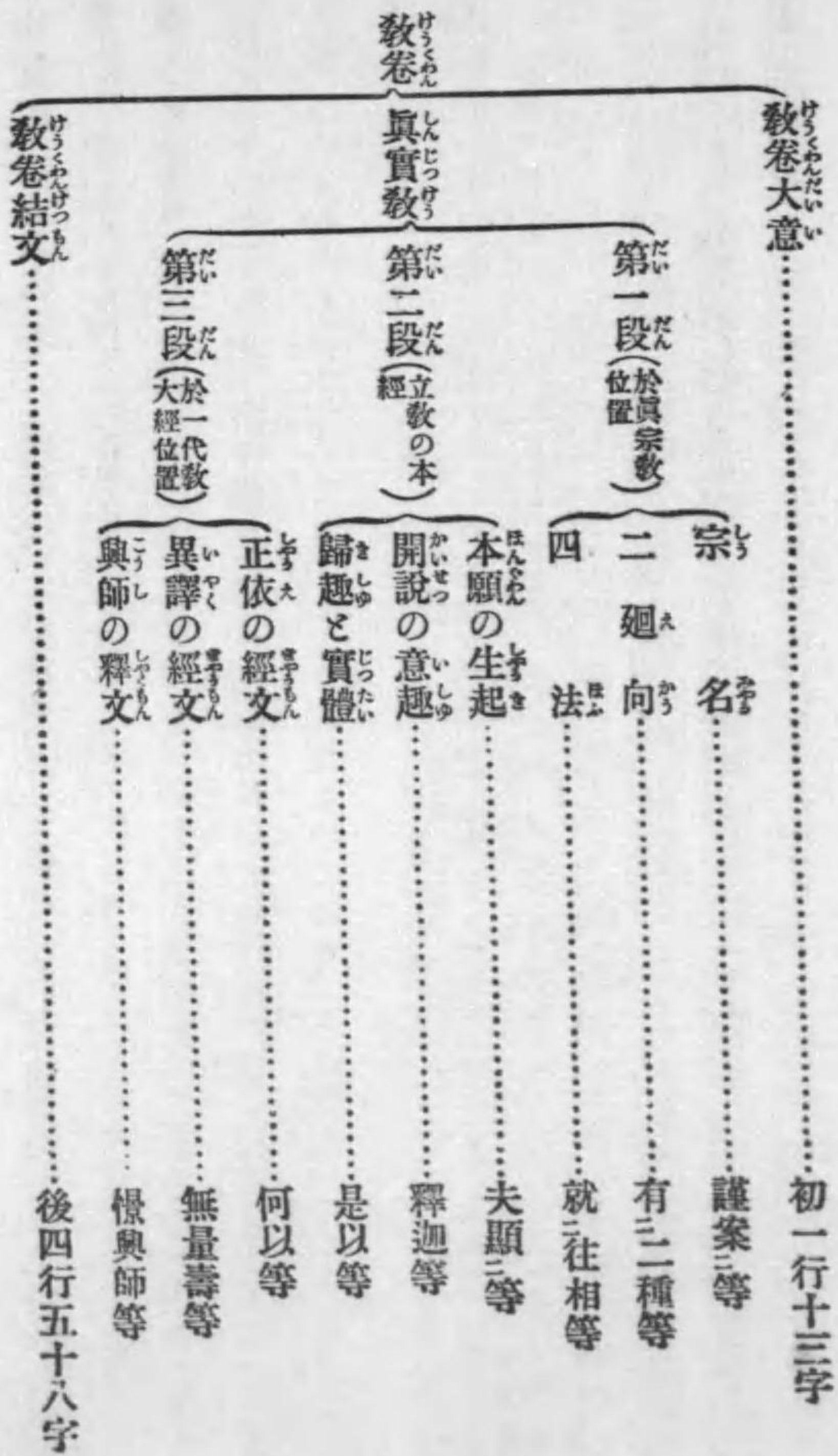
一、初め二行三十一字は、眞宗に於ける眞實教の位置を明し給ふたもので、初めに宗名を擧げ、次に二廻向を出し、終りに四法を列ねられてある。

二、夫顯眞實教者已下の第二段は、立教の本經たる大無量壽經に就て明し給ふたもので、此中亦初めに彌陀本願の生起を探り、次に釋尊開說の本旨を明し、後に經の歸趣と實體とを論結せられたものである。

三、何以得知三出世大事一已下の第三段は、前段の中の第二小段の意味を布演して、一代佛敎中に於ける、大經の位置を、經釋を引いて立證し給ふたもので、御引用の經釋の中亦初めに正依の經文、次に異譯の經文、後に憬興師の釋文の三小段に分たれる。

而して最後の「爾者則」等四行五十八字は第三段の結文でもあり、教卷全體の結文でもある右十小段の詳しい事は已下各章に述べる通りであるが、今章にのべた處を、約して圖に示さば左の通りである。

小段十



六 眞宗に於ける眞實教の位置

一、文字上の解釋

〔本文〕謹按淨土眞宗有二種迴向、一者往相、二者還相、就二往相迴向、有眞實教行信證一
 〔素讀〕謹で淨土眞宗を按ずるに二種の迴向あり、一には往相二には還相なり、往相の迴向に就て眞實の教行信證あり
 〔連絡〕これから眞實教を顯はし給ふに就て、先づ謂ふ所の眞實教は、眞宗の法門ではどういふ
 位置にあるものであるかを示す爲めに、二迴向の中の往相迴向の第一に位するものであるぞと
 懇に眞宗の大綱から説き始めてお示しなされたものである。それ故此一段を古來眞宗の大綱
 と見る人もあるのである。

〔古釋〕謹按言ふは發端の言○淨土等とは先づ宗の名を標して所説の眞なることを顯はす○眞宗と言ふは即
 ち淨土宗なり、散善證に云く眞宗遇ひ難し、五會説に云く念佛成佛は是れ眞宗なりと。總じて之を言はゞ廣く佛敎に於
 て眞宗の名を立ること述する所に非ず、圭峯の孟蘭盆經の疏に云く、良に眞宗未だ至らざるに由て、周孔且く心
 を驚けしむ、靈芝の同き新記に之を釋して云く、眞宗は即ち佛敎なりと………但し眞宗の名念佛門に於て殊に其理
 あり、大經には説て眞實之利を爲し、小經には亦た説眞實言と云ふ、一代敎の中に、實に凡夫出離の要道たり、眞
 實の宗旨其戰應に知るべし○二種の迴向あり等と言ふは、論の註より出たり、………註に云く迴向に二種の相あり、一には往

宗名の通局

迴向の語義の典據

相、二には還相。往相とは已が功德を以て一切衆生に廻施して作願すらく、共に彼の阿彌陀如來の安樂淨土に往生せし
 めんこと。還相とは彼の國に生し已て、奢摩他毗婆舍那方便力成就することを得て、生死の稠林に還入して、一切衆
 生を教化して、共に佛道に向はしむるなり。若し往若し還、皆衆生を接して生死海を度さんが爲なり、是の故に迴向を
 旨として大悲心を成就するが故にと言ふ………凡そこれ彼の淨土に生する(往相)と、及び彼の菩薩人天所起の諸行(還
 相)と、皆な阿彌陀如來の本願力に縁るが故なり。何を以てか之を言ふさならば、若し佛力に非ずば四十八願(便ちこれ
 徒らに設くるならんこと、今家特に如來他力迴向の義を立ること、専ら此の文に依る。

〔解釋〕按考へてみることを。

淨土眞宗 字解上二三四頁を見よ、意味は下に至つて委しく述べ通り。

迴向 廻し向けること。他宗では自己の積累た功德や善根を、佛果菩提の因に廻し向けるこ
 とを迴向と云ふてをるが、眞宗では、佛の絶對他力のことを迴向といふのである。私共には
 自から救はるゝ丈けの善根も功德もないから、佛からそれを賜ふことを迴向といふ。

往相 往相迴向の略。往相とは往くすがたで、私共が迷ひの此世界から、悟りの極樂淨土
 へ、往生させて頂く一伍一什のこと、それを佛の方より賜はるのである。内容を云へば、次下
 にある如く教行信證の四法である。

還相 還相迴向の略。還相とは還るすがたで、私共が極樂へ往生した後、衆生濟度の爲め

眞宗に於ける眞實教の位置

他力迴向

娑婆世界へ戻つて佛行を行すること。それも自己の力量によるのでなく、全く佛の方より賜はるのである。

〔大意〕謹んで考へてみるのに、淨土眞宗の法門は、彌陀廻向の法門であつて、之に二種ある、一は往相廻向と申し、私共が極樂往生を遂げる諸有仕掛け、二は還相廻向と申し、往生後の自由の活動、これを悉く佛の他力でさせて頂くことを、説き教へるのが我が淨土眞宗であるさうして其往相廻向を委しく説き明せば、眞實の教・眞實の行・眞實の信・眞實の證の四法となるのであつて、此四法の一々に就て、更に細かに説明を加へる爲めに、教行信證を造るので、今の教卷は、第一の教のことを細説する卷である。

二、宗名の意義

一、親鸞聖人の一流を、淨土眞宗と稱すること、今日に於て誰れ知らぬものもなければ、祖師の創めて斯く銘名し給ふたには、深き思召のあつた事と申すべく、蓮如上人之に就て、御文一帖目第十五通に、左の如く仰せられてある。

「開山はこの宗をば淨土眞宗とこそ定め給へり……されば自餘の淨土宗は、諸の雜行をゆるす我が聖人は雜行を簡び給ふ、この故に眞實報土の往生をとぐるなり、この謂れあるが故に、別して眞の字を入れ給ふなり。」

別して眞の字

之は祖師自らが既に

「淨土宗の中に眞あり假あり、眞といふは選擇本願なり、假といふは定散二善なり。選擇本願は淨土眞宗なり、定散二善は方便假門なり。淨土眞宗は大乘の中の至極なり（末燈鈔第一章）眞實信心を獲れば實報土に生ると教へ給へるを淨土眞宗とすと知るべし（唯信文意）」と仰せられたのを約言し給ふたもので、往生の因が紛らはしい雜行雜修でなく、唯だ他力眞實の信心であるといふこと。往生の果が彌陀同體の眞實報土であるといふこと。因果の二點から淨土眞宗と銘名し給ふたことが知れるのである。

二、前述の意味から云へば、淨土眞宗は即ち、淨土門中の眞實宗の謂で、他の淨土宗の異流と對峙した名稱となるが、若し淨土即眞宗の謂で解釋すれば、たとへ異流があらうとあるまいとまよふ、すべて淨土門に屬する宗旨を、淨土眞宗と見るので、此時は聖道門に對抗した名稱となるのである。上の古釋の中に引かれたる散善義及び五會讚に謂ゆる「眞宗」は、此意味であつて、法然聖人の謂ゆる「淨土宗」の名も亦、聖道門外獨立の淨土眞宗の意味である。

三、若し夫れ淨土の二字を省いて、單に眞宗の二字で云ふならば、上に引ける古釋に云はれる如く佛敎を外敎に對して眞宗と稱する所もあり、又佛敎中に於て出世本懷經たる法華を眞宗と稱する場合もある。彼れや此れやで眞宗の名は色々に通ずるから、光遠院慧空講師は、其著

眞宗に於ける眞實敎の位置

因果の二方面から

叢林集に於て、六重の義と、二重の對とを以て、眞宗の名を解いてをられる。謂ゆる六義とは

- 一、外教に對して佛敎を眞宗といふ
- 二、小乘に對して大乘を眞宗といふ
- 三、權大乘に對して實大乘を眞宗といふ
- 四、聖道門に對して淨土門を眞宗といふ
- 五、要門に對して眞門を眞宗といふ
- 六、自力念佛に對して他力念佛を眞宗といふ

又二對とは

- 一、萬行に對して念佛一行を眞宗といふ
- 二、化土往生に對して眞報土に往生するを眞宗といふ
- 三、解釋上では、淨土の二字を除つて見た眞宗と、淨土の二字を加へて見た眞宗とは、一往かくの如く意味に寛狹の區別があるけれど。祖師に於ては、眞宗といふのも、淨土宗といふのも、淨土眞宗といふのも、一樣に淨土眞宗のことで、淨土眞宗と仰せられたからとて、何處何處までも、聖道門に對したり、淨土の假宗たる異流に對したりした、狭い相對的の御考へではなかつたやうである。寧ろ親鸞聖人に取りては、法然聖人より相傳し給ひた法門已外には、ご

祖意は絶待的

證仰的の名稱

んな高尚幽遠な法門があらうとまよ、末代下根の愚禿親鸞には、何等の價値も權威もないものである、たゞこの弘願他力の信仰を勧めらるゝ法然の仰せのみが、法界海絶對無二の敎である眞實我れの救はるゝ道であると、衷心の信仰を告白して讃仰せられた名稱が、淨土眞宗てふ宗名である。

祖師はかゝる信仰上の見地から、眞宗已外の一切の敎を、悉く此の親鸞を、眞宗に導いて下さる佛の御手廻しだと御覽になつて、感謝を以て迎へられてある。そこで祖師の信仰上には、諸有世間出世の敎へが、皆眞宗となつて生きて居る、一度は悉く捨てられたものであるが、信仰上に於て復活した所は、如何にも面白い所である。化土卷に其趣が充分あらはれてゐる。

三、開宗の意趣

一、淨土眞宗といふ名稱は、きりつめてみると、上述の如き意義を有して居るから、祖師御自身に、この名に依つて、一新宗敎を開かうなどの思召は、毛頭なかつたものであることが知らるのである。たゞ祖師自身を正しき救ひの道に導いて下さる師の敎へを、淨土眞宗と仰せられたまでである。故に祖師は、かゝる敎を直接自己に授けて下された法然聖人を、淨土眞宗の開祖と仰ぎ、和讃に

「智慧光のちからより

本師源空あらはれて

眞宗に於ける眞實敎の位置

眞宗の開祖

淨土眞宗を開きつゝ

選擇本願のべ給ふ

と讃め給ふたのみならず、文類聚鈔には

「論家宗師淨土眞宗を開きて、濁世の邪偽を導んどなり」

と仰せられ、三國七高僧、悉く淨土眞宗の開祖と崇められたものである。

祖師の御意趣は、此の如くであつたとは云へ、實際眞宗開闢の功は、祖師を推さねばならぬ、この事、上の「眞宗の獨立」の章に於て述べた通りである。即ち眞宗の理論的方面、即ち教義の内容は、善導大師に依つて、獨立することができ、宗旨の形式、即ち宗教としての外延は、法然聖人に依つて成り立ちたれども、萬人に之を實行する軌範を示されたのは、祖師であつたのである。故に事實上の眞宗開祖は、親鸞聖人である事は無論である。

二、然るに此の事實と、彼の祖師の御意趣とは、全く矛盾するものではないかといふに、茲が祖師の祖師たる所で、又眞宗の眞宗たる所以である。蓋し祖師に於ては、往々各宗の開祖に見る如き、新宗教を開創して、自ら開山の榮譽を荷はんとするの意趣は、全く之あるに非ず。たゞ師説を眷々服膺し給ふたものであるけれども、三國七祖の法門が、一度祖師の人格を透して現はれるや、私共の根柢と、時勢の要求とに順應したる、眞俗二諦の宗教となつて來たものであるから、私共はどうしても、祖師を推して、眞宗の開祖と觀ざるを得ないのである。

さういふより外に、云ひやうがないのである。故に祖師は自稱の開祖ではなけれども、私共はごうしてもかうしても、祖師を開祖とせねば、氣が濟まないのである。之れ即ち他教に類の多い自稱開祖と、我祖師との一大相異點であつて、今日でも御開山の名の、殆んど親鸞聖人の專有物の如くなつてをる所以であらうと思ふ。

三、斯く、開山の意趣なくして、自然に開けたる淨土眞宗なる點が、眞宗の眞宗たる所以である。凡そ各宗の教義は、私共の實際生活に順應せざる點があるばかりでなく、往々全く反對なる高尚幽遠の理想を定めて、之に到達せしめんとするものであるから、實行となれば、殆んど不可能であるが。祖師の謂ゆる淨土眞宗は、教義は即ち祖師の信仰で、祖師は深尅に人生の實相を觀じ、その上に慈悲の救済を感じ、その救済の始終を教行信證の四法に次第順序を立て、叙述し、之が源底の絶對他力に在る事を示して、往相廻向、還相廻向とせられたものであつて、信仰そのまゝが現はれて教義となつてをる、謂はゞ自然の發露である。故に何人も祖師の信仰に同じ、従つて眞宗の教義を味ふことのできる様になつてをる。之れ本を云へば、故らに開山の意趣がなくして、祖師の信仰を基礎として、自然に開けたる、現實本位の宗教であるからである。されば私共は、この立教開宗の、毫しも無理のないところを、深く味はねばなりません。

真宗の大綱

一、往相還相の二廻向と、教・行・信・證の四法とを、古來の學者達、真宗教義の大綱であるといふてをられるが、誠にその通りである。先づ一宗の根本聖典たる、この教行信證の組織が、往相廻向に就て、教・行・信・證の四法を開き、其第四の證から又、還相廻向を開いてある。然してこの教行信證の法門そのまゝが、即ち真宗教義の全體であるから、真宗の教義は又、二相四法の外にないといはれるのである。

次に此二廻向も四法も共に、佛の救済計畫である。中に於て前者は、超過的境界即ち、私共の實驗することのできぬ佛のお手許に於ける、救済計畫であつて。後者は現實界即ち、私共の目前に現はされたる救済計畫である。凡そ何れの宗教と雖も、要は衆生を救済するに在る衆生だに救済せらるれば、他に用事はないのである。然るにその救済の計畫を闡明して全く餘す所のないのがこの二相四法の法門であるから、之れ即ち真宗の要義なると共に、大綱である。二、今進んで、その救済の計畫としての、二相四法の關係を、詳しく述べて見やう。先づ往相廻向といふのは、往く相を賜ること、謂ゆる私共を御淨土に參らせて頂く一切のお計らひのことで、還相廻向といふのは、還る相を賜ること、即ち往生後に於ける私共が、自由自在に此世界に還つて、衆生濟度の大用をさせて頂くことである。この往くこと、還ることを、

佛の救済計畫

願海の救済計畫

衆生界に現れたる救済計畫

四、二相四法の關係

共に絶對他力でさせて頂くやうに、佛のお手許に於て、既に〱仕組まれてある、それが即ち第十八願と、第十一願と、第二十二願である。之を願海に於ける救済計畫となすのである。

- 第十八願……………往相の因
- 第十一願……………往相の果
- 第二十二願……………還相

然るに之は、前に云つた如く、私共の實驗する事のできぬ、高い超過的の佛陀界の計畫であるから、之を低い凡俗界の、經驗の範圍内に持ち來らなければ、實際の効果はないのである。そこで釋尊先づ、淨土の三部經、殊に大無量壽經に於て、救ひの名號の功德を讚嘆せられ、次で三國の祖師、各之を布演せられたが、かゝる佛祖の御教へを通して、名號が此世界に活動し、私共を揺り起して、現實の生に目醒めさせ、永遠の生を愉しましめらる、此の活動的名號を〱稱し。この覺醒と愉快とを信と稱す。この行信に依つて、私共は人生に在らん限り、自ら慰められ、且つ勵まされ、漸次に人格の改良を爲すや勿論であるが、全人格が名號と一致し、名號が全人格と一致して、私共が全く宗教的に造り上げらるゝは、來世のことである、その境界を名けて證といふのである。

真宗に於ける眞實教の位置

斯やうに教・行・信・證の規則定しき範疇になつて、彼の佛陀界の救済計畫が、凡俗の私共の境

界に現はれて下さるのであるから、其間の關係は、



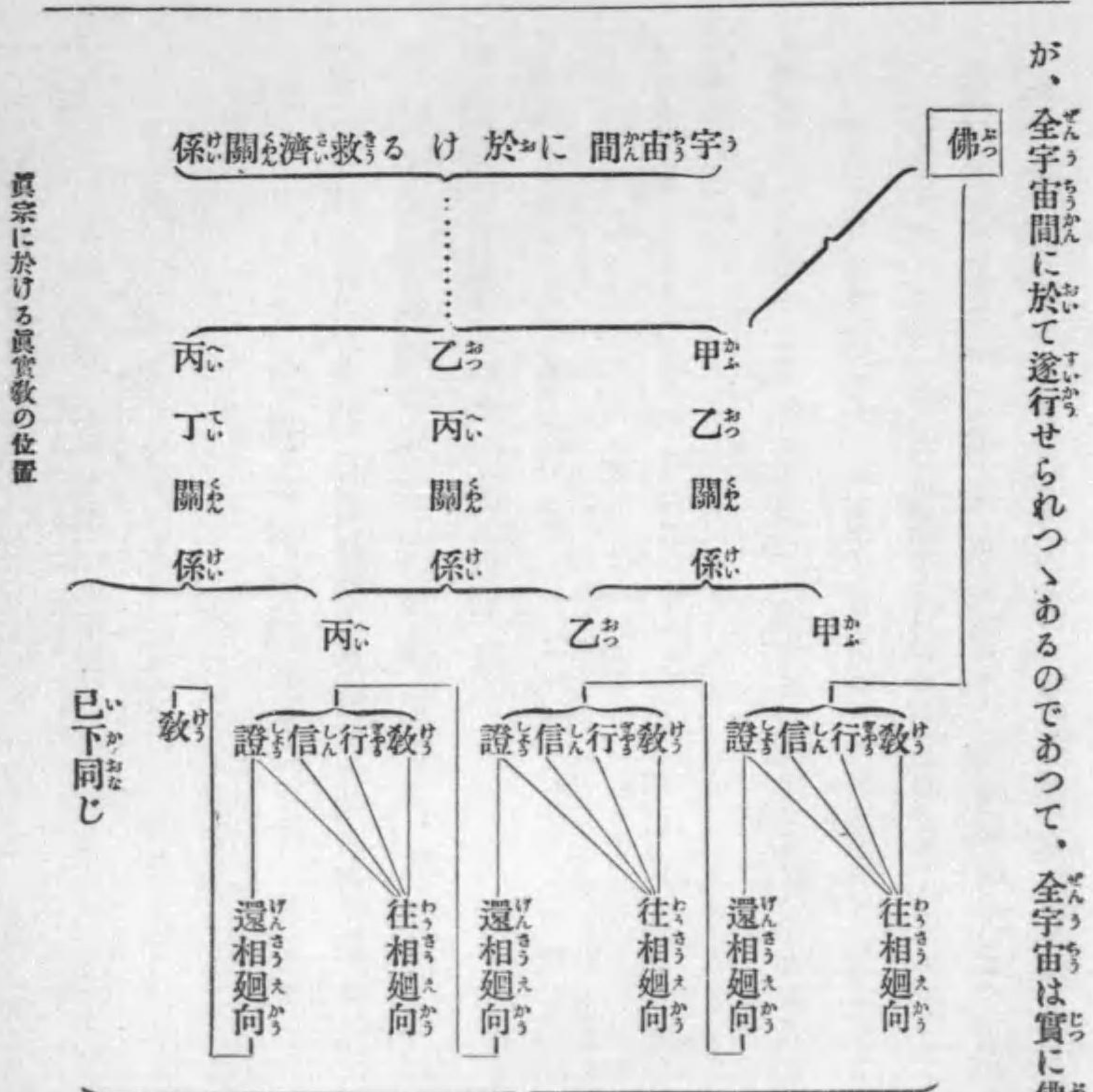
となるのである。

大悲行の實行 救済の無限

三、所が私共が來世に於て、彼の證の境界に入つて、全人格と名號と一致して、轉迷開悟の大事業を完遂すれば、恰も曾て佛陀が、私共の上に、教行信證の次第順序に依つて、救済計畫を遂行なされたやうに、私共は他の有縁の衆生の上に、同様の救済計畫を實行して、彼等を佛境界に導くところの大悲行を實行することができる。彼等も亦證りの境界に入れば直に、私共に依つて試みられる如く、他の有縁の衆生の上に、同様の救済計畫を遂行する事ができる。かくて救済の手は、一より他に、他より又他に、無量無限に擴がつて、衆生界を盡さねば措かぬのが、十方衆生若不生者不取正覺とある、如來救済の計畫である。

今、甲を私共とし、乙を私共に有縁の衆生とし、丙を彼等に有縁の衆生と假定して、佛及び私共と、彼等との關係を圖に依つて示さば、實に左の如き整然たる形に於て、佛陀の救済

佛救済の靈場



眞宗に於ける眞實教の位置

かくの如くにして堅にも横にも無限に救済の手が擴げられるのである。

七 立教の本經

一、文字上の解釋

〔本文〕夫顯眞實教者則大無量壽經是也、斯經大意者彌陀超發於三誓、廣開法藏、致哀凡小、選施功德之寶、釋迦出興於三世、光闡道教、欲下拯群萌、惠以眞實之利、是以說如來本願、爲三經宗、致即以佛名號爲三經體也。

〔素讀〕それ眞實の教をあらはせば、則ち大無量壽經これなり。この經の大意は、彌陀誓を超發してひろく法藏をひらき、凡小を哀れんで、ほらんで功德の寶を施することなしたす。釋迦世に出興して道教を光闡して群萌をすくひめぐむに眞實の利をもてせんぞ欲してなり。こゝをもて如來の本願をさくを經の宗致とす、すなはち佛の名號をもて經の體とするなり。

〔連絡〕四法の第一に位する眞實教の物柄は、大無量壽經であるといつて、其大經の大意を、三段に分けて明かさせられ、眞實教の眞實教たる所以を示し給ふてある。三段とは彌陀本願の生起、釋迦開説の意趣、大經の歸趣と實體とがこれである。

〔古釋〕夫れ眞實の教を顯せば等は、問ふ現行の本には無量壽經といふ、大の字を安せず、今何ぞ之を加ふる。答今此經に於て廣略の名あり、廣は經題の如し、略名を稱する時之を大經と謂ふ、大部の邊に依れば多の體に

大經内容の一斑

大の義と異譯の事

相應す、佛願を説に約すれば勝の義に符順す、多勝の義を標す故に大の字を加ふ、崇重の體なり。問ふ此の義は今家私の意巧欺若し證有りや。答その文證あり。五會證に云く今大無量壽經の五會の念佛に依る云云……問此の雙卷經翻譯何れの時ぞ。又異譯に於て幾の種かあらん耶。答此の二卷の經は曹魏の代に當て印度の三藏康僧鎰譯す、今此の經は第四代に當る。異譯の差に於て内典錄・衆經目錄・樂邦文類・貞元錄等諸錄の意に依るに、凡そ此の經に十二代の譯あり、而もその中に於て、五存七闕せり云云○彌陀誓を超發す等とは、重誓の偈の意なり。彼の偈に説て云く、我れ超世の願を建つ、必ず無上道に至らん○廣開等とは、又同じき偈に云く、衆の爲に寶藏を開て、廣く功德の寶を施さん○釋迦等とは、下の引文に至て委しく之を解くべし○宗體を明す中に、問ふ如來の本願は即これ名號なり、然れば宗と體と何の別かあらん耶。答本願と言ふは先づ六八を指す、之を以て宗と爲す、願々の所詮偏へに念佛に在る、之を以て體と爲す、この故に且く總別を以て異と爲す。

〔解釋一〕大無量壽經 前引古釋の文を見よ。

是也 直接に指し示す詞、又取り局つた詞。

彌陀 阿彌陀佛の略。阿彌陀經に、無量光と無量壽との二德をあげて、阿彌陀佛と稱する所以を示されてあるが、前者は梵語の阿彌陀婆 Amitibha の譯名で、後者は阿彌陀庚斯 Amitayus の譯名である。光明無量の方は、謂ゆる光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨の大用、壽命無量の方は、かゝる大用を爲す實體の、過去現在未來の三世に亘つて永久不變に嚴存しますますの云ふ。諸佛にも、光明無量壽命無量の二德なきにあらねど、克く衆生をして自己と同體に、

光壽二無量

立教の本經

二四五

光明無量壽命無量ならしむるは、たゞ西方極樂の主佛に限るゆへ、諸佛に通ずる名を、奪つて彌陀一佛の副名とせられた所以である。

誓 願ひの強いのをいふ。普通の願ひはかやうくしたいといふのなれど、それが進んでうしてもこうしても願ひの通りせねば措かぬといふのが誓である、十八願文で云へば「若不生者不取正覺の八文字に當る。」

超發 世間並々よりも超え勝れた誓を發し給ふたこと。他力で救はんといふのがそれである。「男女善惡の凡夫を働かさぬ本行に、願力の不思議を以て、生るべからざる者を生れさせられたこそ、超世の悲願とも云ひ、横超の直道とも申しはんべるなり」といふてをられる。

廣 十方衆生を洩らし給はぬ故に。
法藏 善根功德の一ばいに充ち満ちたる藏。

開 閉塞の反對、開放主義なること。即ち佛自身の爲めに在で、衆生に與へる爲めに、善根功德を積み重ね給ひたこと。

凡小 凡夫小人の略。凡夫は、智の勝れたる聖者に對して、愚劣な人間、小人は、勇猛な菩提心を起すことの出来ぬ、弱い卑怯な奴、共に私共のこと。

哀 深い同情。お文に「我助けずんば又何れの佛の助け給はんぞと思召して」の意。

選 精選すること。元來選は選擇とつゞき、之れに選取と選捨とあり、米麥や豆の種を選ぶに、良いのを取る所に、不良のを捨てる譯があるが。その意味でいふと、選擇集に仰せられた如く、劣つた・難しい諸行を選び捨て、勝れた・易しい念佛を選び取り給ふたことになるが今さういふ風に解せぬでもなければ、それでは上の法藏といふ中に、捨てたるものと取られるものとのあることになつて、前後の意味を爲さぬから、私は精選の意味に解すがよいと思ふ即ち佛の積み重ね給ふた萬善萬行を、打して一九とし、鍛えに鍛え、精げに精げて、一口に足らぬ名號に成就させられたことを、いま選と仰せられたものである。

功德の寶 精選しあげた南無阿彌陀佛の名號。

施 施し與へること、他力廻向の意である。

致 重く抑へていふ詞。

〔大意〕今此卷に説き明かさうと思ふ眞實教の物柄は、大無量壽經が即ちこれである。然らば其大無量壽經の大意如何といふに、彌陀如來、十方衆生を救はんが爲めに、諸佛に超えたる四十八願を發し給ひ、衆生若し生れずば我れも正覺を取らじと誓ひ給ふたが、其願成就して一切の功德を名號に收めて南無阿彌陀佛の六字となつて現はれ給ふた。之れ即ち惡人凡夫の私共に施し與へる爲めに、丁度私共の根氣に相應するやう、鍛えに鍛え、精げに精げてこしらへ

あけて、誠に頂き易い一句の名號に、無量の功德を收めて下されたものである。こういう風に佛因位の本願と、果上の名號とを、精して説いてあるのが、大無量壽經上下二卷である。

〔解釋二〕釋迦 上(第二〇一頁)を見よ。

世 我等の住む人間世界。

出興 おでましになつたこと。

道教 聖道門の教のこと。

光闡 光は廣なり、闡は開なりとあつて、ひろめ給ふたこと。

群萌 群生に同じ、十方衆生のこと。機類一様ならず、多種多様であるから群萌といふ。

蕪 たすけすくふこと。

惠 めぐみ教へ給ふこと。

眞實之利 眞實究竟の効果を收むることにして、彌陀の本願を指す。

欲 おぼすと訓ませてある。即ち樂欲にして、釋尊の理想・目的・希望のこと。

〔校訂〕欲 曆本のみ欲搦に作る。永本・正本・文本・佛本みな欲搦に作る。經文又同じ、これ正。

〔大意二〕次に釋尊が大經を開説あらせられた御意趣から云へば、凡そ御一代八萬四千の聖道教を説きひろめ給ひて、漸次に機根をととのへ、下地をこしらへあげ、而して一切衆生に悉く

眞實究竟の効果を收むる彌陀の本願を惠み教へやうが爲めに、此世界へお出ましになつたものであつて、無量の法門、幾多の御説法ありしと雖も、彌陀本願を説く大經を以て、出世の本懐とし給ふのである。故に大無量壽經を眞實の教とするのであるとし給ふの祖意が、茲に現はれてをる。

〔解釋二〕是以 上の二段の意味を承ける詞。彌陀の方から云つても、釋迦の方から云つても、要する所はといふ程の意。

如來本願 第十八願のこと。

宗致 宗要極致の略。おんづまり(極致)のかなめ(宗要)なこと。

佛名號 南無阿彌陀佛の名號の功德を讚嘆すること。讚嘆の二字を入れてみればよくわかる

經體 體は實體若くは體質。絹布に於ける生絲、木綿に於ける棉のやうに、經全體どこを押

へてみても、どこにも行き亘つてをる實質のこと。それが佛の名號である。いふ心は、經を

釋迦佛の説き給ふや、元とこれ、名聲聞十方の、彌陀の誓ひに應ふが爲めであつて、經の始め

より終りまで、名號を讚嘆し給ふことが土臺になつてをる。

〔大意三〕かやうな譯であるから、大經一部のおんづまりのかなめなことは、彌陀正覺の因果で云へば、因たる第十八願を説かせらるゝ事である。然るにそのなりが、取りも直さず佛の果名

たる、南無阿彌陀佛の名號の、不思議な作用を稱讚あそばすことになるので、實に此の讚嘆名號てふことが、大經一部の始終を貫く所の根本精神である。されば釋尊の教へその儘が、彌陀の誓願・名號の活躍であり。彌陀の誓願・名號のその儘が、釋尊の口舌の上に活躍し給ふたもの即ち此の大無量壽經であるから、眞實教と稱するも、固より誣言ではないのである。

二、祖師の大經觀

一、上の第二章第四節(五六頁已下)に於て、祖師の三經觀には、二種の觀方あつて、その差別と觀給ふ側より云へば、大經のみが眞實經で、觀經と小經とは方便經となる。而して今この教行信證は、開卷第一の教卷冒頭に於て

「夫れ眞實の教を顯はさば大無量壽經これなり」

とあるを始めとし、最後化土卷に於ける意味より云へば、正しくこの差別門に依り給ふて説き明されてあるが。それと云つて、何處へまでも差別で突き通すの御考へでもなく、又三經を一致の側より觀給ふた所もある。一例を擧ぐれば、化土卷本に

「三經眞實は選擇本願を以て宗と爲す也」

教への歸趨は、彌陀眞實の慈悲に在つて存する故、三經は遂に一致するのである。

教行信證の三經觀

此の觀方は、彼の口傳鈔の法實・機實・機法合説を以て、三經を一致と觀給ふものとは、稍や理由が異にすれど、子細に尋究すれば、一但表面にあらはれたる教への説き振りより三經差別門を立し、進んで經意に照して三經一致門となり、更に再び大・觀・小の三經を觀れば、口傳鈔の如く法實大經・機實觀經・合説小經ならざるを得ぬのである。

三經の遂に一致するのは、今更贅するの必要もないが、その一致の模様は、どこにどう一致するのであるか、そこを考へて觀ねばならぬ。之に就てすべて大經が中心で、大經の法の眞實即ち選擇本願のお慈悲が、觀經にも行き亘り、小經にも行き亘つて居るから、方便經たる觀小二經亦大經と共に「三經眞實」と呼ばるに至るものである。されば觀小二經は十九二十の二願の開説なる點より云へば大經より出でたるものにして、又上來述ぶる所の如くなれば大經に歸る、即ち大經より出で、大經に歸るものを觀小二經とす。即ち大經は淨土眞宗の根本にして歸趨、最初にして最終の經典である。

二卷鈔の四法大意

教行信證の要義を祖師自から約めてお釋あらせられた淨土文類聚には矢張り「教といふは、則ち大無量壽經なり」

さあるが。同じく教行信證の要義を抽出て、他の宗旨の法門と對々に述べ給ふた二卷鈔には「易行淨土本願眞實の教大無量壽經等なり」

さあつて、等の字を加へられてある。これ上、述の意味から云へば、觀小二經に行き亘つて居る弘願他力の慈悲

の方面から、その二經までも大經と同等に眞實教の範圍に入れ給ふ思召であること、容易に知れるのである。然り而して覺如上人作教行信證大意に

「眞實の教といふは乃至總じては三經にわたるべしといへども別しては大經をもて本とす」

さあるも上來の意味で、三經の關係亦た容易に解し得るのである。

二、次に祖師の觀給ひし大經の大意は、本文に明かなる如く、彌陀の他力と釋迦の説教とであつて、結局召喚と發遣とである。凡そ大經を斯くの如く觀給ふこと、その本法然聖人に始まる

法然聖人の大經觀

蓋し法然聖人は大經の大意を釋くに自から二説あり。

一、聖人の大經釋(漢語燈一の初若くは法然上人全集一三三頁に出づ)によれば、釋迦發遣の勸説を彌陀召喚の喚聲を以て、大經の大意とし給ふの意。

二、拾遺古德傳第四の初めに用出たる和語大經釋によれば、彌陀正覺の因果と衆生往生の因果とを以て、大經の大意とし給ふの意である。

縦断と横断

初めの説は大經を豎てに眞二つに發斷して見るを、一の片割れば彌陀の召喚、他の片割れば釋迦の發遣となり、一部二卷全體が、釋迦彌陀二尊の教勸で貫いてある。どこまでが彌陀で、どこからが釋迦といふ局りはないのである。

そこで一方より觀れば以て、一部悉く彌陀教とすべく、一方より觀れば以て、一部悉く釋迦教とすべきである。後世に及び上卷彌陀教、下卷釋迦教、若くは上卷及び下卷の百千萬劫不能究盡まで彌陀教、佛告彌勒菩薩諸天人等以下が釋迦教とする等の説、宗學者間に起りたれども、法然聖人には此の如き説はないのである。第二の説は前説と異つて、大經を横に眞二つに切斷して、上卷を彌陀正覺の因果を明し給ふとし、下卷を衆生往生の因

寧ろ詠嘆的
文字

果を明し給ふとする説である。これによれば、必ずしも釋迦彌陀二尊に分けて釋き給ふに非ず、寧ろ一釋尊の説かせられたる大經を、此の如く二重の因果に分けて解釋されたものである。而して此説の出たる和語大經釋は古德傳の中に收められ、その古德傳又た覺如上人の作にして、法然聖人の直作には非ざる故、自然法然聖人の説として第一説と同等の權威がないのである。されば第一説を以て、正しく法然聖人の大經大意觀と見るがよからう。祖師今教卷に於て、此説を承け用ひられしも、亦た由あるかなである。

法然聖人自著の大經釋の思召を相承し給ひ、且つ祖師の信仰眼より大經を觀給へば、そこに現はれたる、召喚の御聲の下に、絶對他力の手強い力が認められ、發遣のお勧めを聞く所に、これが佛出世の御本懐と悦ばして頂き給ふの外はなかつた。かゝる感懐をそのまゝ筆にあらはして、大經の大意を讚嘆し給ふたのが、「斯の經の大意等」の本文であるから、繰り返して拜讀すればする程、解釋的文字といふよりも詠嘆的讚仰的文辭といふの、妥當なるを覺ゆるのである。

三、形式の上より見れば、大經は彌陀召喚の勅命と觀るも得たり、釋迦出世の本懐と觀るも得たり、之は大體論の大體論、大意の中の大意であるが、更に進んで大經の何たるかを知らんとせば、どうしても内容一斑を尋究せねばならぬ。

三、大經の内容一斑

一、覺如上人作の拾遺古德傳の中に收められたる法然聖人の大經釋に左の如く云はれてある。
 「この經には能化古今の本末を明し、所化往生の首尾を説く」
 又教行信證大意には

「第一に眞實の教といふは彌陀如來の因位果位の功德を説き、安養淨土依報正報の莊嚴を教へたる教なり。乃至大經を以て本とす、これ即ち彌陀の四十八願を説いて、その中に第十八の願を以て衆生生因の願とし、如來甚深の智慧海を明して、唯佛獨明了の佛智を説きのべ給へるが故なり。」

二書の文、要するに佛正覺の因果、衆生往生の因果を明し給ふを大經の内容とせらる。今の本文で云へば、實に左の如くなるのである。

彌陀誓を超發して……………彌陀正覺の因
 選で功德の寶を施す……………彌陀正覺の果
 因眞實……………衆生往生の因
 眞實之利……………衆生往生の果

二、若し夫れ大經上下二卷の本文に照合して云へば、大經も他經と等しく、序分・正宗分・流通分の三段より成る。即ち

二重の因果

序分 大初より對曰唯然願樂欲聞まで
 正宗分 佛告阿難より我今爲汝略説之耳まで
 流通分 佛語彌勒より大尾まで
 この三段の内、一經の宗要は第二正宗分である、然るにこの正宗分も亦、左の五段に分けて見ることが出来る。

- 一、彌陀正覺の因 之は佛語阿難乃往過去より、起諸天人於一切法而得自在まで。
- 二、彌陀正覺の果 之は阿難曰佛より、上卷の大尾まで。
- 三、衆生往生の因 之は下卷大初より、廣濟生死流まで。
- 四、衆生往生の果 之はその次より、百千萬劫不能窮盡まで。
- 五、釋迦の勸誡 佛語彌勒菩薩已下正宗分の終りまで。

猶ほその細別に至つては、今述ぶるの要はない、之を知らふと思ふ人は近刊の花田司教著大無量壽經各章要義などが最も良參考書である。

三、大經に説き給ひし法門は、かくの如く廣漠なるものであるが、釋尊の之を開説し給ひし所以は、序分にも之を委しく述べられてある通り、以て出世の本懐とし給ふにあり。このこと上にも略説したが、委しくは次章に於て解くことにする。

正宗五段の意

四、大經の要旨

中心は本願

一、丁度人間の身體は、頭や胴や手足から成り立ちてをるが、最も大切な所は頭であるやうに大經を組織する法門は種々あれども、その主要の中心點は、如來の本願である。即ち大經全體が、この本願から開展し、且つこの本願に結歸するのである。祖師がいま茲に

「是を以て如來の本願を説いて經の宗致となす」

と仰せられたのはその意味である。今その譯を申してみれば、正宗分の中、彌陀正覺の因が、佛の發心發願より出發し、五劫永劫の修行また之を基礎とし給ひしこと勿論である。次に彌陀正覺の果たる佛身・佛土・聖衆の果報、即ち三種莊嚴、悉く衆生の爲めに成就せられたもので他力廻向の第十九願のお慈悲を離れてゐないから、之また「如來の本願」に結歸するのである。次に衆生往生の因たる聞其名號信心歡喜の信心は、願力廻向の信心であり、衆生往生の果たる本佛同體の證りも亦然りである。されば祖師自らの仰の如く

「若しは因若しは果(若しは往若くは還)一事として阿彌陀如來清淨願心の廻向成就し給ふ所にあらざるることなし」

悉く本願に結歸す

であつて、悉く「如來の本願」に結歸して了ふのである。然り而して釋迦の勸誡たる五善五惡信疑得失の教説も、「唯除五逆誹謗正法」の願文の布演であり、且つ又凡そ釋尊出世して大經を

説き給ふことその事全體が、第十七願及び重誓の偈の名聲聞十方の彌陀願意の顯現であるから實に如來の本願を外にしては、大經を説くことができないのである。

二、事は少しく考究に亘れど、茲でどうしても宗體のことを辯じておかねばならぬ。

宗體論は
經典の高
等批評

抑も宗體といふこと、淨土門に局らず、聖道門に於ても、夙に論究せらるゝ所、謂はゞ所依の經典の高等批評である。我が淨土門に在つては、曇鸞大師(論註に云く、釋迦牟尼佛、王舍城及び舍衛國に在して、大衆の中に於て、無量壽佛の莊嚴功德を説く、即ち佛の名號を以て經の體となすの文)及び善導大師(玄義分に云く、今此の觀經は觀佛三昧を以て宗となし、亦た念佛三昧を以て宗となす、一心回願往生淨土を體とするの文)の意に依るに、名號若くは念佛を以て三部經の宗體を論定せられてゐる。今祖師は其二願の意を汲み給ひて、本願と名號とを以て之を解き給ふたのである。於中本願を宗とし名號を體とすといふてあるその宗は宗要・宗旨即ちおんづまりのかなめ、前邊の如く大經悉く本願に結歸する味である。體は體質・實體即ち物柄で、丁度人體の成分種々あれども、悉く細胞より成りてなる故に之を押へてみて皆な細胞の外にないやうに、大經の何處を押へても、何處にも行き亘つて居る細胞の如きものは、名號の功德を讚嘆し給ふの外にないのである。初めより終に至るまで、一言一句皆な、その思召から説かれたもので、この讚嘆名號てふことが一經の本質となつて居るのである、之が根本精神である。

されば大經の要旨たるや、名號の功德を讚嘆し給ふの根本精神より、釋尊が彌陀の本願を布演して、種々廣漠なる法門を説き給ひたものであると觀給ふたのが祖師の三經觀の結論である。

根本精神は讚嘆名號

六 一代教中大經の位置

一、先づ自から發問

〔本文〕何以得レ知ニ出世大事

〔素讀〕なにをもてか、出世の大事なりと知ることをなうるならは

〔連絡〕大經の眞實教たるは、上述の如く本願を説き名號を讀するが故であるが、更に他經と對べて云へば此經は佛出世の本懷經であるから、愈以て眞實教であることをあらはさん爲め、已下二三の文證を列ね給ふ、その初めに當り特に語を改めて、何を以てか云々との給ふ。一は上を承け來つて下の文證を引き起す爲めであり、一は特に大切な事ゆへ、讀む者の注意を喚起し給ふ爲めである。

〔古釋〕次に發問の中に、問ふ先に判じて出世の大事と云はず、今何ぞ此の如く發問を設くや。答ふ佛の本願と云ひ、佛の名號と云ひ、出離の正道、大悲の極際、言を發さずと雖も、如來出世の大事之れに在り、故に發問するなり。

〔解釋〕何以 べういふ譯でといふこと。

出世大事 釋尊が此土におでましになつた最大目的のこと。大事とは一大事で、語の依り所

法華經方便品にあり、謂ゆる「一大事因縁を以て、世に出現す」と云ふのがそれである。

得レ知 といふことがわかるかとの意。法華には佛自ら明言し給へども、大經には佛の明言なし、經文を熟讀玩味して、之を知るの外はないのである。

〔大意〕前章に述べた通り、大經は眞宗立教の本經であつて、法門の主の彌陀から云つても、説き手の釋迦の思召から云つても、經の主要點たる本願名號の側から云つても、これほど結構な御教へはないのである、そんな結構な御教へであるから、私共は仇や愚かに思ふて、之を頂いてはならないのである。と此經の價値の偉大なることを、充分に高潮し給ふた所に、既に此經は釋迦出世の本懷經と斷定し給ふ祖意が動いて居るのであるが、それを茲に發問體で云ひあらはして、祖意を明かにせられたのである。故に此言葉には上を承けて下を引き起す用がある。

斯様な譯であるから、下に引く經釋の文は、自ら此の發問の答となるもので、教行信證中他の多くの場合の引證の文とは、遙に重い意味をもつてをる。之は今教行信證の大初に於て、一部に明し給ふ所の法門たる、淨土眞宗の教義が、釋迦一代の御説教の中で、特に殊勝なる法門ぞといふ事を、際を立て、知らせ給はんとの祖意より、斯くも他に異なりたる形式を以て、別に問を設けてその答に引文を列ねさせられたものである。思召の程を深く味はねばなりません

二、引文第一正依の大經

〔本文〕大無量壽經言

今日世尊諸根悅豫姿色清淨光顏巍巍如大明鏡淨影暢中表裏威容顯曜超絶無量未會瞻觀殊妙如唯然大聖我心念言今日世尊住奇特法今日世尊住佛所住今日世眼住導師行今日世英住最勝道今日天尊行如來德去來現佛佛相念得無三念佛念諸佛耶何故威神光乃爾

於是世尊告阿難曰諸天教汝來問佛耶自以惠見問威顏乎阿難白佛無有諸天來教我者自以所見問斯義耳

佛言善哉阿難所問甚快發深智惠真妙辨才三惑念衆生問斯惠義如來以無蓋大悲三矜三哀三界所以出興於世光闡道教欲憐群萌惠以眞實之利上無量億劫難值難見猶下靈瑞華時時乃出今所問者多所饒益開化一切諸天人民阿難當知如來正覺其智難量多所道御一惠見無導無能過絶已上

〔素讀〕大無量壽經に言く、今日世尊諸根悅豫し、姿色清淨にして、光顏巍巍とましますこと、明かなる鏡の淨くして、影表裏に暢るがごとし。威容顯曜にして超絶したまへること無量なり。いまだかつて瞻觀せず、殊妙なること今のごとくましますなげや、しかなり。大型、わが心に念言すらく、今日世尊、奇特の法に住したまへり。今日世尊

佛の所に住に住したまへり。今日世眼、導師の行に住したまへり。今日世英、最勝の道に住したまへり。今日天尊、如來の徳を行じたまへり。去來現の佛、佛と佛とあひ念じたまへり。いまの佛も諸佛を念じたまふことなきことをいんや。なんがゆへぞ、威神のひかり、ひかりいましてしかるぞ。

こゝに世尊、阿難につけてのたまはく、諸天のなんぢをなしてきたして佛にまはしむるや、みづから惠見をもて威顔なごへるや。阿難、佛にまふさく、諸天のきたりてわれをなしふるものあることなし。みづから所見をもて、この義をまひたてまつるならくのみぞ。

佛ののたまはく、よきかな阿難さへるごころはなはだこゝろよし。ふかき智惠眞妙の辨才をおこして、衆生を愚念せんとしてこの惠義をさへり。如來、無蓋の大慈をもて三界を矜哀す、世に出興するゆへは、道教を光闡して群萌なすくひ、めぐむに眞實の利をもてせんさおほすなり。無量億劫にもまうあひがたく、みたてまつりがたきことなをし靈瑞華のときありて、ごきにいましいづるがごとし。いまさへるごころは饒益するごころおほし、一切諸天人民を開化す。阿難まさにするべし。如來の正覺はその智はかりがたくして、道御したまふごころおほし。惠見無導にしてよく過絶することなし。上。〔連絡〕先づ第一に、正依の大經の本文を引いて、出世本懷を明し給ふ。此引文を三段に區切つてみるとよくわかる。

- 一、初より光光乃爾までは、阿難の問。
- 二、於是已下問斯義耳までは、佛の反問と阿難の奉答。
- 三、佛言善哉已下終まで佛のお答。

一代教中大經の位置

〔古釋一〕正く文を引く中に亦其の四あり、謂ゆる大經に如來會と平等覺經と懷輿師の釋となり○初に大經の中に今の所引は序分の終の文なり。且く淨影に依らば所引の上に爾時世尊より下の願樂欲聞の句に至るまで、文を分て六を爲す。彼の疏に云く、五に爾時の下は正く發起を明す中に、三雙五重あり。初に如來の現相、次に尊者の下阿難の請問、三に於是の下は如來の審問、四に阿難の下は阿難の實答、五に佛言の下は如來の嘆許、六に對日の下は阿難の樂聞なり。此の科文の内今の所引の文は初の現相と並に請問座起等の儀を除て、正發問の言以下之を引く、又下の如來嘆許の文の殘さ第六の阿難樂聞之を略す、當要にあらざるが故に○今日と言ふは上の爾時を指す○諸根等とは淨影云く、眼等の五根、同く喜相を現するを根悅樂と名く。姿色清淨は喜色を示現す、色像成なきが故に、清淨さいふ。光耀顯言ふはこれ重て喜色を顯す、顯耀顯言ふは、重て喜相を顯す、鏡鏡はこれその高勝の貌なりと。懷輿大に同じ。義寂の云く、眼等の諸根照然として舒泰なり。姿色清淨とは姿容色像靜にして澄澗の若し。光耀顯耀は、光輝顯耀、嚴然として觀つべし。將に奇特の法を宣說せん欲す、この故に先づ非常の相を現するなり○如明等とは、淨影の云く鏡の光、外に照するを名て影表とす。外照の光、明にして鏡の内を顯はるゝを名て影裏とす。佛身も是の如し、光、明外に照して、施す所の光、佛身を顯耀するを影表裏と名く。嘉祥の云く、表裏とは表はその形を顯す、裏は心悅を明す。懷輿の云く、鏡の光、外に照を名て影表とす、即ち佛身の光、明外に照して影表裏に轉るに同じ。即ち己が所觀を顯るなりと。義寂の云く、謂く明鏡の面極淨なるが故に、體采外に將て還て自ら内に映するが如し、如來の容色顯耀すること此に同じ○唯然等とは淨影云く、唯はこれ專の義、己が專念を彰す。乃至、然は謂く爾なり、己が心中の所念實に爾ことを彰す。義寂の云く、唯然大聖とは所念を申ふるなり、中に於て先づ正く申へ、後に比決す、乃至敬て彼の旨を語するなり。

既に聖旨を蒙て教る所斯に從ふ故に明に然なり。我心念言とは自の所念を申ふるなり○今日世尊住奇特法等とは、與は下に引くが如し。法位之に同じ○去來現佛佛等とは淨影の云く、去來現の下は佛の所爲を念す諸の如來に勝たりこれ所爲なり。佛佛相念は餘を舉て此に類す。得無今佛念諸佛耶とは此を測て餘に因る。耶とはこれその不定の辭、理を以て測度するに未だ敢て專決せず、この故に耶と言ふ。懷輿之に同じ。寂の云く三世の佛更に互に所住の功德を相念す。今の佛、諸佛を念することなきことを得る耶とは謂く、今世尊必ず諸佛の徳を相念することあり、得無とは謂く必ず有るなり、下に耶を置くが故に。即ち我が世尊釋迦牟尼佛、彌陀法身淨土の因果功德を念す、旨を承け相を觀るに必ず有ることを知るなり○何故威神光光等とは、淨影の云く寶積經に云く世尊今は大寂定に入て如來の徳を行す、皆悉く圓滿の善能く大丈夫の行を建立し玉へり、去來現在の諸佛を思惟するに、世尊何が故ぞ斯の念に住するや。此文に依り、我今佛佛の相念することを思惟するに、釋尊何ぞ諸佛の現相を知らざらん耶、然るに今諸佛に超過して此の奇相を現じ玉ふ、何の故ある耶と。義寂の云く、謂く若し佛佛相念じ玉ふこと有ることなくば、何が故ぞ威光乃し是の如くなる耶と。光光と言ふは同き次に云く、表裏并に耀くを名けて光光と爲す。懷輿の云く光光とは即ち顯耀の狀なりと。梵網の疏に云く光光は盛なる義なり。

〔解釋一〕今日 通常いふごとくけふのこと。

世尊 世人の尊び敬ふ人。即ち佛のことであるが、今釋尊に向つて、あなたと申し奉るなり。

諸根 能生を根と稱し、善きことも惡きことも、これに依りて發生する所のものである。そ

れに五あり、即ち眼と耳と鼻舌と身とであるから諸根といふ。俗にいふ五官のこと。佛のお身の到る處にもといふこと。

悦豫 心の内の悦情が、表面にあらはれて、如何にも嬉しうに見えること。

姿色 總體のすがたぶりのこと。諸根の方は各部々々につきていひ、今は全體をひつくるめてのすがた。

清淨 心のきよらかさが姿にあらはれて、何處となくすき透つたやうに拜まれること。

光顔 見るもまばゆき御顔。

巍巍 山の大きく高く聳ゆる形、顔色の嚴然なこと。

明鏡淨影 喻なり。明は鏡の曇りなき貌、淨は影のかつきりした貌である。即ち明かなる鏡の面に映つた淨き影のこと。然るに現行の大經の本文には明淨鏡影とあつて、明も淨も鏡面の形容になつてをる。寛永本も亦本文のまゝを掲げてあるが、ごちらにしても意味はさう異らな

い。

表裏に就て二解

暢二表裏 古來二解あり。先づ表裏を文字のまゝにうらとおもてとに解す方では、鏡の面の磨き方も充分であり、鏡の組成分實質(裏)も精選してあれば、映つた影までが裏まで透き通つたやうに、はつきり見えると同じこと。佛の身體の表面の諸根・姿色に現はれて、如何にも悦ば

しさに拜まれる表情を見ては、その心内(裏)の悦情の有様が、透き通つて窺はれるといふの意となる。若しそれ他の一説の如く表は外、裏は内の意味に解す時は、鏡明かなればそれより外に向つて放射する光りの影も亦淨らかであり、この淨らかなる光りの影、反映して鏡面の内を照す、即ち影内外に映寫するやうに、佛光外を照して見るもまばゆく、その外照の光明、又佛身に反映して、いま一森嚴に拜まれ給ふをいふ。義としては前説が親しく、文としては後説が親しい。

威容 威徳のそなはつたすがた。

顯耀 内にそなはつたお徳が、外にあらはれてひかりかやくこと。

超絶無量 殊勝なることいふべからず。

瞻觀 おがみみること。

殊妙 すぐれてたえなること。

唯然 きつとかうでござりませうとの意。

大聖 釋尊のこと。いまは阿難が釋尊に向つて、あなたよと呼びかける詞。

我心念言 私か思ひまするにはどの意。

奇特法 常並でない奇瑞なお相。

住 止住といつて、心をそこに止め落ちつけること。即ち定に入ることである。その入定のまゝが相にあらはれた所を、住といふこともあり。住ニ奇特法一はそれである。

世雄 佛は世間最大の勇者なる故世雄と云ふ。今は釋尊に向つてあなたといふこと、世眼・世英・天尊また同じ。

佛所住 普く一切諸佛の證を思ひ浮べる普等三昧と稱する定のこと、又は大寂定といふ。所住とは定のこと。

世眼 佛は世人に、物の見分けをつけさせる眼となるから、世眼といふ。
導師行 一切衆生の大導師となる利他の徳。

世英 佛は智慧世間萬人に英れ給ふ故世英といふ。
最勝道 一ばんすぐれたる智慧のことで、自利の徳。

天尊 佛は諸天中の最尊であるから天尊といふ。
如來徳 證の最上の如來の、自利も利他也も缺げなく具はつた功德。

去來現佛 過去の佛・未來の佛・現在の佛。
佛佛相念 過去佛は現在佛・未來佛を。現在佛は過去佛・未來佛を。未來佛は過去佛・現在佛をといふ風に三世の諸佛が、互に自分の證のお智慧を以て、自由自在に他の佛のお證を、念ひ浮

べ給ふことができる。

今佛 釋尊を指してあなたもといふこと。

得無耶 ないでせうかと疑ふ裏に、あるに違ひなしと確かめる意あり。今で云へば御師匠よあなたも諸佛を念じておいでになつてをるやうに思はれまするといふこと。

何故 若しさうでないならば、なんでと念を押す意。
威神 佛の御威光。

光々 さかんにかけやくこと。
乃爾 そのやうにあるであらうかといふこと。

〔校訂〕一、大無量壽經言の六字高本は別行とせず「出世大事」の下へすぐに付けて、今日已下又別行を取つてない。

二、如明鏡淨影幡表裏 宋本・明本・高麗本の大經本文及び延書大經の文如明淨鏡………さあり永本・佛本これに同じ。正本・唐本・高本 みな如明鏡淨………に作る。原本の異か。

三、住佛所住 唐本・宋本大經の文は住諸佛所住とあり、高麗本にはなし、祖師の御引用にはあつたさみぬる。

〔大意〕阿難が釋尊に問ひ奉りて申すやう、今日、あなたは、お相のあらゆる部分に、悦の情が溢れ、御姿ぶりも、特に澄み透つて清く、お顔色、いと嚴かにましまして。丁度磨き上

堂々たる
お姿

げた鏡面に映つた淨き影の、鏡の表裏に徹き透つてみえるやうにござります。誠に堂々たるお姿ぶり、とても比ぶるものはございません。これまで永くお仕致します。私も、今日のやうに堂々たる殊勝なお姿は、始めて拜ませて頂きました。これには屹度譯のある御事。あなたよ私ばかり思ひまする。

今日世尊は、非常に奇瑞の相を顯はしてゐられませう。今日世尊は、諸佛のお證を一遍に照す、大きな定に入つてゐられませう。今日世尊は、一切衆生を濟度せんとの、大慈悲心を起してゐられませう。今日世英は、此上なしの智慧を浮べて、諸法を照してゐられませう。今日天尊は、自利利他圓滿の如來の徳を遂行せんと、腐心してゐられませう。一目拜みまして私には、ごうもさうごうもさうごうも考へられませう。あなたの御教へで私は、佛様といふ方は他のどんな佛様のお證でも、自由自在に御照覽遊ばすことができる。承はつて居りまするが御師匠、あなたも今日は、何か他の佛様のお證を念じさせられてゐるに相違ありません。でなにとごうして、そのやうに堂々たるお姿を現はし給ふ譯はござりませう。

〔古釋二〕於世尊乃至問斯義とは、淨影の如きは如來の審問、阿難の實答、第三第四兩科の文なり。義寂は名て審彼所問云て、中に於て二に分つ、一には如來の審問、阿難の實答、分文、聊か異なれどもその意大に同じ。寂の云く、位不定に居り能く深義を問ふ故に審問し玉ふなり、冥に聖旨を承て自ら斯問を發す、更に諸天我に敬

て問はしむることなし、義意此の如し煩はしく之を帖せず。

〔解釋二〕阿難 阿難陀の略名。十大弟子の一人で、多聞第一として有名な人、釋尊の從弟に當る。

諸天 諸の天界の人、梵天帝釋等のこと、印度在來の諸神を佛教では天と稱してある。

惠見 經の本文には慧見とある、智慧量見のこと。

威顔 平生に異なつて威徳の具はつた顔色。

所見 量見のこと。

斯義 大意一にのべたことごときことからのこと。

〔校訂〕一、佛耶 高本には佛耶に作る、經の本文及び諸本みな佛耶に作る、これ正。

二、惠見 經本文・草本・眞本・高本みな慧見に作る、永本・正本・曆本・文本・佛本は惠見とす、之れ不可。

〔大意二〕そこで釋尊が、前のやうなお尋ねを發した阿難に告げて仰せらるゝやう、其許は仲々氣の利いた尋ねをするが、一體それは、何か人間已上の神達の入れ智慧で、そんな問ひを發したのか、または其許自身の智慧量見で尋ねたのかと、審かり乍ら、反問あらせられたから。阿難は之に對して、否とよ、何も神達から教へられましたものではござりませぬ、私一個の量見で、かやうな譯柄をお尋ね申し上げたのでござりますると奉答した。但しかういひつゝ、釋尊

佛の反問
と阿難の
奉答

の加被力を受けて居ることは、申すまでもありません。

〔古釋三〕善哉等とは、義寂の云く、善哉阿難とは、その人を美むるなり。所問甚快とは、その問を歎するなり。發深とは、淨影の云く、發深智恵と云は、その問智を歎す、まきに佛の五種の功德を念するを發深智と名く。眞妙辨才と云は、その問辭を歎す、まきに佛の五徳に住することを歎するを、眞妙辨才と名く。實を辨するを眞と名け、言の巧なるを妙と稱す、言よく辨了し、語よく才巧なりゆへに辨才といふ。義寂の云く、智聖旨に愜ふがゆへに深し、辨時機に當るがゆへに妙なり。智深く辨妙なり、故に善哉なりと〇愚念等とは、淨影の云く、愚生問難と云は、その問の意を歎す、亦名けて問の所爲を歎すと爲すことを得。阿難まきに佛の五徳をあげて而も請問なす、この五徳は善を以て主とすれば問惠義と名く。義寂の云く、所問たゞ衆生を愚念することを存して、名利を求めず、故に甚快なりと。懷輿の云く、佛の五徳を稱す、故に深き智恵を發すと云ひ、五住の徳をもて五徳の義を歎す、故に眞妙辨才なりと〇如來以無盡大悲等とは、淨影の云く、次に難値の中に亦二、初には法、次に猶靈の下は譬なりと。初の文の中に就て無盡の大悲とは、淨影の云く、佛悲殊勝にして上を盡ふこと能はざるを無盡悲と名く。義寂の云く、無盡と言は、無上のことし、更に餘の悲の上を盡することなきが故なり、有る本には無盡に作る、義また爽ふことなしと。懷輿之に同じ。玄一師の云く、ろは盡を以て勝たりとす〇殊衰三界とは、懷輿の云く、殊はまた憐なり、殊宋韻に云く拱陵の切、矛盾一に曰く、惡なり。莊なり。憐なり。〇三界と言は、俱舍論の第十八の頌に曰く、地獄と傍生と鬼と人及び六欲天と欲界の二十と名く、地獄と州との異による、此上の十七處を色界と名く、中に於て三淨處に各三、第四淨處に入り、無色界には處なし、生に由て四種ありと。論註の上に云く、三界一にはこれ欲界、所謂六欲天と四天下の人と畜生と餓鬼と地獄等これなり二には色界、所謂初禪と二禪と三禪と四禪との天等これなり、三にはこれ無色界、所謂空處と識處と無有處と非相非々想

三界

眞實利とは名號

處天等これなり。この三界は盡しこれ生死の凡夫流轉の閻宅なりと〇光聞とは、教法人を利するを、名けて道教とす。理を證して物を益するを、以て眞實と爲す、光は廣なり、聞は暢なり、惠は施なり（諸師意）今宗義に依るに、道教と言は、光く一代を指す、益五乘に亘る。眞實利とは此名號を指す。即ちこれ佛智なり、名號を指すは流通文に云く、それかの佛の名號を聞くことを得て歡喜踴躍して乃至一念することあらん、當に知るべし此人は、大利を得とす、即ちこれ無上功德を具足するなりと。同經の文に佛の五智を説いて云く、疑惑を生ずるものは大利を失すことなし。信と疑とに就てその得失を説くに共に大利といふ、名號を念するを以て説て大利とす、佛智を疑を以て大利を失すことなし、名號と佛智と全くこれ一法なり、序分に之を標して眞實の利と説く、宜しく之を思擇すべし〇次に譬の中に就て、淨影の云く、靈瑞華とは梵には優曇波羅と云ふ、又優曇鉢樹と云ふ。法華文句に云く優曇華とは此には靈瑞といふ、三千年に一たび現す、現すれば則ち金輪王出づと云ふ……〇時時と言ふは懷輿の云く、希出の義、善時を以て出るが故にと〇今所問の下天人民に至るまでは、佛、所問、益多きことを歎する文なり〇阿難等とは……初に先づ阿難の所問を述るに就て、相對するに異あり。淨影の云く、如來等とは此に五句あり、初の一句は總、後の四句は別なり、これ則ち前の五徳を述、成す。謂ゆる如來覺は前の奇特を述す、正覺は即ちこれ佛の所得なるが故に。其智難量は前の佛住を述す、佛智よく涅槃の理を證するが故に。多所導御は前の導師を述す、四攝等を以て衆生を導が故に。惠見無碍は如來の徳を述す、如來の徳みな惠を主とするが故に。無能過絶は、最勝道を述す、菩提勝たるがゆへに、他人の爲めに止抑せられざるが故に。懷輿之に同じ、但し小異あり、第四第五相翻するこれなり。

〔解釋三〕善哉 それはよくでかした、感心なことだと嘆美の詞。

甚快 心になふて非常に嬉しい。

深智恵 佛の證を見ぬくほどの深い智慧のこと。

真妙辨才 思ふたまゝを上手に言ひあらはす辯舌の才能。

發 發揮すること、智腦をしばり辯舌を揮ふこと。

愍念衆生 自分ばかりでなく、衆生と共に法益に與らんとおもふ同情親切の心から。

惠義 智慧ある者でなければわからぬ事柄といふこと。

如來 佛の通名。今こゝは、すべて佛といふものはと仰せらるゝ言外に、釋尊自らのことを

仰せられる意である。

無蓋 おほひかくすものがないといふことを以て、際涯なき廣大なる有様の形容とする。

矜哀 あはれむこと。

三界 欲界色界無色界で、細別は上の古釋を見よ。

出興 降誕のこと。佛の誕生は證の境界から相をこゝに出現し給ふたから出興といふ、正信

偈には興出とあるが、意は同じ。

道教 上二四八頁を見よ。

光闡 同上。

群萌 同上。

眞實之利 同上。

難値 佛の出世にあふことの難しいこと。

難見 出世には値ふても、佛を拜むことが又難かしいこと。

靈瑞華 上の古釋を見よ。

時時 長い時間の間に稀に。

饒益 豊饒なる利益で、大利益のこと。

開化 法門を説きひらいて化導すること。

正覺 佛のおさとり。

道御 導き調御。

惠見 智慧のこと。

無碍 さまたげられぬ事。

遏絶 ふさぎとめること。

〔校訂〕一、深智恵 經の本文・眞本・高本は深智恵に作る。永本・正本・歷本・文本・佛本みな深智恵に作る。前者正し。

二、辨才 經の本文・高本は辯才に作る。歷本・文本・佛本みな辨才に作る。永本と正本とは弁才とす。辯才正し。

- 三、惠護 經の本文・真本・高本は慧護に作る。永本・正本・曆本・文本・佛本 惠護に作る。前者可し。
- 四、無蓋 經文に二種あり、無蓋せしは唐本・宋本である。その他は無蓋とす。後者正し。現行の本無蓋に作る。曆本文本・佛本・高本は無蓋に作り、永本・正本は無蓋に作る。前者可し。
- 五、玲哀 經文・佛本・高本玲哀に作り、曆本は玲哀に作る。前者正し。
- 六、欲辯 曆本欲辯、經文・永本・正本・文本・佛本・高本みな欲辯とす、これ正し。
- 七、瑞華 經文・曆本・佛本・高本みな瑞華。永本・正本は瑞華に作る。
- 八、道御 經文・草本・真本・永本・佛本・高本みな道御に作る。正本・曆本・文本は道御。前者よし。
- 九、惠見 經文・真本・高本は惠見。永本・正本・曆本・文本・佛本は惠見。前者よし。
- 二〇、無碍 經文・高本・無碍に作り、曆本・佛本無碍に作る。

〔大意三〕 阿難の奉答を聽いて、釋尊が仰せらるゝには、阿難よ善くでかした、其許の尋ねは深い智慧を以て、我が證を見ぬいた所を、まことに巧な辯舌で言ひ表はしたものであつて、誠によく我意になつて、嬉しくもまた喜ばしい。我は其許の尋ねを發端にして、これから廣大法門の話をする因縁ができたのだ。されば其許の尋ねは、其許一人の法益に止まらず、廣く一切衆生を利益する譯柄がある。抑も佛は、限りない大慈悲の心で、三界の衆生を憐れみ給ふ、我が此世界に出現したのも、亦その慈悲行を遂行するより他事はない。そこで廣く八萬四千の法門を説いて、一切群生に眞實究竟の大利益を得しめさうと思ふのである。三千年に僅か一度

開く優曇華の花のやうに、仲々値ひ難い佛の出世、仲々拜み難い佛の尊容である。殊に今日の私の證をや。然るに其許は、よく之を洞察して、これから我に、其證のまゝの法門を説かされるやうな、かくの如きの問を發した爲めに、人々の蒙る利益は多いであらう、人々の救ひに導かれる者も多からう。阿難よ知れ、如來の證は智慧無量にして、衆生を道御こと誠に多く、その智慧をまた礙げるものがないから、作用もまた限りがない。

三、出世本懷經

一、大經の御説法の由來を述べさせられる序分の中にある、この御文を讀んで、説者たる釋尊の堂々たる態度や、嚴肅なる宣言や、聽者たる阿難尊者の注意振り等から想像すると、如何に大經の御説法に重大な意義が含まれて有つたかを知ることができるのであるが、就中左の文を着眼點として、當流では大經は釋尊出世の本懷經であると斷定せられてをる。その文は

「如來、無蓋の大悲を以て、三界を玲哀す。世に出興する所以は、道教を光闡して、群萌を拯ひ、惠むに眞實の利を以てせんと欲すなり」。

此文を祖師は、上に大經の大意を釋し給ふ所では「釋迦世に出興して云々」と、直ぐに釋尊の出世本懷として解釋し給ふてあるが、一多證文では、「如來」といふを、下にも引いてある如來會の「一切如來」の語と同意義に見て、一切諸佛の本懷、悉く彌陀法に在ることを述べられてあ

る。一多證文の文は、

「大經には如來乃至眞實之利とのたまへり。この文のころは、如來と申すは諸佛を申すなり、所以はゆへといふ言なり、興出於世といふは佛の世にいでたまふと申すなり、欲はおぼしめすと申すなり、拯はすくふといふ、群萌は萬の衆生といふ、惠はめぐむと申す。眞實之利と申すは彌陀の誓願を申すなり。しかれば諸佛の世に出で給ふゆへは、彌陀の願力を説きて、よろづの衆生をめぐみすくはんとおぼしめすを本懐とせんとしたまふがゆへに眞實之利と申すなり、しかればこれを諸佛出世の直説と申すなり」。

た釋尊の本懐とするのよりは、餘程廣くなつてをるが、意味から云つても、諸佛も釋迦と等しく、彌陀の化現であるから、釋迦の本懐と云ひ得ると同時に、諸佛の本懐といふことが成り立つ譯である、況んや既に如來會には「一切如來」と明言してあるをやである。

二、が大體から云へば、この出世本懐説は、直接大經の説者たる釋尊を中心にして考へねばならぬ筈。殊に天台や法華宗の方に、釋尊の出世本懐は、法華經を説き給ふに在つたといふ、有力なる出世本懐説があるから、彼れと對抗上、どうしても釋尊一佛丈けについて論すべきものである。天台や法華に、金科玉條として、出世本懐を主張する、有名な經文は、法華經の方便品にある。

諸佛の本懐

「唯、一大事の因縁をもての故に、世に出現せり。」

といふので、之と無量義經の「四十餘年未だ眞實を顯はさず」の經文と組合せると、釋尊成道後四十餘年間の説法は方便非本懐經、それから後の法華經の説法が眞實本懐經であることになり。これは諸宗共に一目おく所であつて、有力なる反證がなければ、何人も否定することができない。然るに淨土門殊に眞宗の祖師已來、盛に大經が出世本懐經なることを主張し給ふには何か有力なる論據がなければならぬ。之に就て、勿論着眼點は經文であるが、別に理論上の斷定と、信仰上の事實とを見逃す譯には行かぬ。

經文の解方より

三種の論據の說明

三、三理由の中、先づ始めに經文をどう解釋するかといふに、經文の中、要所中の要所と云ふべきは「道教」と「欲」と「眞實之利」との三所七字である。道教とは前述の如く聖道八萬四千の法門であること、同じ大經中「普現道教」宣布道教の語例に照して明かである。欲の字はよく假名にもおぼしてなりとあつて、希望・所望・本望等を意味し、目的のある所をあらはす言葉であるが、その目的何れにありやと云はゞ、眞實之利を得させるのにある。眞實之利とは、客觀で云へば本願、主觀で云へば信仰なること、同じ大經中、明信佛智の信仰を「得大利」と仰せられてあるに照して明かである。されば本願を説き信仰を得しめるが、釋尊の本望である。従つて聖道教の説法は、それまでの地ならしに過ぎなかつたさいふこそが、彼の經文の上に明瞭である。若し聖道教を説く事と、本願を説くことと、兩方共、佛の本望であるならば、欲の字は光闡道教の前に安かれなければならないに、そうでなくして、眞實之利丈けに蒙らせてある所が、實に味ふべき點である。

四、次に理論上より云へば、自力で行ける根機相手の教への中では、法華經が出世の本懐。自力で行けない末世の凡夫人を相手の側から云へば、他力門の彌陀法大經が出世の本懐で、角力に譬へば、東と西の兩大陸と云ふ格であるが、さてそれを取り組ませてみるに、謂ゆる如來以無量大悲、矜哀三界で、迷界の荒波を渡れぬ衆生を渡すが説法の本旨であるから、自力門の法華よりも他力門の彌陀法が、御本懐であるのは、理の當然である。此説をなしたのには、在覺師の六要鈔である。即ち曰く

「問大事の因縁は、文、法華にあり、今の經、更に本懐の言なし、何ぞその職を成ぜん。答その出世の本懐の職を論するに二の意あり。一には教の權實に約す、三乗はこれ權、一乘はこれ實の故に、一乘を以て本懐となす、これ法華の意なり。二には機の利鈍に約す、般舟證に云、(法華は)根性利なる者はみな益を蒙る鈍根無智なるは開悟しがたし、と。玄奘に云、諸佛の大慈は苦者に於て、心、偏に常波の衆生を愍念し玉ふ、是を以て、勤て淨土に歸せしめ玉ふと。」

ところがもう一步進んで、大經の法門が實地に活いた觀經の説法であること、丁度法華經の御説法中に、これを受ける根機が現れたものであるからお説きになったものであつて、法華同時の經である。同時代の御説法ではあるが、相手が異ふから、一方は法華經、一方は觀經となつたまでで、法門その物は一で、少しも異りがないのである。されば法華が出世の本懐であるといふことは、觀經(即ち大經)が出世の本懐であることをあらはしてなり觀經が出世の本懐であるといふことは、法華が出世の本懐であることをあらはすのである。即ち御經よりも、法門その物について、考へてみた議論である。覺如上上人の出世元意などが此説の根本である。

五、經文の解釋のみでは、餘りに直譯的であり、理論上の断定のみでは、餘りに冷かである、

この兩者を活かすものは、信仰であります。彌陀法に依つて始めて救はれ給ふことができなかつた御自身に於ては、如何に他に、高尚幽遠な教義があらふと儘よ、それは何の役にも立たなかつたのである。たゞ自分が救ひに預られた彌陀法の方に、意義と權威とを認められるのは當然で釋尊はこういふ行じ易く修め易い法門を説いて、自分を助ける爲めに、御出世遊ばされたものであると、感激のまゝを、言辭に表はし給ふたのが、祖師の謂ゆる出世本懐論の根抵である。この信仰から、彌陀法と聖道一代教とを比較し給ふと、彌陀法のいよ／＼勝れたることがわかり、その眼光で經文を眺め給ふと、道教と眞實之利の區別が明かになるのである。されば出世本懐といふ命題は、對外的の命題ではあるが、而も信仰を除外して了つては、理論として成立つことは成り立ちても、祖意に徹底しないのである。

四、如來會と平等覺經

〔本文〕無量壽如來會云

阿難白佛言世尊我見二如來光瑞希有。故發二斯念。非因二天等。佛告阿難。善哉善哉汝今快問。善能觀二微妙辨才。能問二如來如是之義。汝爲下。一切如來應正等覺及安住。大悲。利益群生。如二優曇華希有。出現。世間。故問。斯義。又爲。哀愍。諸有情。故能問。如來如是之義。

平等覺經言

佛告阿難。如世間有優曇鉢樹。但有實無有華。天下有佛。乃華出耳。世間有佛。甚難得值。今我作佛。出於天下。若有大德。聰明善心。緣三佛意。若不妄在佛邊。侍佛也。若今所問。普聽諦聽。

〔素讀〕無量壽如來會にのたまはく、阿難、佛にまふしてまふさく、世尊、われ如來の光瑞希有なるをみたてまつるがゆへに、この念をおこせり、天等によるにあらず。佛、阿難につげたまはく、よきかな。汝いまこゝろよくさへり。よく微妙の辨才を觀察して、よく如來にかくのごまきの義をさひたてまつれり。なんぢ一切如來應正等覺、および大慈に安住して、群生を利益せんがために、優曇華の希有なるがごとく、大出世間に出現したまへり。かるがゆへにこの義をさひたてまつる、またもろくの有情を哀愍し利樂せんがためのゆへに、如來にかくのごまきの義をさひたてまつれり。平等覺經にのたまはく、佛、阿難につげたまはく、世間に優曇鉢樹あり、たゞ實ありてはなあることなし。天下に佛まします、いましはなのいづるがごとくならくのみ。世間に佛ましますもはなばだまうあふことをわがたし。いまわれ佛になりて天下にいたり。もし大德ありて聰明善心にして佛意をしるによりて、もしわすれずば佛邊にありて佛につかへたまふ。もしいまこゝろ、あまねくきゝあきらかにきけ。

〔連絡〕上に引いた正依の大經の意味を、補ふために異譯の經文を引かれたものである。如來會の方は阿難の奉答と佛の應答との二段を引き、覺經の方はたゞ佛の應答のみを引いてある。

〔解釋〕無量壽如來會 大寶積經無量壽如來會の略。唐の菩提流支三藏の譯するところ、大經

十二譯の中では第十一代の譯である。現存の經典である。大寶積經四十九會一百二十卷の中は、第五會第十七、八の二卷に收まつてをる。

光瑞 ひかりかややくよいお相。

天等 諸天と諸佛とである。平等覺經に「また諸天なく、諸佛の我に教へ玉ふことなし」とあるに照してみればわかる。

快問 我が意にかなふよいたづね。

善能 つよくほめる詞。

微妙 微妙なところまでよく氣のつくこと。

辨才 の下にもつての送り假名を付して讀むころ。

應 應供の略。人天の供養に應ずる位置にある方にて、佛のこと。

正等覺 或は等正覺とも書く。正偏知といふのも同じ、正直平等な證を開いた方で、佛のこと。

及 の字、二十唯識や俱舍論の光記の例にならひ、ひとしくの意と見たる先輩あり、面白い解さかたである。

安住 いつも心をおこくこと。

大士 大丈夫といふも同じ、菩薩の通名であるが、今は釋尊のこと。

有情 情識のあるもの、三界の衆生のこと。

哀愍 ふびんにおもふこと。

利樂 しあはせを得させ樂みを與へること。

〔校訂〕一、無量壽如來會言 の七字、高本別行を設けず、阿難已下を別行としてある。

二、辨才 高本辨才に作る、可。

〔大意〕又大經の異譯たる如來會の中には、こう説かせられる。阿難が申し上げるやう、御師匠よ、私はあなたの光かやく瑞相を拜みまして、私の心におもふたまゝを、お伺申しましたのでござりまする、決して諸天や諸佛の入れ智慧ではござりませぬと。そこで釋尊の仰せらるゝやう、よくできた。その許の尋ねは、まことに我が心になふた、よき尋である。その許は、よくもまい、そんなよい尋ねをするだけの、そこまで氣のつく智慧のはたらきと、それをのべる辯舌の才を有つて居ることかな。阿難よ、佛といふものはみな、大慈悲の心より、衆生を利益しやうと、いつも心掛けてをるものである。今我もまたその慈悲の心より、衆生済度のために、滅多には咲かぬ優曇華の花のやうに、珍らしくも茲に出世したのであるが、その許はよくも我意を知つて、かやうな尋ねを發したことを、誠に嬉しく思ふ。そうして又、

自己一身の爲めではなく、廣く迷の衆生に幸福を得させ、樂みを與へんどの利他心から、我にこういふ尋ねをした、その優しい慈悲の心を尊とすとす次第である。

〔解釋〕一、平等覺經 佛說無量清淨平等覺經の略。之に二譯あり、一は現存し、一は缺本となれること第二章(上五頁)を見よ。缺本になつてをる帛延譯の分は、支那已來の缺本であるから、祖師の御覽になるべき手縁なき譯であるのに、祖師は、御所覽の平等覺經を帛延譯としてをられる(教行信證開卷第一總序の前の處、眞佛士卷三丁及び二卷鈔では上卷十二丁参照)、之は祖師已前よりあつた一説を御依用になつて、他の説で支婁迦讖の譯であると稱してをる現存の本を、帛延譯となされたものであらふ、凝然大徳の淨土源流章にも帛延譯としてある。が何分一方が缺けて一方だけ残つてをるから、此上研究の餘地がないのである。所がこう決めて了うと一つの故障が、寛永本には「平等覺經後漢月支國三」とある、それは假りに何かの誤りと見れば見られもしやうが、六要鈔には明かに「五存といふは一には無量清淨平等覺經二卷月支沙門支婁迦讖後漢の代に譯す」と言つてある。そこで眞宗にも古來兩説のあつたことだけを、知つておかねばならぬ。

若 延書には、もと讀んであるが、諸經にはなんぢ(汝)とよませてある、後の方が意味通じ易し。

大德 徳のすぐれた人、佛が阿難にこう仰せられた、その譯は下にある。

聰明 智慧のさといこと。

善心 慈善心のこと。

緣 經の本文は豫の字なり、その方が意味強く、前後の文勢にも、よく合ふ。佛の説き給はざる先に、あらかじめ佛知を知つた、實に大徳だといふ事になる。

不妄 傍訓の如く訓むならば不忘とすべし、不妄と不忘とでは、意味大に異なる、下の校訂と大意とをみよ。

侍佛 常に佛に侍て居ること。

普聽 よく聽聞せよといふこと。

〔校訂〕一、高本は佛語阿難已下經文を平等覺經の五字のすぐ下から初めて、別行にしてない。

二、乃華出 覺經本文は乃有華出に作り、引用文は有の字を脱す。

三、緣知 覺經本文、佛本、高本共に縁知とす、之れ正し。正本、曆本の縁知に作るも、意通ぜざるに非ず。

四、不妄 永本、正本は不忘に作る、經文、草本、曆本、文本、佛本、高本は不妄に作る。傍訓に「わすれず」と云うてあるが、そうすれば不忘の方がよく、又前後の文勢から云へば不妄の方がよい。恐らく之れが可からふ。

五、普聽 經文、佛本、高本普聽に作る、曆本、文本は普聽、前者が可し。

覺經文に對する二

〔大意〕一、上の〔解釋二〕及び〔校訂〕に従つて講ずれば、

釋尊が阿難に向つて仰せらるゝやう、佛が世に出るといふ事は、丁度實は結るが、花の開かぬい優曇華に、花の咲いたやうに、誠に珍らしいことである。また佛は出世しても、その教へに値ことは甚だ難しいのに今、我は佛となつてこの世に出で、汝は弟子となつて我が教を聽く、誠に希れなことゝ云はねばならぬ。所が汝は聰き智慧、感み深き心を以て、説かざる已前に、我が意を知り抜いたほどのわらい者。かくてこそ汝が濫りに佛邊に侍して居ない（即ち我と汝と久しく師弟の縁を結んだ）所詮がある。汝が今尋ねた義を、よくきいて會得せよと。

二、前の送り假名や經書の讀み方に従つて講ずれば、……我は佛となつて此世に出で、汝は弟子となつて我が教を聽く、誠に希れなことゝ云はねばならぬ。かやうな機運に向つてをるから、若し萬が一にも、そなたのやうな聰い智慧や感れみの心をもちてをる大徳が、我が意を洞察してくれて、説いた教へを少しも忘れずに後世に傳へることができたらば、永らく師弟の縁を結んだ所詮がある……云々。

五、憚興師の釋文

〔本文〕憚興師云、

今日世尊住奇特法、依神通輪一所現之相非今日世雄住佛所住、住三尊等三昧一能制二、今日世眼住導師、五眼名道師行引二尊、今日世英住最勝道、佛住三尊等三昧一能制二、今日世眼住導師、衆生一無二過上二故、獨秀無二追故、今日天尊行如來德、即第一轉天以二、阿難當知、一代教中大經の位置

如來正覺 之法 即奇特 惠見無導 之道 無能過絕 即如來之

〔素讀〕愷興師の云く、今日世尊、奇特の法に住したまへりといふは、(神通輪によりて現じたまふ所の相なり。たゞつれに異なるのみにあらず、またひさしきものなきがゆへに) 今日世尊、佛の所住に住したまへりといふは(普等三昧に住して、よく飛躍雄健天を制するがゆへに) 今日世尊、導師の行に住したまへりといふは(五眼を導師の行になづく。衆生を引導すること、過上なきがゆへに) 今日世尊、最勝の道に住したまへりといふは(佛四智に住して、ひさり秀でたまへること、ひさしきことなきがゆへに) 今日世尊、如來の徳を行じたまへりといふは(すなはち第一義天なり。佛性不空の義をもてのゆへに) 阿羅漢にしろべし、如來の正覺といふは、(すなはち奇特の法なり) 惠見無導は(最勝の道を述するなり) よく過絶することなしは(すなはち如來の徳なり) 已上。

〔連絡〕上に引いた正依の大經の文中、五徳瑞現の一段の文の意味を、愷興師の釋文によりてあらはし給ふ一段。

〔古釋〕次に興の釋の中に、奇特法を釋するに神通輪とは三業の中にこれ身業の名なり、……これ法相宗の名目のみ○佛所住を釋するに、普等三昧とは六八願の中、第四十五の願名 見佛の願に説て言く、……普等三昧住是三昧……愷興釋して云、普等は即ち普通の義、等は即ち齊等の義、所見普く廣し、佛をばみな見る故に住する所の定を名けて普等とす。支一の釋に云云……問何等の義に依て普等と名くる耶、答上の所引の兩師の釋の如きは見佛の願に依て普等とす、此果の名に従ふ、因に従て言はゞ念佛三昧と名くる、これその名なり○導師の行の中に五眼といふは常途の說に依に、一は肉眼、二は天眼、三は慧眼、四は法眼、五者佛眼なり。肉眼と言は人聞

普等三昧

五眼

四智

の扶根を肉と名け、正根の淨色の能く見るを眼と名く……天眼と言は、禪定を天と名く、天に依て眼を得る故に天眼と名く、天中の淨色を以て其體とす、よく衆生の此死生彼を見る。大論の三十三に云く、肉眼は近を見て遠を見ず、前を見て後を見ず、外を見て内を見ず、晝を見て夜を見ず、上を見て下を見ず、此等を以ての故に天眼を求む、遠近みな見る、前後内外上下悉くみな無碍なりと。已上、慧眼と言は眞諦を緣する智、よく空理を照す故に、慧眼と名く。法眼と言は俗諦を緣する智、よく法を照す故に、名て法眼とす。佛眼と言は、人に就て名と爲す、故に佛眼と名く、中道を緣する智を以て、其體とす。此五眼に於て四眼はこれ總なり、四眼佛に至りければ、悉く佛眼と名く……最勝道の中に四智と言ふは、如來所具の功德なり。一には大圓鏡智、第八識を轉ず、佛果に之を得る、諸の分別を離れて、此智の上に身土影現すること、鏡の上に衆の色像を現するが如し、この故に名て大圓鏡智とす。二には平等性智、第七識を轉ず、初地に之を得る。これ自他の有情の平等を觀す、この智品、大慈悲等の功德と相應す。三には妙觀察智、第六識を轉ず、眞の見道の初に此の智品を得る。よく諸法の自相共相を觀す。四には成所作智、前五識を轉ず、佛果に之を得る、普く十方に於て種々の變化の三業を示現す、事業を應作す○如來徳の中に即 第一義天等と言ふは、釋の意全く淨影の所解に同じ○阿羅漢以下は、前の問に對する文なり。

〔解釋〕愷興 師の傳詳 かならず、法相宗の學者で、述文讀と稱する大經の解釋三卷を作つた人。

神通輪 佛の御體にあらはれる、不思議な作業のこと。

異常 の二字異本には、「常に異なるのみに非ず」と、常の字を上につけて讀むである、蓋し

普通とは異ふとの意味になるが。今の読み方は、異と常とを離して「異なるのみに非ず、常に云云」といつてある、この時は、不思議なばかりでなく、常に何々といふ意味になつて、前の読み方と大分意味がちがふのである。後のがよろしい。

普等三昧 述文讃の本文には、諸佛平等三昧と云つてある。すべて、佛境界をみな見る定、古釋を熟讀せよ。

衆魔 いろいろの魔。正しき知、正しき行を、妨げるものを魔と云ふ、五陰魔・死魔・煩惱魔・天魔を、四魔といふ。このこと。

雄健天 四魔中で特に、勢力の最も強い天魔のこと。

五眼 古釋を見よ、佛のまなこ。

道師行 述文讃の本文、導師行に作る。衆生を導くはたらきのこと。

過上 述文讃の本文、過者に作る。こゑすぐるもの。

四智 古釋を見よ、佛の智慧。

述文讃の本文、匹に作る。他にくらべるものゝこと。

第一義天 眞如を第一義といふ、之を證つた位の高い方、即ち佛のこと。

佛性不空 佛性常住のこと、佛界に於て、初めて之を實現する。述文讃の本文には、佛の上

に解の字を加へてある。これはさどつたこと。

〔校訂〕一、懷輿師云今日等、佛本・高本には覺經の文の終りに直ぐ續けて掲げてある。

二、普等三昧 述文讃本文には諸佛平等三昧とある。諸本みな普等三昧に作る。

三、名道師 述文讃本文には名導師とある、原本名導師とある外、みな名導師に作る、これ正し。

四、無過上 述文讃本文には無過者とあり、諸本みな無過上とす。

五、無返 草本・眞本・原本は無返とし、述文讃本文・永本・正本・文本・佛本・高本みな無返とす。佛本には一

クヒと傍訓を附してある。無匹の方がよからふ。原本には「ひさしき」傍訓を附せり。

六、以佛性不空 述文讃本文は以佛性不空と云つてある、諸本みな解の字を略す。

七、奇特之法 述文讃本文・草本・眞本・原本・佛本・高本みな奇特之法に作る、永本・正本・文本は奇特之法也に作る。

〔大意〕法相宗の學者懷輿師は、その著述文讃の中に、釋して云はるゝやう、今日世尊奇特の法に住したまへりといふのは、釋尊が、御體の不思議な作用で現はし給ふた、すぐれた御相のことで、不思議なばかりでなく、外にくらぶべきものがない事。又、今日世尊、佛の所住に住したまへりといふのは、釋尊が、諸佛の證を平等に見給ふことのできる、普等三昧といふ大きな定に入つて、衆の魔、特に力の強い天魔の如きを征服してしまはれる事。又、今日世眼、導師行に住したまへりといふのは、釋尊が、五眼と稱して衆生濟度に、此上もないお作用を具

へ給ふ事。又今日世英、最勝道に住したまへりといふのは、釋尊が四智と稱するお知解を具へられて、何にも匹へものないほど、秀でさせられる事。又今日天尊、如來の徳を行じたまへりといふのは、釋尊が、佛性常住の佛の證を實現せられて、思ふまゝに自利々他を行じ給ふ事。こういふ五つの瑞相を發揮し給ひたのが、將に大經を説かんとして、機縁を求めてゐらせられた釋尊である。そのなりが阿難尊者の慧眼に映じて、發問する事になつた。そこで釋尊は、出世本懷の説法を宣言し、且つ付言して阿難當知等と仰せられた。あの五句は、とりも直さず前の五徳をお示しになつたもので、如來の正覺といふのは、奇特の法のこと。其の智量り難しいふのは、佛の所住のこと。多く道御する所といふのは、導師行のこと。惠見無導といふのは、最勝道のこと。よく遇絶するものなしといふのは、如來の徳のことである。斯くの如く釋尊は今正に五徳の瑞相を現しつゝあることを自言して、將に説き給はんとする大經の、重大説法なることを、知らせ給ふたのである。と憬興師の釋された中から、祖師はたゞ三句だけ抜いて二句を略し給ふてある。

五句と五徳

偕この五徳瑞現は、出世本懷の宣言の前提であつて、同時に又大經の説教に貫目を添ゆるものである。然り而して斯やうに堂々たる瑞相を示し、斯やうに嚴肅なる宣言の下に説き給ひた大經が、釋尊一代經中、如何なる位置に置かるべきかは、最早や論ずるまでもないことで、從つて淨土眞宗の法門を、眞實教の名に以て呼ぶのも、何れの點から云つても理由のあることであります。

一九 結 文

一、文字上の解釋

〔本文〕爾者則此顯真實教明證也誠是如來與世之正說奇特最勝之妙典一乘究竟之極說速疾圓融之金言十方稱讚之誠言時機純熟之真教也應レ知

〔素讀〕しかればすなはちこの眞實教の明證なり。まことにこれ如來與世の正說、奇特最勝の妙典、一乘究竟の極說、速疾圓融の金言、十方稱讚の誠言、時機純熟の眞教なり。しるべし。

〔連絡〕教の卷の結文。その中を初めの一句で上の引證の文を結び、誠是以下の六句で、教の卷全體を結ばれたものである。特にこの六句は、結嘆の六句と稱して修辭上からも、法門の詮はし方からも巧妙を極めたものである。

〔古釋〕爾者以下はこれ總結なり、今その中に於て○如來與世の正說とは、出世の本懷、濟凡の義、上に具に述るが如し○奇特最勝の妙典とは、奇特の法に住し、最勝の道に住して、説く所の教なるが故に○一乘究竟の極說とは、此の經の下に云く、一乘を究竟して彼岸に至る。曠寂釋して云く、一妙道を以て、普く群生を載て、自他俱に無爲の岸に至る。此の徳を得べきの極說なるが故に○速疾圓融の金言とは、又云く一世勤苦は須臾の間なり、後に無量壽佛國に生じて快樂極りなし、長く道徳を合して明なり、永く生死根本を抜く。須臾の間・永投生死はこれ速疾の

益なり……○十方稱讚の誠言とは第十七の願、諸佛咨嗟すなばち其意なり、小經所説の諸佛の證、誠この願に依るのみ○時機純熟の眞教とは、釋尊の與世、大悲の本懷、これ時機純熟によるが故なり。流通の文に云く當來の世に經道滅盡せんに、我れ慈悲を以て哀愍して特に此經を留めて止住すること百歳せん。法滅百歳せんの時下機猶以て得脱す、何に況んや末法最初の今の、時節相應し機緣純熟す……當卷の大旨略して述ぶること斯の如し。

〔解釋〕爾者則 上を承けて結ぶ詞。その承ける所は、何を以てか出世の大事なりと知ることを得るとならば」の句である。そうすれば茲は、

顯眞實教 と云はず「顯出世大事」とでも云はるべきであるが。そこが祖師の意では、引證の文を以て、出世本懷經たることを論斷し給ふのではなく、大經の眞實教たることをあらはし給ふのが、眼目であつたのである。此四字延書の如く「眞實教を顯はず」と訓む方が可い。

明證 明かなる證據。

興世 興出世の略。上二四八頁及び二七二頁を見よ。

正說 正しく出世本懷の教説であること。

奇特最勝 語の典據は上の大經五德瑞相の中の第一第四(第二六五、二六六頁)を見よ。奇特最勝の證に住して説き給ふた教のこと。

妙典 すぐれた御經。

結 文

一乘究竟 語の典據は大經下卷、古釋を見よ。如何なる機でも、皆な平等に乗せて、迷の海を渡すところの法門を、一乘法といふ、華嚴天台の如きがそれである。然るに彼れは只理のみ眞の一乘法は、他力の彌陀法であるから、之を究竟の一乗とし給ふのである。

極説 結構な教説のこと。

速疾 はやいこと、古釋を見よ。

圓融 功德満ちて、自在の用をなすこと。上の(二〇四頁)を見よ。

金言 佛の金口から出たお言葉のこと。

十方稱讚 十方國土の諸佛のほめたへ給ふこと。語の典據は、大經下卷に「十方國土の諸佛如來、常に共に稱揚し讚嘆し給ふ」とあり。

誠言 證誠のお言葉。

時機 末法の時節、下劣の根機。古釋にある如く、獨留斯經といふ大經の流通分の文意により給ふたもの。

純熟 かなふこと。

〔大意〕上に引いた經文の意味を、熟讀玩味してみれば、大經を眞實の教であるとし給ふの佛意明瞭である。誠にこの大經こそ、正しく釋尊出世の御本懷の教で、特に奇瑞を現じてお證のま

を説き給ふた結構なお經であり。一切衆生を悉く涅槃の岸に乗せて渡す一乗教の中の、眞の一乗教たる、彌陀の他力を説かれた此上なしの結構な教であつて。その他力彌陀法の作用は速くして、その功德は圓滿自在なることを説かれ、十方諸佛もまた、之を稱め讚へて證據に立ち給ふほどの教説で。餘經の教へが用をなさぬほどの、末の世の淺ましい根機にでも、こればかりはよく適應する、眞の救ひの道である。何んと貴い教説ではないか。

此結嘆の六句の語、若くは意味の依り處が、次のやうに、大經の序分、正宗分、流通分の三分に亘つてゐる點、よく注意して拜讀すべきである。何となれば祖師、此の僅々六句の中に、大經上下二卷全體を收めて、よくその眞實教たる所以を云ひ顯はさうと、苦心し給ふたこと、驚くべき文才どが、偲ばるゝからであります。

二 教卷拜讀のあこ

教卷の重
要教義

一、已上私は教卷を拜讀して、誠に手短な一卷の中に、種々な重要教義を、説き明されてあることを、思はざるを得ない。曰く「淨土真宗」、曰く「二種廻向」、曰く「三法四法」、曰く「大經大意」、曰く「大經宗體」、曰く「出世本懷」等は、その重なるものである。爾うして其の何れの問題も、みな真宗教義の、大體上に關係し、内容に立ち入つた、細々しい問題ではない。従つて抱括的の理論に亘り、我々の信仰問題と、直接關係はないやうである。併し乍ら、一軒の家となると、門や扉や玄關などの、大向の構造も必要であるやうに、一個の宗教としては、這般抱括的な理論がなくてはならぬ。こんな意味に於て、教卷は、外、真宗にあらざる人々に對して、真宗の何たるかを紹介し、内、宗徒をして自分の所屬の宗義の一斑を、解領せしむるものである。

二、教卷に説き明された、種々な重要教義の中でも、特に重要なものは、「二種廻向」と「出世本懷」とである。今その前者について言ふに、凡そ宇宙間の如何なる宗教と雖も、謂ゆる絶待者の、加被力擁護攝理を言はざるものはない。自力といふも畢竟、程度の差で、絶待的の自

宗教の極
致

力は、宗教といふ宗教には、あり得ないのである。然るに五と五とを合すれば十となり、四と六とを合すれば十となる等の如く、自己と神若くは佛とを合して、自己が、神佛の域に到達するてふことは、科學的には成立するも、宗教的には、甚だ無意義なるものである。何となれば若しかる科學的論法によるとせば自己（五と假定しても四と假定しても）が、神佛の力（五若くは六と假定し）と合體して、完全無缺の境地に到達するには、元の不完全なる自己（即ち五又は四だけの分量）を、改造して行くのに、幾等かの努力と時間とを要するや本よりである之れを換言せば、一分／＼自己を改造し、一段／＼向上するといふことになるが、斯くの如きは、倫理の所談であつて、宗教の第一義とする所ではない。宗教の目的は、轉迷開悟であるが此の轉迷の轉の意義たるや、一物が時間の連續する上に於て、漸次に改造されたり、空間的に次第に擴大されるの意義ではなくして、轉化とか轉換とか稱し、恰も北を指す羅針が、正反對の南を指すが如く、精神上に起る一體兩面の靈妙なる變化を言ふのである。謂ゆる精神の方向轉換である。故に時間・空間に超越して、全くそのまゝといふ味ひである。圓融圓滿頓極頓速とか、煩惱即菩提とかいふ風情は、正に此邊の消息を語るもので、宗教の宗教たる所以茲に在り三、爾り、科學的説明も、倫理的規定も、超越したる所に、宗教の妙味は、在つて存するのである。ところが、かゝる圓轉滑脱たる、精神の方向轉換は、どうして得られるかといふに、祖

師之を説いて、如來の廻向に由るとせられてある。蓋し、祖師の謂ゆる廻向は、絶待の他力を意味し、前に述べたやうな、加被・擁護・攝理の分齊に於けるの半他力ではない。假りに斯やうな半他力で救はれることになる、前述のとほり、自己の改造に、多大の努力と時間とを、費やさねばならぬ譯であつて、祖師の教は、未だ以て、宗教の極致を道破するものとは稱しがた。祖師自らも、斯の如き教を要門の教、若くは眞門の教と稱せられて、祖師御自身の教と、遙に異つたものだとせられてある。祖師は自分の教を、横超の直道と稱せらるゝが、その意味は、科學的な考や、倫理的な考から離れた、宗教獨特の妙味を、遺憾なく發揮せしめた教換言せば絶待の他力といふことである。これが祖師の謂ゆる

淨土眞宗を案するに、二種の廻向あり、一には往相、二には還相なり

の御釋のおこゝろもちである。

四、祖師の御時代までの、有ゆる宗教も、幾分か他力を説かぬではなかつたけれども、祖師の如く、絶待の他力を、高潮しては居ない。何れも五に五を足して十、四に六を足して十式の論法であつた。そこで祖師の「淨土眞宗を案するに二種の廻向あり」といふ宣言は、頗る奇異の想を以て、迎へられたに相違ない。併し乍ら、祖師の宣言は、たしかに宗教の眞諦を、道破してをる。故にあの宣言を、今日の時代で言ふならば「宗教は一切の科學・哲學・倫理を超越した

宗教獨立の宣言

るものである」といふやうな宣言となつてあらはれるであらう。私はあの宣言を、大正式に翻譯して、右の如く言ひたいのである。

化卷末尾に載せられたる、後序の文から窺へば、「諸寺の釋門、教に昏して、眞假の門戸を知らず」と云つて、南都北嶺を始め、宗教界舉つて談理に傾き、宗教の眞諦に昏い、又「洛都の儒林、行に迷て邪正の道路を辨ふることなし」で、世間の學者は、猶ほ更、正邪の區別がつかぬ。そんな時代に、理窟を離れた、全他力のお教を宣傳して、廻向の宗教を唱へられたてふことは、學問(或は學問に拘束された宗教)已外、道德(或は道德的宗教)已外に、眞宗教の獨立、(若くは獨立の宗教)を唱へられた譯合である。この意味に於て、祖師は、法然聖人が聖道門の寓宗であつた淨土門を、聖道門外に獨立せしめられたのを、更に學問的羈絆、道德的羈絆から脱せしめて、常に佛教中の、他の教と對等であるばかりでなく、學問や道德と共に、人文現象として對等の位置に在り、宗教は宗教で、特殊の領域を占めるものであることを、示されたものである。

五、教卷に於ける、特に重要問題の第二「出世本懷」は、教卷の上でも明かであるとはり、上述の獨立の宗教の權威を説明されたものである。祖師は五德瑞現と、「如來出興於世」の經文を以て、ごくあつさりど、餘り理窟を并べずに、論結せられたが。存覺上人になると、頗る至れ

法然聖人
と親鸞聖人

宗教の權威

り盡せりの説明を試みられてをる。今日の宗乗では、先づ之を以て此問題を解く標準として居る。併し乍ら、道理や理窟を、如何に立派に築きあげてみたところで、實際、間に合はぬものなら、何等の權威もないのであるから、此問題を解く最後の論は、機教相應といふことである。即ち如何に道理上、卓絶した宗教でも、時代人心の要求に應ずることが出来ないならば、權威なき宗教であつて、その反對に、道理や理窟は、左まで高尚幽遠ならずとも、よく時代人心に適應するものに、權威があるのである。されば歴史及び社會といふ、實に懸けて振つて見れば其の評價は、自ら定まるもので、強ちに佛の本懐、非本懐を論じて、宗旨自慢をする必要もないが、教卷は前にも云つた如く、大向の話であり、當時の教界にはかゝる議論も大に必要とする所。又退いて考ふれば、祖師御自信のまゝがあの通りであつたのである。されど七百年後の今日、此の祖師の思召を傳承すると共に、何等か別の方法を以て、かゝる問題を解決する必要はないであらうか。私は、若も祖師が、今日假りに再誕せらるゝならば、恐らく七百年已前と同じ形式の下に何時までも宗旨自慢で御満足はなさらぬであらうと思ふ。教卷を拜讀し乍ら、こんな考が腦裡を往返し、遺教弘通の我々の用意に就て、色んなことを考へさせた。

宗教の評價

索引

(五十音順)

ア

- 安藝本……………一四七、六
- 足利文庫……………二九、一四
- 阿闍世王の譯名……………一九九、一四
- 阿難……………二六九、二
- 阿彌陀經……………五四、四〇、五八、一一
- 安居……………一五二、三

イ、井

- 有力なる四秘事……………一四三、六
- 易行院法海……………一六〇、一七
- 章提……………二〇一、六
- 章提の權實……………二〇八、九
- 一語兩釋……………三六、六
- 一切經の種別……………五一、一
- 一宗の要義……………二三、六

索引 ア、イ、井、ウ、エ、エ、オ、ヲ

一宗の目的……………一八二、一〇

- 一心一向……………三三、二
- 一心五念……………七四、一五
- 一乘究竟……………二九四、一
- 一念多念……………四四、一
- 一枚起請文……………八一、一三
- 一益法門……………一四二、二
- 稻田の撤退……………四一、二
- 稻田と吉水……………三、九
- 因果撥無……………一三九、一四

ウ

- 有念無念……………四四、五
- 雲華院大舍……………一六〇、一三

エ、エ

要眞二門の教行信證……………九八、一〇

- 要門の機……………九八、四
- 慧海……………一六一、三
- 廻向……………九一、三〇、二三三、九
- 慧空……………一五一、一四
- 繪系圖崇拜……………一四一、七
- 廻向の語義典據……………三三三、二
- 越中空華……………一五九、一
- 慧然……………一六〇、八
- 圓乘院……………一六〇、一四
- 延文本……………一二六、九

オ、ヲ(ワ)

- 雄健天……………二八八、八
- 往還の關係……………九四、六
- 往相……………一一一、四四、一〇、九

往相廻向……………二四〇、二
 横出堅出……………三三、一四
 王舎城事件と我等……………二〇二、七
 王舎城の悲劇……………二〇一、一四
 黄蘗版……………五一、一〇
 岡崎の靈夢……………二二、一〇
 オカマズ秘事……………一四二、八
 御聖教……………一五〇、二
 大谷派本……………一四五、二
 隱彰顯密……………三六、三〇、一〇、一一

カ

皆往院……………一六〇、一五
 開宗の意趣……………二五七、九
 康永本……………二二六、七
 強縁……………二二五、一三
 講學史の時代区分……………一五三、一
 香月院……………一四〇、一
 講師……………一五四、二
 講主……………一五三、一四

合寫本……………二四、一五
 合寫本の奥書……………一三一、五
 仰誓……………一五九、五
 高麗版……………五一、六
 學堂……………一五一、二
 學業だのみ……………四三、二
 覺經の譯者……………二八三、五
 覺經文に對する二釋……………二八五、五
 各祖の法門と本典の組織……………九七、三
 覺存二師時代の邪義……………一三九、七
 學寮……………一五一、一三
 賀古の教信……………一七、五
 鎌倉時代……………一〇、二
 鎌倉時代の二大宗教……………一、一
 上三祖……………六一、八
 上三祖の主張……………七四、九

キ

救済の無限……………二四二、二
 機實……………一五七、八

機法合説……………五七、九
 機法上の行信……………二一五、一五
 機の趣入……………九二、五
 經意……………五六、一三
 憬興……………二八七、一三
 慶秀……………一五四、一三
 經相……………五八、一六
 經體……………二四九、一〇
 行……………九二、二〇、二四、一一
 行基菩薩……………七、九
 行基の神佛同體論……………七、九
 行信……………二一五、九
 行信問題……………二一五、九
 行信論……………一五三、八
 行中攝信……………一九一、一〇
 逆謗闡提……………二〇三、五
 錦織寺傳……………一六、一三

ク

空華派……………一五八、一四
 空華三師……………一五八、一五
 苦行だのみ……………一四〇、二三
 九卷本……………一五五、六
 九條兼實……………八五、二
 口傳鈔の三經觀……………五七、二
 功德の寶……………二四七、八
 愚禿……………一八三、八
 愚禿の語據……………一八三、一〇
 會讀法……………一五九、一六
 月空……………一五四、九
 寛永版……………五一、九
 寛永本……………一四四、一〇
 勸學堂……………一五一、一五
 觀經の宗體……………七九、一二
 觀經の念佛……………六五、一〇
 寛元本……………一四四、八
 觀小二經の表裏……………三五、一一
 冠註……………一四七、九

環中……………一五九、一七
 關東本……………一二三、二
 關白兼實……………一五、九
 寛文本……………一四三、四
 觀無量壽經……………五三、一四、五八、九〇、六五、一〇

ケ

藝輦……………一五九、三
 教……………九二、一〇、二四、九
 教義……………一五〇、三
 教義と教義時代……………一五〇、二
 教義の進歩……………一九、一
 教卷の組織……………二〇、三
 教行證……………一八三、一
 教行證と教理行果……………一八一、一一
 教行信證の基礎……………九五、九
 教行信證刊本の種類……………一四四、九
 教行信證の造由……………一〇四、一
 教行信證の三經觀……………五七、一〇
 教行信證述作の時と處……………一五、二

教行信證の大綱……………九〇、一
 教行信證追加校異……………一四七、一〇
 教行信證師資發覆鈔……………一五七、四
 教行信證鈔……………一五七、三
 教行信證樹心錄……………一五七、八
 教理行果……………一八一、一〇
 華藏閣……………一五四、九
 化身土卷……………九八、二
 稀代の本典註疏家……………一五五、二
 血脉と法脈……………八六、七
 化土卷の概要……………九八、二
 化土卷末再御起筆說……………一二一、七
 外題……………一〇五、九
 月支……………二二、一二
 結嘆の六句……………二九二、八
 化風……………二、三
 快樂院柔遠……………一五八、一四
 現行各本山藏版本と其原本……………一四四、一〇
 源信和尙……………六七、六
 還相……………九一、二〇、二三、一五

還相廻向	二四〇、一四
顯智傳	一六六、六
玄智	一六〇、六
元版	五一、三
光壽二無量	二四五、一四 <small>頁</small>
弘法大師	八、二
弘法の鎮護國家論	八、二
御恩報謝の念佛	七七、九
御開山	二三九、三
五願開示	九六、三
五眼	二八六、一六
後序	一〇六、一〇
後序より觀たる造由	一〇六、九
五存七缺	五六、九
悟澄本	一四七、六
五天良空	一六〇、七
御傳鈔	一一、二
五徳の瑞相	二九〇、一〇
御本書傳授式	二七、二
權假方便	一〇〇、九
權化の仁	三〇二、一三
忻淨厭穢	二七、六
忻淨中の厭穢	二九、一五
在家似同	七、四 <small>頁</small>
最初に開版されたお聖教	一四三、一三
西蕃	二二、一
草稿本	一一三、六
堺空華	一五八、一
三界	二七〇、一四
三經一致門	五三、一四
三經一論	五二、六
三經隱顯論	三三、一〇、五九、七
三經觀の歸趣	二〇六、一五
三經七祖	四九、一三
三經七祖の流通分	一〇九、一五
三經差別門	五七、一五
三經の中心	二五一、六
三願的證	六四、二
三願轉入論	五九、九
三業歸命	一五九、一四
三信即一心	二四、一〇
三信本末の解	二五、一
三信即一と本末三信	二四、四
三祖と四祖の相異點	六一、七
三部經の異譯	五四、五
三部經の大綱	五二、九
二法と四法	一九一、四
宗學者略學系譜	一六二、一六三 <small>頁</small>
宗體論	三四、七〇、二五七、三
宗致	二四九、八
宗名の意義	二三四、九
宗門學校の始	一五一、一一
四個格言	一七、七
四學系	一〇、一〇

四個大乘	三四、一
四字宗名	二三四、二
四字名と十字名	一九一、一
四帖疏	七九、四
四智	二八七、七
七高僧	五九、一五
七祖選定	六〇、六〇、七〇、五
七祖の法門	五九、一三
七祖法門の發揮	六〇、一〇
實行の宗教	九三、一〇
十劫久遠	三四、一〇
十劫秘事	一四二、一四
悉多	五〇、二
實明院功存	一五九、一三
史的關係より觀たる造由	一〇八、九
至徳	二〇四、一五
此土入聖得果	八一、八
磯長の參籠	一五、一四
磯長の靈告	一五、一〇
自然即佛	六九、九
四法の關係	九二、二
四法の中心思想	九一、八
四魔	二八八、七
下四祖	六一、九
下四祖の主張	七五、一〇
證	九二、二〇、二四一、一四
勝易の二義	八三、六
勝易の念佛	八三、六
正依の經典	五六、八
正宗五段の意	二五五、六
正信偈の註釋書	一五六、二
生身の如來	四六、一三
常隨泥近の性信房	三九、五
正雜論	一五三、八
聖徳太子	一六、三
淨土門内の餘流	二一三、一
聖人傳の種々	一一、一四
聖人獨特の訓讀法	三二、一
聖人の遺著	四七、七
正保本	一四四、二
小本御藏版	一四七、一
稱名正因	一四三、二
正明淨土の教	五二、二
稱名だのみ	一四〇、九
正明傍明	五一、一五
承元の法難	一四、一四
淨興寺本	二四、一四
淨業	一〇一、一
淨信院道隱	一五八、一五
乘專	一三七、一〇
定善散善	五八、九
乘智	一三七、一一
淨土	一八二、九
淨土宗	八一、一一
淨土眞宗	二三四、一〇、二三四、九
淨土門の機	九八、三
常樂寺本	二四、一一
捨穢忻淨	二二、一五
釋迦	二〇、一五
釋	一八三、二

緯空……………一八二、一五
 折指……………二〇〇、三
 綽如上人本……………一六六、一五
 闇世……………一九九、一
 宿縁……………二二四、三
 縮刷藏經……………五一、一一
 衆生往生の因……………二五六、一〇
 衆生往生の果……………二五六、一〇
 出世の大事……………二五八、一三
 出世本懐……………二七五、六
 出世本懐經……………二七五、六
 准玄……………一五一、一二
 純他力の信仰……………九一、七
 準知隱顯……………一〇一、一一
 序……………一三、一〇、一九、二
 諸教超過……………二二六、一五
 初期の教行信證研究……………一五七、一
 除疑獲證……………二〇五、一四
 諸師と善導の主張の相異點……………七九、八
 所詮……………九二、八

書題より觀たる造由……………一〇五、八
 所被の機……………七九、八
 諸佛の本懐……………二七六、五
 序文三段の大意……………一九四、九
 自力他力……………六六、一〇
 自力念佛……………五八、一二
 信……………九二、二〇、二二、二一
 信因稱報……………七〇、一一、七四、九
 信仰と教義……………二二九、一一
 信仰と智識……………一四八、七
 信疑の得失……………二二〇、九
 信樂房……………一三三、一二
 信行兩座……………二〇、一〇
 信と行……………二二、一五
 信卷の大意……………二四、八
 信具の念佛……………七六、六
 眞宗の開祖……………二二七、一五
 眞宗の學問……………一四八、二
 眞宗三大史家……………一六〇、七

眞宗十派……………八八、一
 眞宗十派の略系譜……………八七、二
 眞宗の詮要……………一〇八、四
 眞宗の相承……………八六、九
 眞宗の大綱……………二二二、七、二四〇、二
 眞宗獨立の三大要素……………七〇、二
 眞宗の名の通局……………二二二、一二
 眞實……………一八二、一四
 眞實教……………二二四、八
 眞實中の方便……………一九〇、一三
 眞實利……………二七、三
 信心一異の論……………一〇、一四
 信心爲本……………七五、二
 信心正因……………六九、七
 信心正因稱名報恩……………七二、二
 信心證論……………二、二
 眞淳……………一五二、一〇、一六、一五
 眞俗二諦……………四四、四
 深諦院慧雲……………一五九、三
 神通輪……………二二七、一五

神佛同體說……………七、一〇
 眞本の種別と所在……………一三、二
 眞門の機……………九八、五
 親鸞……………一八三、一四
 親鸞聖人の三經觀……………五六、一一

セ

苾芻輟……………一五九、四
 清書本……………一三三、七
 勢至の來現……………一四、一一
 石泉僧叡……………一五九、四
 石泉派……………一五九、三
 説意……………五八、一三
 説相……………五八、一六
 絶待の他方……………七七、一二
 是報非化……………八〇、四
 施物だのみ……………一四三、五
 詮要……………一〇七、九
 先啓……………一六〇、六

善巧方便……………一〇一、二
 善信……………一八三、一四
 善導大師……………六七、三、七六、一四
 善知識だのみ……………四四、七、八九、七
 善知識崇拜……………四四、七、八九、七、一四三、六
 選擇集……………八〇、一五
 選擇集の大綱……………八一、六
 選擇集と本典……………一〇九、五
 選擇付屬……………一九、一〇
 選擇本願……………七、一〇、二、一三
 選の字義……………二四七、六
 善導の使命……………七九、三
 善導と祖師の韋提觀……………二〇八、六
 善鸞……………二二、八
 善鸞の異義……………三三、九

リ

崇廓……………一五九、八
 總題……………一〇五、一〇
 宋版……………五二、一

僧撲……………一五八、一一
 祖師の一代……………三七、四
 祖師の高足……………三七、九
 祖師時代の異安心……………四三、一〇
 祖師時代の教界先覺者……………一〇、六
 祖師時代の本典寫本……………一四、六
 祖師の大經觀……………二五〇、五
 尊蓮本……………一三四、八

タ

大阿彌陀經……………一九二、一一
 第一義天……………二八八、一四
 大經の要旨……………二五八、一
 大經の十二譯……………五五、七
 大經内容一斑……………二四四、一〇
 對外關係より觀たる造由……………一〇、一
 代講……………一五四、六
 題號上の眞實と方便……………九九、七
 題號の訓方と意味……………一八八、一五
 大藏經……………五〇、一〇

大藏中の淨土法門……………五〇、一
 大士……………二八二、一
 大心海……………一五九、二
 泰通院義教……………一五九、一〇
 大濤……………一六〇、一
 大同……………一五九、八
 大無量壽經……………五二、一五。二四、六
 道綽大師……………六六、九
 高倉學寮……………一六〇、八
 高田派本……………一四九、一五
 高田本……………一三三、九
 玉日姫……………一七、二
 谷大藏の影寫本……………一三、二
 他の教義の應用……………三三、四
 他の判教の應用……………三三、九
 他力……………六三、一五
 他力回向……………七六、一六。二二、一〇
 他力の信心……………七七、五
 他力の詮顯……………一〇八、七
 他力の念佛……………七七、五

チ

誓……………二四六、三
 知空……………一五四、一
 智暹……………一五八、八
 潮音……………一六〇、四
 超世の悲願……………二四六、八
 調達……………一九九、七
 遲慮……………二二四、一〇

ツ

通元……………一五四、一四
 通由……………一〇七、七

テ

眞享校本……………一四九、七
 鐵眼……………一五五、八
 轉惡成德……………二〇五、三
 天親菩薩……………六二、八
 傳教大師……………七、一五

ト

傳教の本地垂迹說……………七、一五
 桃花房智洞……………一五九、一四
 等正覺……………二八一、二
 曇鸞大師……………六三、二

ナ

内題……………一〇五、九
 内容より觀たる造由……………一〇七、二

ニ

入室已前の念佛觀……………一〇三、六
 二經列名の祖意……………一九三、一三
 二雙四重の教判……………三三、九
 二相と四法……………九〇、一〇。一〇八、四
 二十四輩……………三九、七
 二種の御清書本……………一三三、二
 二尊の意思……………一〇七、一〇

二尊一致の教……………一五〇、二
 二諦教義の根據……………四四、六
 二重の因果……………二五四、八
 日蓮上人……………六、八
 日蓮の氣慨……………六、一三
 日蓮の警告……………八、一四
 日蓮上人の現世主義……………六、七
 二菩薩の引導……………一三、一〇
 日本三戒壇……………二九、一六
 二門の求道形式の相違……………二七、四
 若霖……………一五四、二
 如來の方便……………二〇三、二
 如來の本願……………二四九、七
 人間本位の宗教……………七八、四

ネ

念我稱名……………七四、二
 念佛……………六五、二

ノ

能化……………一五三、一五
 能詮……………九二、六

ハ

帛延三藏……………一九三、三
 破邪顯正……………七、五
 腹籠りの御聖教……………一三三、三
 播南轍……………一五八、九

ヒ

秘事法門……………一四〇、五
 非僧非俗……………一八七、四
 彼土入聖得果……………八一、八
 平等覺經……………一九三、一〇。二八三、三

フ

普寂……………一五五、八
 佛の救濟計畫……………二四〇、八
 佛救濟の靈場……………二四三、一

ホ(ハ)

佛光寺本……………一二五、九。一四五、一四
 佛性不空……………二八八、一五
 佛陀……………五〇、五
 佛陀の説法……………五〇、五
 普等三昧……………二八六、二
 不拜安心……………八九、九。一四二、八
 不拜秘事……………八九、九。一四二、八
 普門……………一五三、二

法霖……………	一五四、三	彌陀……………	二四三、二	吉水入室……………	一六、九
傍明浄土の教……………	五二、三	彌陀正覺の因……………	二五六、六	吉水禪室の繁昌……………	二、一〇
本願の行……………	六七、一四	彌陀正覺の果……………	二五六、七	夜中の法門……………	一四〇、一
本願寺本……………	一三三、三	彌陀法開展の順序……………	二〇七、六	リ	
本願力の體顯……………	七六、一三	明教院僧銘……………	一五八、一四	龍華輶……………	一五九、四
本願ぼこり……………	四三、一六	名帳勘録……………	一四一、五	龍華曇龍……………	一五九、五
本派本……………	一四二、二	明版……………	五二、四	龍樹菩薩……………	六一、一〇
本の三信……………	二四、一四	無明闇……………	一九七、六	立正安國……………	八、一三
本地垂迹說……………	七、一五	無量壽如來會……………	二八〇、一六	察……………	一五二、六
本典引用の諸經論疏……………	二六、九	迷悟の分齊……………	三三〇、一二	臨終正念……………	四四、八
本典私考……………	一五七、六	明曆本……………	一四三、一	蓮師時代の邪義……………	一四三、六
本典内の對他的法門……………	一一、五	門内の餘流……………	一八三、五〇、一八八、四	蓮師布教の態度……………	一三一、一四
凡聖同居土……………	八〇、一	文類……………	二九、一五	蓮如上人本……………	一三六、一〇
マ		藥師寺文庫……………	二九、一五	六願又は八願開示……………	九六、六
末の三信……………	二四、一五	ヤ		六要鈔跋……………	一三六、一〇
卍字藏經……………	五二、二	彌陀……………	二四三、二	六老僧……………	三九、七
未生怨……………	一九九、一四	彌陀正覺の因……………	二五六、六		

大正五年七月廿八日印刷
大正五年七月廿一日發行

教行信證講話大綱篇附
定價壹圓參拾錢



著作者 西谷順誓
 發行者 清水精一郎
京都市油小路御前通上ル
 發行者 下村卯之助
京都市五條通東洞院東
 印刷者 須磨勘兵衛
京都市北小路通新町西入

發行所

京都市油小路御前通上ル
振替口座大阪一〇八一五番
京都市五條通東洞院東入
振替口座大阪七一七九番

興教林書院

●宗學界空前の快著●

西谷順誓先生著

(再版出來)

眞宗教義及宗學の大系

紙數四百頁

定價壹圓八拾錢

郵稅拾貳錢

現下、日本佛教の精華として内外に喧傳せらるゝものは我が眞宗なり、立教以來、信仰界を支配するもの
茲に七百年、慈光遍く照破して六十餘州密さるゝもの、然るに翻て其の史蹟を顧みるに暗雲殆んど全面を覆
ふものあり、是れ豈に日本佛教として、且つ光彩ある宗門としての大恨事ならずや、著者慨然茲に見るも
ころあるあり、潛心史の研鑽に任ずるもの多年、深遠なる蘊蓄を傾注して此一書をなす、筆頭一轉、由來最
も暗黒面として知られたる覺如上人の宇宙、倫理觀を精査して現代思潮に一ヒントを與ふ、筆頭一轉、由來最
中興鴻業の始末を語つて餘さず、往々先輩未發の見を恣にする、自下、宗學の興起發展の跡を詳かにし、龍谷
山下二百七十年の學事瞭として掌を見るが如し、加之、或は大谷派に尋ね、或は高田派及び餘他の祖山に問
ふて廣く一宗教學の今昔を網羅す、蓋し著者の最も得意として任ずるもの、細を穿ち微を窮めて又餘蘊なし
其の徹到せる見は椽大なる筆と相俟ちて錦上更に花を添ふるの概あり、若し夫れ宗學史結論の一篇に至つて
は著者の確信を告白せるもの、歴史は繰り返すと云へるを見れば正に是れ著者が上下茫々七百年の宗史研鑽
に依つて得たる教訓たるに似たり、歴史は繰り返すと云へるを見れば正に是れ著者が上下茫々七百年の宗史研鑽
本將來絶待他方教を提げて精神界の開拓に任せんとする者、正に徐ろに養ふところなるべからず、而して
り。本書は是等の學侶教育家に向つて提供せられたる近來稀有の教科書なり、其の机上に見ゆるの期目睫の間にあ

●宗門教育者の指針●

眞宗婦人聖典

定價金五拾錢

郵稅四錢

今は婦人の覺醒時代なり、家庭の王者として、將た又子弟の教育者として、吾新時代の婦人は最も切實に、精神修養の急務を感じ
つゝあり、然るに修養に關する出版物の頗る繁多なる現今に於て、獨り婦人の讀物の殆んど絶無なるの概あるは、豈に嘗に婦人諸
婦の遺憾とする所のみならんや。本書はかかる現代の要求と出版界の缺陷とに鑑みて生れ出でたるもの、意を修養に注がるゝ婦人
速かに一本を座右に供へて精神修養の友とせよ。内容平假名正信偈、平假名阿彌陀經、讚佛偈、重誓偈、註釋入御文章女人往生聞
書女人教化集女人最要鈔、代々善知識御消息、坊守教誡、女性教誡外に悦びの跡として模範的眞宗婦人の小傳十數編を輯む。

眞宗とは何ぞや

定價金拾錢

郵稅金貳錢

本書は傳道文庫の第一編にして眞宗の開闢より眞宗の教義、眞宗の信仰、眞宗の道徳、眞宗の將
來等五編十五節に分ち、眞宗の教義が最も平易に簡明に紹介せらるゝ、眞宗の信仰によりて安住の
天地を求めんとする者、眞宗の如何なる宗教なるを知らんとする者、先づ本書に就いて見ば得る
所蓋し尠少ならざるべし。

御大典觀

定價金拾錢

郵稅金貳錢

曠古の御大典を如何に迎へ、如何に記念すべきか、御大典と吾人、御大典と精神上の革新、本書
内容大典の準備四節、大典の印象四節、大典記念六節、大典と佛教四節等。

西谷順誓師著

模範的空的前の布教叢書

佛教家說林

「佛教家說林」は、布教家諸師の模範となるべき、古今諸大家の説法、秘法、名著、秘籍、網羅し、有益なる話を、材料として、今、回、會、員、に、供、給、せ、ん、と、織、を、以、て、隔、月、一、冊、を、發、行、し、全、部、十二冊とす。

- | | | | | | | |
|-----------------------|------------------|----------------|--------------------------------|---------------------------------|----------------|---------------|
| 1
勸化談
法詞料
鈔集 | 2
一枚起請文
勸考 | 3
譬喻說法
集 | 4
王本願讚
談林
聖人一流
章談林 | 5
寶來佛照
寺說教
椿原眞佛
寺說教 | 6
大笑ひ
小笑 | 7
信仰說
話 |
| 光開寺
南演師 | 淨信房
充賢師 | 了空師
慧仰師 | 福成寺
大仙師 | 眞照寺
佛照師 | 黑淵
知圓師 | 雲山
龍珠師 |

發行所 京都都大路一〇八番通 興教書院

華嚴大系

京都帝國大學講師 勸學 藺田宗惠師序
 京都帝國大學講師 勸學 熱田靈知師序
 佛教大學教授 湯次了榮先生著

最新刊

菊版布裝上製
 紙數六百七十餘頁
 定價金貳圓參拾錢
 郵税金拾貳錢
 特價金貳圓

湯次先生は篤學の士也。特に其の專攻せられし華嚴學に至つては、既に堂々一家をなせる現代の俊英也。今や先生に「華嚴大系」の名著あり。即ち請ふて茲に上梓す。夫れ華嚴一乘の法門たるや。宏遠微妙、深く一代佛教の玄底に徹し、普く法界哲理の要諦を統ぶ。於茲東洋思想の研究漸く復活せんとするに際し現代の學者先づ華嚴を探らんと欲するも法義愈々玄妙にして研究愈々困難なり、しかも當代未だ適切なる研究の指針に擬すべき典籍を見ず、豈學界の一大恨事ならずや先生こゝに偉大の筆致を運び、該博なる蘊蓄を傾けて、本書を著はさる、蓋し此れが爲のみ、本書收むるところ實に五編謂く教史。謂く本經。謂く教判。謂く教理。謂く修證。整然綱要を概括して遺漏なく、懇懇縱横に説示して除蘊なし。一度、切要なる問題を取扱ふや發展の要旨、各祖の交渉、他家の對照、正統異義の檢覈を詳にし結ぶに先生の卓抜なる批判を以てす。されば、初心の學徒宜しく就いて學ぶべく、専門の成業、須らく依つて資すべし。佛教大學長藺田勸學は「檢覈攷索、剴切而詳密、蓋華嚴教海之津梁也」と稱揚せられ、華嚴學界の哲匠、熱田勸學は「編次整然、解義暢達、可謂近世之好著也」と推讀せらる。本書内在の眞價値以つて想見すべき也。敢て江湖に提供す。

佛敎大學講師 湯次了榮師著

(新刊出來)

漢和 大乘起信論新譯

全一冊 洋製
全三百餘頁
定價 金壹圓
郵稅 八錢

本論は大乗佛敎を學ぶ者の必ず先づ繙くべき典籍にして組織整然、論旨簡明なる事他に比類なき寶典也、然るに本書には義記、會本の刊行書少からずと雖、直に本論のみを講習せんごするに當ては、適當の良書甚だ缺乏せり、本書は之れが需用に應ぜんが爲、平易にして詳細なれば教科書となり、参考書となり、通俗講話用を兼ねたれば初學者には缺く可からざる良書、是非速かに一本を座右に備へられん事を乞ふ。

司教 湯次了榮師述

(第三版出來)

因明本作法講義

洋裝 美本
定價 七拾五錢
郵稅 八錢

京都帝國大學文學博士 松本文三郎先生序
文科大學々々長

文學士 羽溪了諦著

西域之佛敎

洋裝美本箱入
紙數五百三十頁
定價 貳圓貳十錢
郵稅 拾貳錢

特價 金壹圓八拾錢

郵稅 拾貳錢

世界の文化史上の一大秘密庫にして、殊に佛敎史上重要な地位を占むる西域地方即ち中央要細亞は、今や世界の學海に於ける研究の中心となり、各國の東洋學者は鎬を削りて之が研鑽に従事せり。然るに此方地の佛敎は研究資料の得易からざる爲、從來殆んど佛學者の顧みる所ならざりしが、佛敎史に深詣ある著者は大に之を遺憾とし、多年博く東西古今の記録を涉獵し、且つ最近頻りに行はれたる中亞險檢の結果を参照して、茲に尊重すべき新研究を遂げ以て佛敎史上の一大缺點を補へり。されば本書が佛敎並に東洋學に興味を有する者の必讀すべき珍書たるを敢て喋は要せざる所也。

附錄著者の嚴密に編輯せし印度西域地方の詳細成る地圖を添附す

發行所 京都市五條東洞院東番 法林館

文學博士 前田慧雲師序 黑瀬知圓師著

第二版

佛の心と親心

言文一致總かな
四六版洋裝箱入
定價七拾錢
郵稅八錢

是れ黒瀬氏の處女作なり、同氏は父を喪ふて二十年、母に離れて他郷に遊ぶこと十餘歳、寂寞の裡に父を戀ひ母を慕ふ真情は、迸りて宗教的信念となり、久遠の親心に泣き、同體の大悲に咽び、如來の一人子たる恩寵に感激しつゝ、肉の親をとほして靈の親を讃へたる衷心の告白を記述せるもの即ち此書也。内容は久遠の親心を畫きて十章、親心の徹底を嘆する十章、親心の感激を録すること十章、是れ著者管に信念の告白たるのみならず、著者が常に獄窓に呻吟する罪の子に接して、如來の親心を宣傳する教化の實材也、記録也。體裁は優美なる四六版四號、活字總振假名、教家の資料、家庭の好書として必讀を推奨す。(教海)

世評の一端

●終養世界評 本書は絶對他力の
本願の上に立つて、如來の聖影を慈
親の上に仰ぎ、久遠の親心の悉なき
を述べられしもの、言々句句々悉く血
著者の態度の如何にも喜ばしく或
は自己を告白し或は例を先賢に引
或は如來の聖教を證し、和歌俳句
を擧げて詳々として説述すること前
後三十章、巻頭に前田博士の序あり
布教資料として再讀の價値あり。

●警世曰く (前略) 詳々親心を
玩味しつゝ、佛の御心を推し參らせ
るものなれば、其の言々句句々悉く血
のホテリあり、脈の顫動あり、心
に純なる著者の實感と感らざる心
の眞面目さが横溢して、遂に氣持よ
く不知不識著者の心の歩みと共に引
づられて行くが如き心地す。

●學雜誌評 本書は著者が親心
を通じて佛如來の御姿を仰きたる二
十年來の信仰録にして、久遠の親心
親心の徹底、親心の感激の三章に分
ちたり、豈に親の慈愛を説き横に交
其文全篇悉く一大藝術品なりと云ふ
も過言にあらず、その警世實話に實
に血と涙とを以て描かれたるものと
云ふべし。

●宗教界曰く (前略) この世の中
で佛の心に最も近いものは爾親の慈
悲である。本書説くや博く諸經論を
參照し擧むに古き或は新しき譬喩引
例を以てし活用して居る章を分
ち三十章全篇總振假名で行文平易布
教家一讀以て自ら材料とすべく
(後略)

司教 花田凌雲師著

新刊

唯識要義

菊版總クロス
總紙數四百餘頁
正價壹圓四拾錢
小包料拾貳錢

本書一諸君の伴侶にばらた

本書は、花田司教が唯識教義の全般に亘り、平易簡明なる行文を以て、誰人にも容易に了解し得らるゝやう、大要を叙述せられたる近來の良本なり。本書一たび諸君の伴侶たらば、また唯識教義の難澁と複雑とに苦しむこと無かるべし。今日佛教學校と一般の學窓とに論なく、佛教々義一般的叙述の良著を必要とすること最も切にして、しかも佛教々義の基礎たる唯識教義に此の種の著書嘗て刊行されず甚だ遺憾とする所なりしが、本書の出版によりて此の缺陷は十分に補充せられたるものなり。殊に巻末に五十音別名目索引を附して、如何なる名目も即時に解釋を得る便宜を計りたるは佛教書籍として稀に見る親切なり。著者の學殖と文筆とに就ては世既に定評あり、敢て贅せず本院は唯識教義叙述の唯一の良書印刷既に了れるを告げ江湖諸君の書窟に晋むること然り。

花田凌雲師著 大無量壽經各章大意

定價 貳拾錢

佛大講師 羽溪了諦先生著
文學博士 前田 登雲 師序
阿彌陀佛の信仰
特價八拾錢 定價壹拾陸錢

文學博士 井上 哲次 師序
文學博士 前田 登雲 師序
二宮尊徳翁の佛教
佐藤巖英師述
正價五拾錢 郵稅八錢

佐藤巖英師講話
讚歎異鈔講話
定價六拾五錢 郵稅八錢

勸學 利井鮮妙師述
信仰清話
正價六拾錢 郵稅八錢

大洲渡然師願解
粟津藤三師願解
御傳鈔講話
元名演義
正價五拾錢 郵稅八錢

四版新編 六版新編
阿彌陀佛の信仰は一切信仰の終局である。本編の著者羽溪學士は敬虔なる信仰生活に住して、常に阿彌陀佛の信仰に最も熱心なる青年學者である。本編は即ち其の信仰的文辭の集まりである。而も書中引例の古今東西諸家の實驗的信仰は讀者をして翻ゆる感情一偏の信仰に陥らしめず、能く智的信仰を成立せしむるの良著である。

二宮尊徳翁の報徳主義と大乘佛教の教理と、翁が實踐躬の成功事蹟を經緯し嘗て農會に於て講演せられたるものは實に帝國民を教養する無二の福音なり。

本書は昨年北海道講習會に於て、現代の求道者に聖人の御信仰、聖人の御精神を紹介し絶對他力の妙味を味び、眞俗二諦の根本義を、實例を挙げ事實を示し、誰れ人にも了解する様、實地に講話せられたるもの、特に附録せし「倫理と宗教」の一編は尤も必讀を要す。

行信教授の名は、夙に眞宗子弟の耳に轟き、利井老和上學徳兼備の名は、既に派内の學界に鳴れり。此の書收むる處、すべて百章百卷の阿彌陀の大徳を傳へ、句々恩海の情味を掬すべく、一讀三嘆、趣味の裡に知らず識らず、光明海中に浴するの想ひあり。

本年一月和上示寂に付、御遺訓講話等二十章餘を増補せり無知の人も無信の人も、悉く讀んで其の趣味に感ぜん。

此の御傳鈔上下十五段は、第三宗主覺如上人報恩謝徳の爲、當流の法義他力安心の深旨を聖人御一代の行化に寄せて讃嘆せられたるものなり、今此の講話は、職主師内典外典諸書を纂涉し、聖人御化導の事蹟、開宗の模範等、細大漏すなく師の能辨博識を以て、誰れ人にも能く解する様、醫唯因縁を交へて説教せられたるものなり。

勸學 東陽圓月師述
二卷鈔禾人錄
正價七拾錢 郵稅八錢

勸學 烏地默雷師願序
補教 米村水信師述
宗要安心論題
正價四拾五錢 郵稅八錢

勸學 東陽圓月師述
易行品略解
正價貳拾五錢 郵稅四錢

佛大講 師雲山龍珠師述
六字釋講話
正價貳拾八錢 郵稅六錢

勸學 利井鮮妙師述
眞宗論題 誦筌
正價六拾錢 郵稅八錢

本書の特色は、肝膈骨目さいふ、眞に安心論題は一宗の肝膈なり骨目なり。本書は補教米村永信師の新著にして從來の論題書とは大に其面目を異にし、各題に就て出據、釋名義相、問答釋疑の四段に分ちて頗る丁寧に記述されたり。文章は平易にして明了なりよく宗學書流の難澁繁雜の弊を避け、義門は廣く諸説を擧げて一義一派に偏せず讀者をして宗意安心の岐路に惑なからしむるを主とせられたり。

離易二道の妙判を垂れ玉ふ、眞宗第一祖龍樹菩薩の、十住毘婆沙論易行品を講述せしもの也。今回再版に際し學界の便益を計り左の數題を附録す

- ▲南天大士の略傳 ▲淨土教として見たる華嚴經 ▲華嚴經の行者善財童子 ▲華嚴經と易行品 ▲本宗教相判釋論 ▲本宗教相判釋論

湯次了榮師 雲山龍珠師

六字名號は生佛の因果を總括したる妙法句なり、善導大師此の六字の深義を開闡し、念佛往生の意義に於て千古の鐵案を下し玉ふ、即ち玄義分の六字釋是なり。師又此の釋義の妙意を指摘せられたり。

本書は初心者の研究に供せんとして刊行したるものなれば多くの異義異説を併呈し讀者を岐路に迷はしむるが如きを避け専ら一義を以て貫つて容易に義門を了得せんせり、又研究の進歩に連れて隨自補註に便ならしめんため編輯に意を用ひ欄外に外くの餘白を存せり本書によつて由來研究を難むせし宗學も必ず容易に其奥堂に達せらるならん。

發行所 興教書院 (東京小油路前通上) 電話一八〇一

發行所 興教書院 (東京小油路前通上) 電話一八〇一

2987

司教雲山龍珠師述

正信偈講義

タロス綴九拾五錢 並製七拾五錢
郵税拾貳錢 郵税八錢

大評三版
頁餘百三版菊

古來正信偈の講義少しとせず、然れども時勢の變遷によりて、其の教授上の新法講義の體裁自ら變化を免かれず本書は佛教大學講師雲山師が多年の間六條學會に於て時勢に順じ實地に講述せる事數十回實に三經七祖の大綱に涉り正信偈の深意を明瞭に解説せしもの也。祖釋會本即ち六要鈔正信偈大意銘文を別冊附録す。

勸學是山惠覺師述

三帖和讚講義

定價壹圓六拾五錢
郵税拾貳錢

菊版全三冊
紙數百餘頁

三帖和讚は眞實大師御老後の選述にして其能詮の文字は平易なれども所詮の義理は深廣にして遠くは釋尊一代の教理を該括し近くは三經七祖の妙蘊を攝盡す本書は是山師が多年佛教大學にて講義せられたるものにして内容最も要細なる良書なり。

佛敎大學
諸經論大意

定價
郵税八拾五錢

菊版假綴
紙數約二百頁

諸經論大意は佛敎大學并に專修學院の學課目中に加へられ又第三回の教師試験よりこれを課せらるる本書は「本典」七祖聖敎等に引用せられたる經論を選びて其大意を解説せり。

輔教脇谷篤謙師述

諸經論大意

定價
郵税四拾五錢

菊版假綴
紙數二百頁

諸經論大意と云ふは、恰も大藏經大意といふと同じことで大藏經といふ中には、經、律、論、禪、總じて一千九百十六部、八千五百三十四卷、本書は宗祖的聖人が本典に御引用になりたる諸經論を、五時即ち華嚴、阿含、方等、般若、法華、涅槃の順序によりて通俗に其大意を陳べたるものなり。

勸學
佛敎通史

定價
郵税六拾錢

菊版總一冊
紙數二百頁

由來我國佛敎史に關する書少しとせず、然れ共其多くは専門家の手になり一般人の解しがたきもの多し、本書は政敎一致、密敎隆盛、新宗派興起、新宗派傳播佛敎の保守、佛敎覺醒の六時代に分ち、佛敎の傳來より大正の今日に至る一千五百年間の歴史を尤も平易に叙述せられたれば日本佛敎の歴史を知らんとする教科書用の良書なり。

院書教興

上通前御路小油部京
番三一四京東營廣

所行發

終

